

ISSN 1345—7861

国際関係研究

第36巻第2号

平成28年2月

日本大学国際関係学部
国際関係研究所

国際関係研究

第36巻第2号 平成28年2月

日本大学国際関係学部
国際関係研究所

国際関係研究

第36巻第2号 平成28年2月

目次

論文

- コミュニティ形成による低所得層農民の新しい貧困改善手法の考察…………… 福井千鶴 …… 1
- 『クラウディアの祈り』を読む
—不条理に翻弄された愛とその超克—…………… 安元隆子 …… 13
- 他異権・難民・ヘテロトピア・文化価値摩擦
—スウェーデンの難民大量受入れ問題—…………… 石渡利康 …… 23
- 新安郡のキリスト教と島民生活…………… 金美連 …… 31
- A Contemporary Perspective on the Benefits of Teaching an
Integrated Content/ESL course Specific to a Discipline …………… Jody A. FRIBERG …… 39

コミュニティ形成による 低所得層農民の新しい貧困改善手法の考察

福井千鶴

Chizu FUKUI. Study of the new poverty improvement technique of the low income farmer by the community formation. *Studies in International Relations* Vol.36, No.2. February 2016. pp.1 – 12.

According to the *United Nations Millennium Development Goals Report 2015*, there are still 836 million people living in extreme poverty, which corresponds to about one in five persons in developing regions living on less than \$1.25 a day. For the UN and other international institutions, the post-2015 development agenda requires further measures to reduce poverty in poorer countries as well as a renewed commitment from developed countries to strengthen international organizations and to target aid so that both work to lift people out of poverty. Current measures for poverty alleviation emphasize economic development, however, which founders as and when economic growth stagnates. The international community has thus shown interest in other ways to alleviate poverty that do not rely upon growth. My paper examines one such way. It shows that by helping or guiding farmers in poor farming communities, agricultural productivity can be boosted and people are thereby lifted out of poverty without relying upon standard models of economic development.

1. まえがき

国際諸機関では貧困軽減対策が進められている。国際連合の発表によると、2015年の1日あたり1ドル25セント以下で暮らす極度の貧困人口は8億3600万人である。国際連合では、先進国の援助支援の強化及び貧困国や国際諸機関における一層の貧困軽減に対する努力が必要であることが示唆された。現在、国際諸機関や貧困国で進められている貧困軽減方策は、主に経済開発プロジェクトに重きが置かれ、経済成長の停滞により貧困改善が進まない現象が起きている。国際社会では経済成長に左右されない貧困層の所得向上に即効性があり効果的な貧困軽減手法の開発が重要な課題となり、その課題解決が急務となった。本稿は、科学研究助成金基盤（C）で平成25年度採択された課題研究番号「25380643」「小規模農民コミュニティの形成と日本人移住地を連携した新しい貧困軽減手法の開発」の研究成果を基に経済成長に左右されず、貧困層の農民の所得向上に効果的な貧困軽減手法について、継続的な収穫が見込めるブラジルのトメアス日本人移住者が開発したアグ

ロフォレストリー農法を採用し、貧困層の小農民で形成する農民コミュニティに対し農業指導を行うことにより貧困軽減が図れる新しい貧困軽減手法について考察し、提言するものである。

2. 新しい貧困軽減手法の必要性

2.1 これまでの貧困軽減手法

1950年代から国際機関（世界銀行、IMF：国際通貨基金、UNDP：国連開発計画など）では貧困軽減問題が重要課題として取り上げられるようになった。1950年代の貧困軽減方策は、所得貧困の改善を目的とした経済成長を伴う開発プログラムの推進が主流であった。当時の貧困軽減策は、ハーシュマンの「トリクル・ダウン理論」（経済成長の恩恵により富の分配が低所得層に及び貧困改善をもたらすとした理論）に依拠した経済成長優先の施策であった。1970年代に入り、オイルショックの影響により経済成長が停滞し、トリクル・ダウンに依拠した所得改善が望めなくなった。セルドア・シュルツが人的資本の重要性を提唱し、これまでの経済成長の推進方策に加え、個人の資質改

善（BHN：Basic Human Needs）戦略がILO（国際労働機関）の、1976年ジュネーブ会議で提唱された。その後、さらに開発途上国の経済成長が停滞したことで経済成長に伴う所得分配論より貧困軽減に直接裨益する効果的な方策が必要となり、アマルティア・センの提唱する「人間開発」論に視点を当てた貧困軽減論が国連、世界銀行、UNDPなど国際諸機関で取り入れられるようになった。1990年代後半から21世紀に向けた貧困軽減方策は、これまでの経済成長促進論に加え、この人間の基本的資質の向上を併合した貧困軽減策が推進されるようになり、この手法が継続されている。さらなる近年の世界経済の不況などの影響によりMDGs達成の遅れが顕在化し、国連、世界銀行はじめ関連の国際機関では目標達成の遅れを取り戻すために、政府開発援助（ODA）と先進国の援助を強化する方針が示された。また、MDGs達成に効果的な貧困軽減手法の開発が重要な課題となり、その解決が急務となった。

2.2 望まれる貧困軽減手法

国際社会で進められている貧困軽減戦略は保健医療、教育、水の確保や生活環境の整備などを中心とする貧困国や貧困地域の社会インフラの整備、所得向上のための経済成長を促進する開発プロジェクトなどにODA資金を投入し国レベル、地域レベルの貧困軽減を推進することに主眼が置かれてきた。この戦略では貧困軽減の進捗度合は経済成長の進展具合の影響を受け、経済成長が停滞すると貧困軽減が進まなくなる。経済成長に主眼を置いた貧困軽減戦略では、前述した「トリクル・ダウン理論」に依拠していることから経済成長により富が低所得層に浸透し貧困軽減が進むとされているが、富の分配に格差が生じたことと、貧困層に直接裨益することがないため即効性が極めて乏しく貧困軽減の目標達成がなかなか進まないのが現状である。今日のように世界的に経済成長が停滞している時代には、さらに目標達成から遠く危険性が指摘される。このような背景要因より貧困軽減目標を早期に達成するための即効性のある貧困軽減手法の開発と経済的影響を受けにくい貧困層住民に直接恩恵を与える貧困軽減手法の開発と

実施が必要であると思慮される。

3. 新しい貧困軽減手法の考察

本稿で貧困軽減を求める対象は、南米の日本人移住地の支援により貧困改善の事例研究とするため、日本人移住地の周辺に居住する貧困の小農民に主眼を置く。主たる研究対象地域はブラジルパラ州のトメアス日本人移住地とする。対象地域とする理由は世界的に注目を集めている森を再生しながら継続的な収穫が年間を通して得られる画期的な農業生産ができるアグロフォレストリー農法（農業と林業を併せた複合農法、以降複合農法と称する）を開発し、小農民でもこの農法を採用し農業生産活動ができることによる。この農法が小農民の貧困軽減に効果のあることを以下に述べる。

3.1 貧困軽減に求められる条件

これまでの経済成長と開発プロジェクトを主体とした貧困軽減手法では、経済成長が停滞することにより貧困の改善が進まないこと、貧困層に直接裨益しないことは前述した通りである。この方法では、今日のように多くの国で経済成長が停滞している社会では貧困の改善が見込めない。このような社会情勢の下で求められる貧困層小農民の貧困軽減の条件は次の6点を挙げることができる。

1) 貧困層に所得の向上が直接見込まれる…トリクル・ダウン理論に依拠した経済成長を促進すれば貧困が改善できるとする、経済成長論に基づく貧困軽減手法では貧困層の家族には直接所得の向上は見込めない。この理由から直接的に貧困層農民の所得向上が見込める手法が必要である。

2) 貧困層の所得向上が即効的にもたらされる…前項で述べた経済成長を促す貧困軽減手法では、社会全体の経済成長・活性化の効果がみられるまで貧困の改善が進まず、貧困改善の進むまで相当の期間を必要とし、継続的な収入を必要とする小農民に対する貧困改善手法としては即効的でない。このことから貧困層農民の家族に直接所得向上をもたらす手法が望まれる。

3) 年間を通して農業生産活動により収穫（収

入) が得られる…貧困層家族の多くは収入の貯えがなく、収穫した農産物を毎日のように売りながら生活しているため、年間を通して収穫が得られる農業生産システムが望まれる。

4) 耕作面積が小さい農民でも生活を維持するに足りる収穫が得られる…貧困層農民は所有する農業生産用の用地は小さい者が多いので、小規模農園でも収穫・収入が見込める手法が必要である。

5) アマゾンの熱帯雨林を再生しながら農業生産活動ができる…多くの小農民はアマゾンの熱帯雨林を伐採し焼き畑農業をしながら生活しているため熱帯雨林の消失につながっている。消失する熱帯雨林を再生しながら農業ができ、収穫を伴う農法が必要である。

6) 農民の定住化が図れる…小農民は熱帯雨林を伐採し焼き畑農業をしながら生活していて、3年ほどで土地が疲弊し農産物の収穫量が減り、新しい土地を求めて森林地帯を移動して農業生産を行い生活している。焼き畑の農地には主食となるキャッサバ¹⁾を主に植え、自給自足用の野菜やトウモロコシ等を栽培している。この方式では熱帯雨林の中を、土地を求めて、定住することなく移動を繰り返し、日常生活がやっとできる程度の生活を続けることになり、貧困から逃れられないでいる。継続して収穫が得られる農法を導入し、定住化することにより安定した農業生産ができる手法が必要である。

3. 2 複合農法について

3. 2. 1 アグロフォレストリー農法(複合農法)

アグロフォレストリー (Agroforestry: 以降複合農法と呼ぶ) はアグリカルチャー (Agriculture: 農業) とフォレストリー (Forestry: 林業) の合成語で、農業と林業を同時に行う複合農法で、年間を通して短期収穫が可能な複数の農作物や長期間収穫ができる果樹類、それに加えマホガニーや合板用のパリカなどの樹木を混植し、継続的な収穫ができる画期的な農法である。また、森を再生しながら農業を行うことで地球環境保護の農法として世界的に注目されている農法でもある²⁾。この農法では、お互いが干渉しないよう果樹や高木苗を植栽する際に、4メートル間隔で一定のルー

ルの下に配植する。このルールは日本人移住者が長年の農法研究の下に発見したルールであり、現在はトメアス総合農業協同組合 (CAMTA: Coop. Agricola Mista de Tomé-Açu) の農業指導員により混植する苗木や農産物の苗の選定、配置、施肥、植栽剪定方法などが研究され複合農法 (SAFTA: Sistema Agroflorestal de Tomé-açu トメアス方式アグロフォレストリーシステム) が確立されつつある。また、最近ではデンデヤシ (アブラヤシとも呼ばれている) の栽培が盛んになりデンデヤシとの混植の研究が進められている。

3. 2. 2 複合農法の優れている特徴

研究を推進する中で判明したトメアス方式複合農法の優れている点を以下に挙げる。

1) 収穫が年間を通して、かつ長期にできる…収穫までの時期がかかる果樹や胡椒を、収穫時期を考慮しながら植栽し、この樹間に短期作物としてトウモロコシなどの穀類、カボチャやスイカなどの果菜、イモ類の根菜などを植えることにより、年間を通して短期作物が収穫でき、果樹の収穫が可能になるまで農作物の収穫ができ、果樹などの収穫が始まると短期作物の収穫に加え果実や胡椒の収穫が加わり、短期間の収入が見込め、かつ長期間の収穫が可能になる優れた特徴を持つ農法である。また、20~30年ほど経過すると高木が育ち材木として収益を上げることになる。高木の生育を待つことなく農業生産による収穫が見込めるので林業を職とする人々にも継続的な収穫が得られる複合農法でもある。小農民でも収穫が年間を通して継続的に見込め、さらに、これまでの焼き畑農業と違い、果実の収入が見込め所得向上に極めて有効な農法といえる。

2) 森を再生しながらの農業ができる…高木の植林をしながら樹間に収穫のできる果樹や短期作物を植えることにより森を再生しながらの農業が可能である。

3) 小面積の農地からでも農業生産が始められる…小規模の農園 (0.5~1ha) (ヘクタール) を単位に複合農法の試験農園を作り収穫の状況を確認し、植栽する苗木を修正しながら、暫時、農園の拡大ができ農業生産の効率化と収穫の向上を図

りながら農業生産を推進できる。

4) 所得向上が経済成長に左右されることなく図れる…農業生産の収穫が自身の努力次第で向上させることができ、直接、家庭の収入向上に結び付くので、即効的効果のある所得向上手段として有益である。

4. 複合農法を採用した新しい貧困軽減方策

前第3項で述べたような複合農法の特徴を生かし、貧困にある小農民の所得向上に役立てることができると判断したことから、貧困軽減方策の手段としてトメアス式複合農法を取り入れ新しい貧困軽減方策について考察を行った。

4.1 複合農法を採用した理由

複合農法は貧困層の小農民の所得向上が図れ、貧困改善が次の5項目で可能と考えられることから、貧困軽減のための所得向上策として適する手段と判断し、貧困軽減の方策として採用した。

1) 複合農法では、短期で収穫できる作物と3～5年以降長期に収穫が見込める果実、それに加え高木による収穫が20～30年後に期待でき、短期長期にわたり収穫ができ所得が得られることと、年間を通して収穫ができることから、貯えのない貧困層の小農民の所得向上手段として適する農法である。

2) 小区画の面積で試験的に農業生産が始められ、生育状況と収穫状況を見ながら農業生産の拡大計画が立てられ、小農民でも失敗が少なく効果的な収穫の拡大が図れることにより安定した所得向上が可能となる。また、自己の努力次第で直接的に所得の増大が見込める。

3) 国の経済成長率や国策に左右されることなく、自己の農業生産高を上げることにより所得向上が可能となる。

4) 複合農法を開発したトメアス日本人移住者(CAMTA)の農業指導が受けられる。複合農法に知識のない小農民の複合農法による農業生産の指導を日本人移住者から受けることにより、農業生産高の向上が見込める。

5) CAMTAとの連携により収穫した農産物を

CAMTAのジュース工場などで加工することができ、現金収入が見込める。また、CAMTAにより苗や肥料などの供給支援を受けることができる。

4.2 複合農法による具体的な所得向上方策

これまで焼き畑農業によりキャッサバや自己消費の野菜を主に栽培し、土地が痩せると転々と土地を求めて移動し自給自足の生活を送ってきた小農民たちは複合農法の知識や経験がなく、この農法を取り入れた農業生産を始める者がなかった。トメアス地域では強盗や盗難などの事件が多くトメアスの日本人移住者は、お互いに理解し合い住み良い生活環境を築くことを狙いとして移住地周辺の貧困層の小農民に複合農法を教えることを考え、小農民に対する複合農法の普及と所得が向上するよう努力した。その努力により小農民が複合農法を学び試験農場を開いたり実践したことにより農業生産高の向上により所得が増大し生活環境が大幅に改善する兆しが見えるようになり貧困からの脱出が見込めるようになった。

4.2.1 複合農法の普及方法

複合農法の普及には小規模農民コミュニティを形成しコミュニティの会員に農業指導及び各種の支援を行うことにより普及の効率化を図り、指導が行きわたるように配慮した。

1) 小規模農民コミュニティの形成

複合農法を普及し小農民の所得向上を図るため小農民によるコミュニティ(小規模農民コミュニティ)を形成し、コミュニティに参加する小農民に対して農業指導を行うことを決め普及活動を推進した。その普及には、コミュニティにて共同でSAFTAの苗床や試験農場を作り体験しながら農業指導を受け、その体験を基に自己の複合農園を開拓できるよう配慮し、複合農法による農業生産技術の習得が徹底できるよう工夫した。また、コミュニティ方式を採用することの目的は次の諸点を狙いとした。

① 農業技術の指導を受けることに対して、お互いの連帯感を増し相互扶助の精神を養いお互いの能力向上に役立てることができるシ

システムの構築。

- ② 複合農法を学ぶことからの脱落者を防ぐ。
- ③ 複合農法を習得し所得向上を図るための支援の効率化と徹底（個人への個別支援では普及効率が悪く、コミュニティなどの団体支援によれば支援の効率化と指導者を通しての支援の徹底が図れる）。
- ④ コミュニティーで、共同で苗床をつくり、苗を育成し会員の小農民に分配することにより個人の農業生産に役立てることができ、問題が発生した時に会員同士で解決を図ることができる。失敗者の救済にも役立つ。
- ⑤ 外部との取引、交渉などにおいて団体で対応ができ、個人では解決できない問題などの対応が強固になる。
- ⑥ コミュニティーを通してお互いの生活環境の向上が図れる。

2) コミュニティーの活動

複合農業の農法を学ぶため農業指導を受け体験できる苗床、試験農場（会員の集まる場所として利用）をつくり、コミュニティの共同作業場とする。

- ① 苗床は、約10m x 20mの区画に柱を立て太陽光を遮蔽する網を被せ、散水のためのスプリンクラーを設備する。
- ② 苗床の近くに0.5～1.0haの複合農法を体験するための試験農場を用意し、指導を受けた内容に基づき混植を行い、複合農法を実践的に学ぶ。多くの小農民は学校教育を満足に受けていない者が多く、読み書きや教科書で教えることが難しいので、体験により農業生産技術を会得することを中心にする。
- ③ コミュニティー活動を円滑に行うためコミュニティの規約の制定が必要である。
- ④ 共同作業は、毎週1回もしくは月2回程度苗床に集まり、種まき、苗の育成などの共同作業を行う。試験農場の管理も行う。
- ⑤ 農産物の共同出荷を行う。

コミュニティで育成した苗は、試験農場に植栽するほか個人の複合農園にも植栽し、自身の複合農園育成に役立てる。コミュニティ活動は苗

床を中心に行われる。写真-1はコミュニティの苗床、写真-2種の植え付けの共同作業の様子、写真-3コミュニティ試験農場での収穫共同作業、写真-4収穫した胡椒、写真-5トメアス移住地に近いバイショクシュ農民コミュニティの会員たち、共同作業には子供たちも加わり農業を体験しながら学ぼうと努力している。複合農法により収穫が向上することを知り共同作業にも熱が入る。



写真-1 コミュニティーの苗床の様子



写真-2 共同作業の様子（種の植え付け）



写真-3 コミュニティー試験農場での収穫作業



写真-4 収穫した胡椒

4. 2. 2 複合農法による所得向上事例

1) Mauricio da Silva Maciel (モーリシュ) 28歳の複合農園 (実証実験農場に指定)

モーリシュ氏は、以前クアトロヘジヨンの小規模農民コミュニティの会員であった。コミュニティ会員時代に複合農法を学び体験し、現在の場所に土地を購入し複合農法による農園を始めた。的確に複合農園の農業技法を使い複合農法による農業生産を着実に実施していることから実証実験農場とした。土地面積は25ha (ブラジルでは農地の売買単位は一筆25ha) 所有し、現在、農業生産

している面積は5ha程度のものである。モーリシュさんは文盲で自分の名前すら書けない。しかし、CAMTAの農業指導員の指導を忠実に守り、複合農園を着実に増やし、約1haの胡椒栽培と併合して農業生産を行っている。この土地に移り5年目になり、農業生産高も増え中古の自動車やオートバイが買えるようになった。また、2015年には銀行の融資が受けられトラクターを購入するまでに農業生産高を増やし、所得の向上が実現しつつある。

モーリシュさんは4年前から一区画約0.5haの複合農園を開墾し、農業指導員の指導を受けながら混植する作物や収穫のとれる農作物の選定を行いながら、毎年、一区画ずつ拡大している。当面の目標は10haの農業生産面積を計画している。家族は、奥さまと子供3人の5人家族である。



写真-5 バイショクシュ小規模農民コミュニティの会員農民と共に (苗床にて)
左端：Amilton・CAMTA農業指導員



写真-6 家族の写真



写真-9 1年目の複合農園



写真-7 購入した自動車とバイク



写真-8 購入したトラクター

写真-9は1年目の複合農園でトウモロコシの間にカカオ、アサイーなどの果樹が植えてあるのが分かる。また、地面にはスイカが植えられていて、トウモロコシ、スイカなど短期で収穫できる作物が植えてあり、日常の生活収入を確保しながらの農業であることが分かる。アサイー、カカオなどの収穫には3年以上掛かる。写真-10は2年目の農園である。アサイー、バナナ、カカオが成長している様子分かる。写真-11は3年目の農園で、カカオが大きくなっていく様子分かる。写真-12は胡椒の木の間にカカオが植えてあり、胡椒が駄目になる頃にはカカオ畑になり農業の収穫が継続的に行えるようになっている。最近では胡椒の相場が高く、胡椒栽培している小農民は収入が拡大し所得向上が進んでいる。



写真-10 2年目の農園
(左アサイー、中央バナナとカカオ)



写真-11 3年目の農園
カカオが大きくなっている



写真-12 胡椒にカカオの混植（中央カカオ）



写真-13 農業指導員を交え話を聞く

ここに挙げたモーリシュさんの事例のように複合農法を導入し、CAMTAの農業指導員の指導を受けながら、試行を行い、最良の方法を見つけ農園を拡大しながら農業生産を進めることにより着実に収穫量を上げ農業による収入向上につなげることができることが分かった。この事例から分かるように複合農法により農業収入を上げることで所得向上が得られ貧困からの脱出が可能とい

える。これには農業知識の少ない小農民には的確な農業指導者の指導が必須である。

農業生産高と農業収入を聞くと計算ができないので分からないとの返事があり、今後の貧困軽減方策の策定や効果的な農法の実施には、学校に行けなかった小農民の生産高の記録や収入の記録ができるシステムを導入する必要があることが分かった。

2) Jose Maria Santo ya Mendes (ジョセマリア) の事例

クアトロヘジョン・コミュニティの会員で前コミュニティの会長であった。CAMTAの農業指導を受けながら複合農法を始め、最初1haから現在は7haまで拡大し、複合農法による農業生産に一番成功している事例と称賛されている。多くの見学者がこのコミュニティを訪れ、ジョセマリアの成功話を聞きに来ていて、複合農法の普及に活躍している。ジョセマリアは教育熱心で所得が向上したことによって娘を大学に通わせ高等教育を受けさせている。大学に通った娘さんの話を聞いたところ、自分は小農民を助ける仕事に就きたいといい、お父さんは複合農法を始めてから人が変わったように働くようになった。以前はサッカー場を作りサッカーに興じていたがすっかりそれを止め農業生産に打ち込むようになったと話した。ジョセマリアはクプアスを年間400トンの収穫を上げ日本人農業者を追い抜くまでに成長したとCAMTAの坂口元理事長が称賛していた。また、ジョセマリアの手により、板張りの今にも崩れそうなぼろ会館を建て替え立派なコミュニティ会館を作り子供たちや女性たちの教育に利用するようになった。複合農法による所得の拡大がコミュニティ会員の生活向上に役立っている良い事例といえる。このようなリーダーが居るコミュニティは貧困層の小農民でも活動が活発になり生活環境が向上することが証明される良い事例といえる。写真-14はジョセマリアが複合農業を始めた最初の1haの農場で写真右の娘さんが大学卒業したお嬢さん、左が奥様である。写真-15は新しいコミュニティ会館で、この日は大手企業の支援による子供たちの識字率向上のイベントが開か

れていた。写真-16は、イベント参加のために集まった子供たちや世話役の人々である。



写真-14 ジョセマリアの複合農業開始の農園



写真-15 立派なコミュニティ会館



写真-16 クアトロヘジョン・コミュニティの子供たちと会員家族

4. 3 新しい貧困軽減手法の提案

4. 3. 1 研究推進結果より明らかになった事項

これまで貧困軽減策の方策について研究を推進し、考察を行った結果、次の諸点が明らかになった。

- 1) 複合農法は小農民にも受け入れられ易く農産物の生産高向上に有益な手法である。生産高の増大は所得の向上にもつながり貧困層農民の貧困軽減手段として有効である。
- 2) 複合農法の起用で農産物の継続的な収穫が実現できる。
- 3) 小規模農民コミュニティは農業生産技術の習得に効果があり、会員相互の連携により会員全体の農業生産技術の向上に有益で、農民所得の向上に有効である。
- 4) 複合農法を採用し、適切な農業指導を行うことにより学歴のない小農民でも農業生産高の向上ができ、小農民の所得の拡大が可能である。
- 5) 複合農法では小規模の農業生産面積から開始し、暫時、生産面積の拡大が図れ、小農民の農業手段として効果的である。
- 6) 継続的に農業生産物の収穫ができ、耕作

面積の拡大により生産高の拡大が可能で、かつ市場や購入先の確定により現金収入が直接見込め小農民の所得拡大が可能である。このことは、直接農民が現金化するので所得の増大には即効的である。

- 7) 生産した農産物の買取先を確保することが必要である。
- 8) 日本人移住地の開発した複合農法を小農民の農業生産に採用し、その特質を生かし農業生産高を向上させるには日本人移住者の下に的確な農業指導を行うことが必要である。
- 9) 収穫した果実類をCAMTAが購入することで小農民は収穫高に応じた安定した収入が見込める。
- 10) 小農民の多くは焼き畑農業によりキャッサバを中心とする農産物を収穫し自給自足の生活を送り、3年程度で土地が疲弊すると新しい土地を求めて移動を繰り返していた。複合農法では一定の場所で継続的な農業生産ができ苗の育成から施肥、収穫などを行えば定住しながら収穫が得られ農民の生活の安定化に効果的な手段である。

4. 3. 2 新しい貧困軽減手法の提案

トメアス式複合農法は小農民の農産物の生産高向上と所得の向上に有効であることにより、小農民の農業生産の手段として採用し所得向上を図り貧困からの脱出に役立てることを新しい貧困軽減手法として提案する。小農民は、先ずトメス式の複合農法を習得する必要がある。図一1に日本人移住地と小農民の連携による貧困改善手法の構図を示す。小農民は農法を習得するために会員組織のコミュニティ（小規模農民コミュニティと名付ける）を設立し、コミュニティの作業場と試験農場を作り農業指導を受け、複合農法の実践による体験をしながら農法を習得し、習得した知識や技法を基に自身の農園で複合農法を展開する。複合農法は短期作物、長期に収穫のできる果樹や胡椒を混植し、農場を始めた初年度から果実類の長期作物の収穫を待たずに短期作物の収穫が見込

め収入が得られる。長期作物が生育し収穫が始まると短期食物の収穫に加え、長期作物の収穫が加わり農業生産高は増大し、所得の向上につながる。短期作物としてはトウモロコシ、カボチャ、スイカ、豆類が挙げられる。長期に収穫が望める果実類は、マラクジャ（パッションフルーツ）が2年目、アサイーや胡椒が3年目、カカオやクプアスが4年目から収穫が始まり、枯れた場合には更新しながら20～30年の長期にわたり継続的な収穫が得られる。短期作物や長期作物は市場やCAMTAなどの取引先で現金化ができ、小農民は即効で収入が得られるので貧困からの脱出に役立つ。

小農民は複合農法の指導を受けるまで知識と経験がないので指導が必須になる。農業指導には日本人移住者（現在はCAMTAの農業指導員が指導に当たっている）の指導と連携により小農民は複合農法による農業生産を始めることになる。農業指導の効率化と農法習得を徹底するため小農民による小規模農民コミュニティを設立することが必須となる。コミュニティでは散水装置を持った苗床と作業場を建設し、種まきや施肥の指導を受け、複合農法で育成する果実の苗木を栽培する。種まきはそれぞれの栽培作物の適期に行われ年間を通して植え付けが行われる。ここで育成した苗はコミュニティの共同の複合農法の試験農場に植えられ農法と農業技術の習得を体験しながら行う。小農民は学校に行かなかった者や文盲が多く、書き物や書物での技術移転は難しく体験的に習得する方法が適すと考える。育成した苗は会員の農民にも配られ自分の複合農園の農場でも体験し習得した知識を生かして農業生産の向上に役立てることができる。図一1に挙げた貧困軽減手法により継続的な農業生産と収穫が短期・長期にわたり得られること、試験的に0.5～1.0haの小規模で始め生育の状況、選定した種類を観察しながら、次年度以降同じように試験農場を拡大しながらの農業生産の拡大ができる。次に、大切なことは販売先の開拓とマーケティングが大切である。コミュニティの組織を生かし市場開拓を行う必要がある。果実についてはCAMTAが買い取りジュースやジャムに加工しブラジル国内市場、日本やアメリカに輸出している。

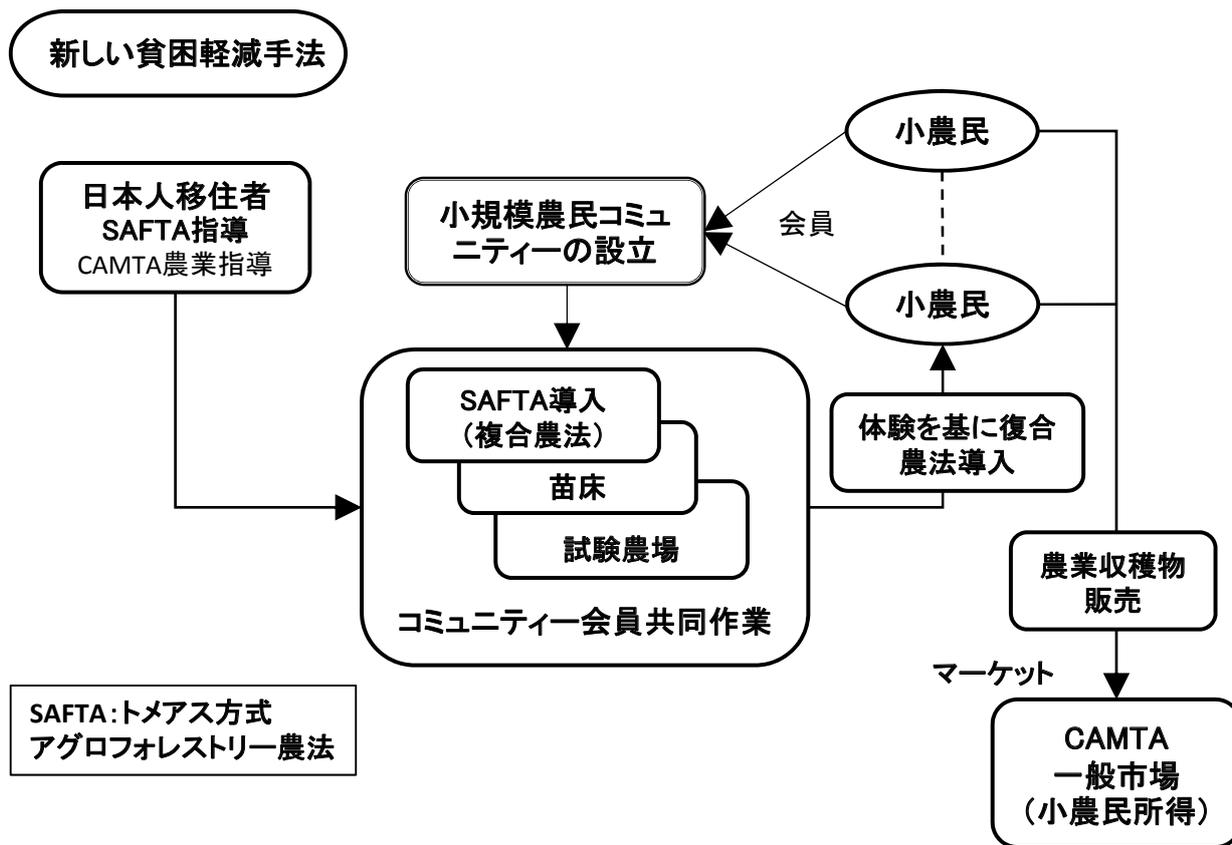


図-1 新しい貧困軽減手法の構図

5. コミュニティの課題

1) 販売先の確保が重要

複合農法を採用した農業をCAMTAの農業指導員の教えを守り確実に実施することで農業生産高が増大し、家族の所得向上が図れ、貧困から脱出ができることは分かった。しかしながら貧困軽減をもっと確実にするには、生産物を販売しお金の換金する必要がある。日本人移住地の近くのコミュニティや小農で生産されるアサイー、クプアス、マラクジャ、グアバ、ココアなどのトロピカルフルーツ類はCAMTAが買い上げカカオは明治製菓などに卸し、フルーツ類はジュースやジャムなどの製品に加工するので販売先は確保されている。しかし、短期作物については買い上げてくれる先を見つける必要がある。複合農法による貧困軽減策の仕組みの中には販売先の確保が重要な要素になる。必ず販売先を見付け貧困軽減策の中に組み込む必要がある。

2) 農産物を運ぶ輸送手段の確保が必要

小農民たちの居住する場所は都市部から遠くに離れているから、収穫した農産物を市街地の仲介者や市場に出荷するには運送手段の確保が必要である。市街地からの道路は未舗装が多く熱帯雨林の道悪の道が多い。コミュニティで、共同で運送を準備する必要がある。トラックを持っているコミュニティはなく、収穫した農産物の運搬に苦労している。このようなことから複合農法で収穫が増大した時の輸送手段の確保が必要である。

3) 統率力があり実行力のあるリーダーが必要

いくつかのコミュニティ活動の様子を見てみるとジョセマリアのようなリーダーが居る所は活動も活発で複合農法もよく理解し農業生産高の拡大が見られ小農民の所得向上が順調に進んでいる。リーダーシップのないコミュニティは活動も消極的で農業生産もあまり拡大しない。成果を上げるには、やはりリーダーの素質が重要になるといえる。

6. おわりに

本研究成果より貧困農民を対象にした国の経済成長や開発プロジェクトに関係なく、小農民の農業生産高の向上に直接的に効果があり、農業生産を、年間を通じて継続的にさせることにより収入が継続的であり、且つ、農業生産の拡大により所得の増大が着実にできる小農民向け貧困軽減手法の確立ができる見通しを得た。

この手法の実施において、ブラジルのトメアス日本人移住者の開発したSAFTA（トメアス方式アグロフォレストリー）を小農民の農業生産に導入し、トメアスの日本人移住者（現在はCAMTAの農業指導）の指導の下に、農業生産を推進・拡大することにより生産高の向上が見られ、それにより小農民の所得が増大し確実に貧困から脱出できることが可能となった。この農法を学ぶには小規模の農民コミュニティを形成し、指導に従って共同で学び相互扶助の下に推進することが、脱落者を防ぎ、効果的であることが判明した。

実際にこの手法を日本人移住者の指導の下に取り入れ成功した小農民が出てきて、子供を大学まで卒業させるようになった小農民や中古の自動車、オートバイを買い、銀行の融資を受けトラクターを購入する農民も出てきた。このトラクターを購入した農民は自分の名前すら書けない、読み書きのできない文盲である。この事例のように貧困層農民の多くは無学の者が多く、教科書や読み物では農法を理解することができない者が存在する。コミュニティ方式で試験農場を作り、日本人団体の指導者の下で体験しながら農法を学ぶことは、このような貧困層農民の所得向上には極めて有効な手段といえる。この農法の普及により貧困層の小農民の所得が向上し、多くの貧困層農民が貧困からの脱出ができることを願うものである。本研究は前に述べた平成25年～27年の科研費の研究助成金を受け、トメアス移住地の農業協同組合（CAMTA）の協力を得て推進することができた。なお、明らかになった課題として農産物の収穫が始まる時期が4年後、5年後のものがあり研究成果を確実にするには、これらの農産物の収穫状況と生産高を検証する必要がある。また、他地域の貧

困層農民の所得向上に、考案した研究成果（新しい貧困軽減策）をどのように応用するか引き続き研究を進める必要があることが挙げられる。協力していただいたトメアス移住地の日系人の皆様、CAMTAの皆様にご感謝の意を表したい³⁾。

-
- 1) イモ類、タピオカの原材料、ブラジルではマンジョカとも呼ばれ多くが食されている。小農民の主食になっている。シアン化合物が含まれるので毒抜き（温めるか焼く）が必要
 - 2) トメアス移住地小長野氏より聞き取り調査（2010年、3月）
 - 3) 本稿は、現地における日本人移住者、CAMTAの職員、小農民コミュニティにおける聞き取り調査及び実証実験の結果を基に記述している。アグロフォレストリー農法に関する文献はあるものの、本研究の複合農法を採用しコミュニティと日本人移住者を連携した貧困軽減手法に関する参考文献は見当たらない。

『クラウディアの祈り』を読む

—不条理に翻弄された愛とその超克—

安元隆子

Takako YASUMOTO. A study on *The prayer of Kraudia*. *Studies in International Relations* Vol.36, No.2. February 2016. pp.13 – 22.

The prayer of Kraudia is the story of Hachiya Yasaburo, his Russian wife “Kraudia” and his Japanese wife “Hisako”. He was sent to a prison camp in Russia on a false charge. World War II had Hachiya completely baffled. He met “Kraudia”, and married her in Russia. However, Hachiya’s Russian wife “Kraudia” thought she could not enjoy happiness from another’s unhappiness, because his Japanese wife “Hisako” waited for him for 51 years. “Kraudia” decided to part from him. After his return to Japan, all three people continued to be considerate towards each other. This is a way to overcome the love triangle.

1. はじめに

『クラウディアの祈り』は、蜂谷彌三郎と彼の日本人とロシア人の二人の妻の物語である。

この蜂谷と二人の妻をめぐる物語は、1998年の「NNNドキュメント98」、2002年に同じNNNで、ロシア人妻のクラウディア・レオニードブナを見舞いに訪露する蜂谷のドキュメントが放映され、2004年4月には「奇蹟体験! アンビリバボ」でも紹介されている。

書籍では、『シベリア虜囚半世紀—民間人 蜂谷弥三郎の記録—』(坂本龍彦, 恒文社, 1998年7月), 『クラウディア最後の手紙』(蜂谷彌三郎, メディアファクトリー, 2003年3月), 『クラウディア奇蹟の愛』(村尾靖子, 海拓社, 2003年11月), 『クラウディアの祈り』(村尾靖子, ポプラ社, 2009年3月), 『望郷』(蜂谷彌三郎, 致知出版社, 2012年10月)がある。ただ、『クラウディア最後の手紙』は、「蜂谷彌三郎著」となっているものの、別の執筆者が蜂谷の名を借りて書いたようである。蜂谷は一行も書いていないことを蜂谷自身が後の『望郷』の「あとがき」の中で打ち明けている¹。蜂谷は読者を裏切ること、また事実と異なることが書かれていること²に耐えることができず、自らペンを執ったのが『望郷』である。この『望郷』

は、2005年には執筆は完了していたようだが、出版には至らず、7年後にやっと日の目を見た。

これら5冊の著作は事実に基づいたノンフィクションであり、作品に描かれた蜂谷と久子、クラウディアを巡る事実自体は基本的にほぼ同じである。ただ、村尾靖子³の著した『クラウディアの祈り』は『クラウディア奇蹟の愛』とほぼ同内容であるものの、2003年刊行の『クラウディア奇蹟の愛』のその後の三人の様子を補填している点が特徴的だ。そして、この2作品は、二人の妻たちの互いを尊重しようとする愛の形に重心を置いて書かれている。一方、蜂谷の書いた『望郷』は、ソ連に抑留された蜂谷の母国への思いがいかに強いかを具体的に記していて、蜂谷の最終的な選択の正当性(「望郷の念」)が強調され、蜂谷の決断をよく理解することができる。また、蜂谷のクラウディアと久子へのそれぞれの深い愛が蜂谷の立場を通して描かれている。そして『クラウディア最後の手紙』は三者の愛の形の意味付けがある程度示されていて、理解しやすい内容だといえるだろう。『シベリア虜囚半世紀』は坂本龍彦の編著となっており、蜂谷と坂本の共同作業による蜂谷の人生の記録である。女性囚人としてシベリアに抑留された村上秋子や坂間文子のことにも触れ、無実の罪で流刑に追いやられた日本人の苦難に満ち

た人生の活写に主眼が置かれている。

本論では、『クラウディアの祈り』を中心に、これらの著作を通して蜂谷彌三郎と二人の妻のそれぞれの軌跡と愛の在り様について、同じように戦争によって引き裂かれた愛を描いた映画『ひまわり』などと比較し、考察していく。

2. 蜂谷彌三郎と二人の妻の物語

上記5冊から読み取れる、蜂谷彌三郎とその妻たちの人生の主要部分をまとめると次のようになる。

1918（大正7）年に滋賀県に生まれた蜂谷彌三郎は、朝鮮・平壤の仁川陸軍造兵廠平壤兵器製造所の検査係として働いている時、終戦を迎える。妻の久子と1歳の幼い娘とで日本への帰還を目指す、ソ連軍の侵攻に阻まれ、秋乙で引き揚げを待つことになる。しかし、その秋乙日本人会で不審な「安岡」と出会う。助け合いの精神から安岡と何度か食事を共にしたところ、蜂谷は突然ソ連兵に連行され、妻子と離ればなれになってしまう。そして、留置場に入れられた蜂谷は、安岡の偽証言によりスパイ罪の汚名を着せられ、懲役十年の刑が決定する。1947年1月、シベリア抑留が始まり、ウラジオストク、ハバロフスク、「生き地獄」と呼ばれたウルガル603強制収容所で強制労働に従事した。その間、腎臓病と腎臓結石が判明し、両足の動きもままならず生死の境をさまようが、生きていくために収容所内での労働が軽度な理髪技術を学んだ。マガダンの収容所へ送られた後もこの理髪技術が身を助け、7年間で刑期を終えることが出来た。しかし、その後も帰国は許されず、厳しい監視のもとでの生活を強いられる。そのような中で出会ったのがロシア人のクウディア・レオニードブナである。二人は結婚し、彼女の献身的な愛により蜂谷はロシアでの生活を続けることが出来た。

蜂谷の日本人妻・久子は、看護婦として働いている時に蜂谷と出会った。蜂谷と共に朝鮮にわたり終戦を迎えたものの、蜂谷の連行とシベリア抑留により、幼い1歳の娘・久美子と苦難の引き揚げをする。帰国後、蜂谷の実家のある滋賀県を経

て、自分の実家のある鳥取へ移り住んだ。戦後、娘を道連れに死のうとしたこともあったと村尾靖子には打ち明けている。その後、久子は看護だけではなく、保健婦の資格を取り、「わたしの戸籍には、ずっとお父さんのなまえがあったんだから、再婚しないのは、あたりまえでしょ。」と語って、再婚せずに女手一つで子供を育てた。そして、久子は蜂谷の死亡届を出さず、蜂谷の名前で貯金を続け、帰国に備えた。高齢になってからは、自分が死亡した時に彌三郎の葬儀も一緒に行くことを周囲に依頼していたという。

一方のクラウディアは1921年に大地主の娘として生まれたが、ロシア革命により家は没落し、実母の死の後に家にやってきた義母から継子いじめを受ける。そして、遂に捨てられ、物乞いとの生活を余儀なくされるが、彼女を救ってくれた養父母の下で成長する。19歳の時、コムソモリスクナムーレで国の食料倉庫監視人として働き始め、その後、出会いがあり結婚した。しかし、上司の不正の罪を着せられ、10年間、強制収容所へ送られる。収容所から帰った時には夫は別の女性と再婚しており、クラウディアは以後一人で生きざるを得なかった。まじめな勤労が認められ、「休息の家」で時を過ごしていた時に蜂谷と出会い、無実の罪により強制収容所に送られたことなど境遇が似ていることから、語り合い、親交を深めた。そして、クラウディアが民族差別の少ないアムール州への移住を勧め、蜂谷もそれに応え、プログレス村で二人は結婚生活を始めたのだった。

3. 蜂谷の帰国までの道程

1953年、スターリンが亡くなる。1947年から抑留者の日本帰国事業は始まっていたが、スターリンの死後1年の1954年から恩赦による日本人受刑者送還が始まった。1955年、マガダンで出会った受刑者の森川寿が帰国し、蜂谷の生存を日本の厚生省や家族に知らせているが、なぜか蜂谷にはソ連当局からの呼び出しは来ないまま、1956年12月、受刑者送還は完了してしまう。絶望の中で蜂谷は「生きていくため」にソ連国籍を取得する。その後、ロシア人女性ドゥシャーとの同居、彼女

の裏切り、彼女の家族の民族差別などが重なり、自殺を図ったが未遂で終わった。そして、前述したようにクラウドディアと出会い、プログレス村で結婚生活を送る。しかし、理髪師としての仕事に身体が耐えられなくなり、蜂谷は写真の仕事を始め、クラウドディアは審査経理士となり働く。彼らの周囲には良き理解者も存在した半面、蜂谷のスパイの疑いは消えず、差別や侮蔑も相変わらず続いた。老齢になった二人は、彼らの間に子供がないこともあり、死後のことを考え、二つの棺を準備していたという。

1985年、ゴルバチョフの「ペレストロイカ」が始まり、1991年、遂に社会主義国家ソビエト共和国連邦は崩壊する。その後、クラウドディアの友人とナホトカにいた日本ユーラシア協会の日本語教師・金子房三を通して、蜂谷の生存情報が再び日本へもたらされ、1996年、娘・久美子らがロシアへ渡り、蜂谷と再会した。蜂谷の家族が健在であることを知り、蜂谷を帰国させるためのクラウドディアの奔走が始まる。クラウドディアは蜂谷との離婚と引き換えに蜂谷の帰国許可を得、蜂谷は1997年3月23日、帰国を果たした。そして、鳥取で日本の妻・久子と51年ぶりに再会したのだった。久子が蜂谷の戸籍を残していたことが幸いし、日本国籍も順調に回復した。翌年、ロシアから蜂谷の名誉回復証明が届き、彼がスパイではなかったという身の潔白も証明された。

4. 妻たちの手紙

久子は存在が確認された蜂谷に次のように記した。「お父さん よくぞ生きていて下さいました。本当に夢のようです。(中略) 一番申し上げたきことは是非 是非 帰国できます日を祈っております⁴。そして、クラウドディアには「彌三郎が大変お世話になり、貴女様のおかげで今まで生きながらえて居られましたことを厚く厚くお礼申し上げます。貴女には申し訳ありませんが、どうか主人を日本に帰らせてやってください。本当に勝手なお願いでございますが、よろしくお願い申し上げます⁵。」と、クラウドディアに感謝の意を表しつつも、蜂谷の帰国を何よりも願う気持ちを綴って

いる。

一方、久子の気持ち、蜂谷の気持ちを考えあわせ、クラウドディアは蜂谷の帰国のために奔走する。クラウドディアがハバロフスク日本領事館宛に提出した帰国同意書には次のようにある⁶。

日本の妻、久子さんの立場を思うとき、かわい女の身で幼い子を背負い国境を越え、祖国日本帰還に九死に一生の望みをかけて、それを果たされた渾身の努力と精神力に私は心から尊敬致しております。久子さんは一日千秋の想いで今日の日を待ち続け、このたび夫との再会を間近に控えていられるのを思うとき、女同士の心のつながりとでも言いますか、決して、このまま見過ごすことはできないと涙するのでございます。(中略) 他人の悲しみの上に自分の幸福を築き上げることは、人道上、決して許されるべきでないとの考えは、私の固い信念でもございますので、どうぞ彌三郎さんの帰国が一日でも早く実現いたしますようご支援のほどを切にお願い申し上げます次第でございます。

1996年11月15日

ここに書かれた「他人の悲しみの上に自分の幸福を築き上げることはできない」という考えが、クラウドディアの行動の規範を明らかにする。この利他、そして、自己犠牲の精神こそがクラウドディアの人格の根幹なのだ。そして、クラウドディアは久子に、蜂谷が自分の意志で妻子との離別の道を選んだのではなく、無実の罪を着せられ、苛酷な刑罰に苦しめられたからであることを察して欲しい、と頼む。それは、クラウドディア自身が上司の犯罪の罪を代わりに背負わされ、同じ運命に苦しんだ者ゆえ発せられた言葉である。蜂谷を「憐れみを持って受け入れてください⁷。」と日本の妻に懇願するのである。

さらにクラウドディアは、蜂谷に「あなた方が心をさらけだしていくことによって、いつのまにか打ちとけあって、もとの夫婦に戻れると信じています。そして、こちらのことも、少しずつ忘れられると思います。そのようにして、もとのむつまじい二人に戻ってくださることをわたしに約束してください。」(1997年4月24日)と書いている⁸。

クラウドディアの利他、自己犠牲の精神は蜂谷に対しても一貫していて、揺るぎがない。

クラウドディアは蜂谷の誕生日に、声の便りを送る。それは、蜂谷の罪悪感を少しでもなくそうとするものであった。

わたしは、あなたに贈りたいものがございません。それは心の自由です。あなたの心がこれ以上ふたつに引き裂かれないように、早く私のことは忘れて、ただ、ただ一途に久子さんのために尽くしてあげてください。それで、あなたや久子さんが、ほんとうに幸せになってくださるならば、わたしの心の底から尽くしたあなたへの純粋な愛情が通じたものとして、わたしは、このうえない喜びでございます。(1997年7月30日)⁹

こうした「清らかな魂の喜び」を持って、共に暮らした日々心から感謝し、この喜びの心とともに安らかにこの世を去っていかうとするのがクラウドディアなのである。この言葉を聞き、蜂谷はすぐにクラウドディアに連絡をし、文通や電話を通してつながることを約束し、実行している。

5. 蜂谷の選択

蜂谷は最終的に日本に帰国し、日本人妻・久子の元に帰ることを選ぶ。何が彼をそうさせたのだろうか。ちなみに、現代では、夫婦の間がうまくいなくなり、夫が家を出、別の女性と生活を続けた場合、その内実が結婚生活と同等であれば、妻との形だけの婚姻よりも実質的な結婚生活を送っていた内縁の妻が優位とみなされる。クラウドディアは37年間、蜂谷を守り、共に暮らしている。一方、日本人妻の久子が共に暮らしたのはわずか5年間である。しかし、待ち続けたのは51年間である。両者を比較すること、また、どちらかを選択することは非常に難しい。しかし、蜂谷はクラウドディアの心情を十分に理解していた。それはクラウドディアに宛てた2002年6月26日の手紙が示すだろう¹⁰。

過去37年間、無実の罪に泣いた私たち二人のロシアでの生活。ただ一人、私の無実を信じ、献身的な愛情で厳しい社会情勢の中で、日本

人スパイの妻とまで言われて、世間の人々からの冷たい視線に堪えながら、毅然たる態度で、当時のソ連社会から守り通してくれた恩は生涯決して忘れはしない。(中略) 望郷の心にさいなまれている私を、心ゆくまで理解してくれたのも、この世でお前ただひとりだけだった。世情が移り変わり、祖国日本へ連絡する時も、あたかも自分の肉親を探すような気持ちで情熱を注いでくれたのもお前だった。娘や弟が日本から訪ねてきた時も、行方が分からない自分の肉親が見つかったように涙を流して祝福してくれたのも、たった一人の私の味方であり私の盾であったお前だった。今日までの久子の苦難の人生を知って、他人の不幸の上に自分の幸せを築き上げることは、どうしても出来ず、また人道上許されるべきではないとして、自分の不幸な過去の人生をまったく顧みず、ただ、ただ、久子の老後を慰めてやってほしいと言い、祖国帰還に同意してくれたね。そればかりか帰国に伴う書類の作成や官庁との折衝、一日も早い帰国実現のため、病氣療養中の身にもかかわらず、ハバロフスク日本総領事館へ嘆願のため、昼夜兼行の旅程で最大限の努力を惜しまなかったのもお前だった。崇高な真実の愛を教えてくれたお前の純粋な心に対して、朝夕の感謝の気持ちは、どんな言葉でも文章でも、到底言い表すことはできない。無限の心より感謝を捧げたい。

このように深い愛を示してくれたクラウドディアに感謝しつつ、蜂谷は彼女の心の奥底の悲しみをも見逃していない。クラウドディアが蜂谷と別れた後に支援を受け来日をしたことがある。その別れ際に今回が二人が会うことのできる最後の機会になろう、と語りあった時、クラウドディアの週一回の「国際電話だけは絶たないで」の言葉を聞き、蜂谷は彼女の信念であった「あなたたちの幸福が私の幸福だ」は強がりであると察し、彼女の別れのつらさを思いやり、次のように書いている。「天涯孤独のクラウドディアをまた一人の孤独な生活に追いやってしまう私の運命を恨みました¹¹」。蜂谷は一人ロシアに残ることになるクラウドディアに対し、

「無慈悲な気持ちに罪悪感」を持ったのだという。蜂谷はクラウドディアの崇高さと同時に、十分に彼女のもろさ、弱さも理解している。

二人の妻の間で選択を強いられた蜂谷の構図はいわゆる「三角関係」である。しかし、この構図は単純な三角形ではないように思う。辺の長さが違う、ということでもない。実は頂点以外の二つの点は同じ平面にあるのではなく、異次元にあるのではないか、ということだ。つまり、拮抗しない点なのであり、両者はきしみはありつつも、並存可能だったのではないだろうか。蜂谷自身も次のように語っている。「二人をともに愛していますが、かわいそう、気の毒だったという気持ちは久子のほうによりおおくかかってきます。クラウドディアについては、三十七年間一緒に苦楽をともにして、しかも、お互いに恐怖を共有しながら暮らしてきた。その恐怖の中でも私を必死にかばい、守ってくれた感謝の気持ちがより強いように思います¹²」。つまり、久子、クラウドディアともに妻として愛し、彼女たちも夫として蜂谷を愛しているのだが、その愛の在り方には微妙に差があり、久子には妻への愛、クラウドディアには逆境を生き抜くための同志への愛であり、人間愛とも呼べるものだったのではないだろうか。久子から蜂谷への愛は夫への愛であり、また、家族愛でもあったろう。しかし、クラウドディアの場合は夫への愛であると同時に、逆境を生き抜く同志愛であり、また、どんな犠牲を払っても子供の幸せを祈る母親の愛情にも似ていたように思う。このことによって、通常「三角関係」に付随して発生する「嫉妬」の感情が3人の表面上に現れることはなかったであろう。「この二人の存在が私の生きる糧¹³」とは蜂谷の言葉であるが、これは決して蜂谷の優柔不断さを示しているのではなく、いわばレベルの違う二つの愛に恵まれた蜂谷の心情を著したものと見えるだろう。

では、その次元の違い、しかし両方ともかけがえない愛のうち、なぜ蜂谷は久子の愛を選んだのだろうか。

6. 蜂谷が久子のもとに帰った理由

蜂谷が久子の愛を選んだ理由について、蜂谷自身の言葉を聴こう。蜂谷自身は『望郷』の中で次のように語っている¹⁴。

クラウドディアと日本の家族のどちらが大切かと言われると私もつらいのです。どちらも愛しています。ただ、私の愛は祖国にあるので、どうしても祖国に重きを置いてしまう。ただそれだけです。二つに一つでどちらをえらべるというものではありません。

つまり、「祖国への愛」、換言すれば、望郷の念が久子の愛を選ばせた、というのである。この望郷の念の内実について、次に振り返る。

① 望郷

蜂谷がスパイ容疑により強制収容所の苛酷な生活を送ったことと、その後も監視され、民族差別を受ける辛さを充分すぎるほど味わってきたことは前述の通りである。そのような中で蜂谷が作った歌—「かにかくに 母なる人は 忘れまじ オロシヤのくにに 囚われの身は」(1955年2月15日)¹⁵。蜂谷の母への想いを歌にしたものであるが、これは引上げ船が着くたびに埠頭に立って我が子を探したという蜂谷の母の息子を想う気持ちと重なるものである。このような母への想いは「望郷」の大きな部分を占めるものであった。蜂谷は「モンテンパの夜は更けて」¹⁶の替え歌をつくったという。南国モンテンパからの望郷は、「シベリアおろしの夜は更けて 届かぬ思いにやるせない 故郷の空を見上ぐれば 涙に滲む夕空に 母の姿が浮かび来る 渡る雁がねまた来ても恋し我が子は帰らない 母の想いはただ一つ シベリアの空を駆け巡る 定めは厳しい北斗星 シベリアおろしに春が来りゃ 凍った柳も芽をふかす 俺も生きよう一筋に 死んじゃならぬくじけまい 祖国の土を踏むまでは」¹⁷というように、シベリアの極寒の中、母のいる祖国を想う気持ちに替えられた。それだけではない。蜂谷は祖国・日本を想い日本語を忘れないように、たまたま入手できた日本の新聞をぼろぼろになるまで読み漁り、日本語で独り言を言った。母や妻子に向けて声に出して話すことで日本語の音を記憶していたのだ。童謡、

流行歌などを歌うこともその一環だったと考えられる。そして、毎晩、就寝前に漢字の書き取り100字と親しかった人々の名前とエピソードを想い出すことを日課にした。小倉百人一首は94首まで思いついたという。また、教育勅語を唱えて清書し、日本人としての誇りを堅持したともいう¹⁸。

こうした蜂谷であってみれば、死ぬなら日本で死にたい、そして、日本の土になりたい、と思うのは当然すぎる当然であろう。彼の自筆と考えられる著書のタイトルは『望郷』。まさにこの望郷がクラウドディアと共にロシアに生きることも「日本」への帰国を選ばせたのである。

② 子供の存在

しかし、もう一つの要素がある。それは子供の存在ではなからうか。蜂谷自身は遂に母親とは再会を果たすことができなかったが、妻と娘の写真を肌身離さず持ち歩いていたという。そして、久美子の写真を壁に張り、写真の前で久美子の誕生日をクラウドディアと祝うのが習慣だったというのだ。この写真は、1956年、日本からの小包が奇跡的に届き、検閲を受け、中身もずいぶんと少なくなっていた箱の底にあった写真で、裏には、「ワタクシハ オトウサンニ アイタイトオモイマス ハヤクカエツテクダサイ」と久美子の言葉が記されていたものだった¹⁹。

一方で、蜂谷が日本に宛てた手紙は結局家族のもとには届かなかったが、蜂谷は次のようにしたためたという。「いくら努力してもわめても、わたしは、日本に帰れるかどうかままったくわからない生活を強いられている。わたしのことは、どうか早く忘れて、娘のためにもぜひいい人を見つけて再婚してほしい。娘は、わたしの形見だから、再婚しても娘だけはたいせつにしてやってほしい。それだけが父親としてただひとつの願いだ。心から、おまえたちの幸せを願っている」²⁰。

このように、蜂谷は父親として娘への想いを第一に綴っている。妻への想いもさることながら、小さな娘を心配し、幸せを祈る父親としての切実な思いがあったのだと思われる。

この子供への想いは久子にもある。それは蜂谷との子供・久美子に対してではなく、クラウドディアと蜂谷の子を想定して、である。

「ロシアの女性と一緒に暮らしているとわかったとき、長年一緒に生活しとったんだから、子供がいるのがとうぜんだと、一番先に考えました。」(中略)「わたしはね、考えた末にお父さんに会いに行くという娘に云いましたよ。もしも、ロシアにお父さんの子どもがいたら、お父さんがいくら日本にかえりたいといっても、永住帰国は承知しないようにしよう、って」(中略)「そうでしょ？子どもから父親をむりやり引き離すようなむごい仕打ちは、わたしの娘一人で、もうたくさんです」「もしも、あちらに子どもがいたら、娘より年が少なくて決まるとるでしょう。(中略)だから、いくらお父さんが恋しくても、こっちがあきらめなきゃならないでしょう。お父さんをわたしたちが説得しなきゃあって、心に決めていました。それが人間の道でしょう。」²¹

前述したように、久子はクラウドディアに「お父さんを返して欲しい」と手紙で訴えていたが、その背景にはこのような思いが存在していたのであり、夫を恋しく思う気持ちと共に、子供・久美子のことを考えての訴えであったことが明確になる。

クラウドディアは、蜂谷との子供を望んでいたが、年齢的にもそれは叶わなかった。それゆえ、クラウドディアには子供を思う二人の気持ちにこたえようとする思いが強かっただろうし、その背後には幼くして実の両親と離れ離れになり、愛情に飢えた子供時代を送ったクラウドディア自身の経験があったにちがいない。

このように、「望郷」と「子供への愛」が蜂谷を日本に帰らせた大きな要因になったと考えられる。

7. クラウドディアと彌三郎の再会と三人のその後

いつもはしっかりとしたクラウドディアの手紙の文字が乱れていることから異変を察した蜂谷は、2002年1月3日、久子に見送られて厳冬のロシアへクラウドディアを見舞いに出かけた。2003年、支援者によりクラウドディアは来日を果たし、以後、数回日本を訪れている。久子はあなたの存在があったから蜂谷は生きながらえることができた、と来日したクラウドディアに抱きつき、感謝の意を表し

たという。

2007年5月、久子は「お父さん、ありがとう」という言葉を残し、亡くなった。2014年11月、蜂谷を送りだして17年間一人暮らしを続けたクラウディアも、友人に看取られ亡くなった。そして、2015年6月10日、蜂谷彌三郎は96歳で波乱の人生の幕を閉じた。

8. 戦争によって翻弄された愛の形

蜂谷彌三郎と日露の二人の妻の物語は、戦争によって翻弄された愛の物語、と呼び換えることができるだろう。しかし、このような例は蜂谷たちだけだったのだろうか。再会までに51年間という長い年月がかかったのは稀有な例であろうが、こうした悲劇は市井では枚挙に暇がなかったと推察する。例えば、2015年8月14日の『神奈川新聞』には「戦死の誤報で母再婚 父二人のはざまで娘は…」のタイトルを付した記事が掲載されている。内容を要約すると以下のようである。

——尾畑慶子さん（76才、旧姓前川、横浜市鶴見区）の母・邦子さんは終戦から2、3年後に父・前川治助さんの戦死公報を受け取った。父のお葬式をし、母は生活を案じた近所の人紹介で再婚した。2人の幼い弟は新潟の父方の実家に引き取られ、母は新しい父との間に妹と弟をもうけた。しかし、治助さんは生きていて、フィリピンの刑務所で健在であることが分かった。邦子さんは煩悶し、日本人戦犯の減刑のために奔走した横浜出身の歌手、渡辺はま子さんに手紙を書いた。「再婚したものゝ、前川が生存して居ると知った其の時から、此の帰りを待ちわびて来た私でした」と。治助さんが帰国した時、横浜港で慶子さんにかけて言葉は「お前、腕は大丈夫か」だった。ごく幼いころ腕に負った娘のやけどを、ずっと心配し、フィリピンで10年間、家族を思い続けていたのだ。治助さんの帰国がかなった53年7月の恩赦に加え、同年12月、さらなる恩赦で釈放されるまで、治助さんは東京・巣鴨刑務所で服役した。その間、母・邦子さんは再婚した夫とともに巣鴨を訪れ面談し、最終的に邦子さんは治助さんを選んだ。二人は大恋愛で結ばれ、邦子さんは16歳で慶

子さんを生んだという。その想いを消すことはできなかったのだ。慶子さんは治助さんと邦子さん、そして離れていた弟とも一緒に暮らすことになった。一方で、新しい父は身を引き、妹と弟を連れて家を出た。その弟は病で早世し、妹は慶子さんが20代前半のころ奉公に出されることになった。そのことを慶子さんが伝えると、治助さんは自分が引き取ると言い、戦後十数年、戦争に翻弄された慶子さんの兄弟が一つ屋根の下に集まった。慶子さんは「私たちを育ててくれた新しいお父さんにも恩返しができた」と思ったという。——

この尾畑さんの父母の場合は蜂谷の場合と逆転し、女性が二人の男性の間で悩み、決断するというものである。いずれにしても、こうした戦争によって翻弄された愛は、日本中に見られたのに違いない。いや、それは日本に限ったことではない。世界中であったことなのである。そのことを映像化しているものの一つが、人口に膾炙した映画『ひまわり』²²である。

『ひまわり』には幸せな結婚式を終えたばかりのジョヴァンナとアントニオが登場する。二人の軌跡を追えば次のようだ。幸せな二人に戦争の影は否応なく迫り、アントニオは厳寒のロシア戦線に送られて、雪原の中で消息を絶ってしまう。彼の生存を信じて疑わないジョヴァンナは一人でロシアの地に出かけ彼を探す。しかし、やっと探し当てた夫はロシア人女性との間に新しい家族を作っていた。それを知ったジョヴァンナは、列車に飛び乗り号泣する。アントニオはロシア人妻の了解のもと、ジョヴァンナに会いに出かけるが、二人に過ぎ去った時間は戻らない。なぜなら、ジョヴァンナにはすでに別の男性との間に子供が生まれていたのだ。アントニオはかつてジョヴァンナに見送られ戦地に向かった駅のホームから再びロシアに向かい、ジョヴァンナは彼を見送る。

哀切なメロディのテーマソングと、アントニオを探すジョヴァンナの一途な心や、アントニオを疑わない清廉なロシア人妻のたたずまいが観る者の心をつつ映画である。これもまた、蜂谷と同じくロシアの地を舞台に新しい愛を見つけた男性のいわば「三角関係」の物語である。ジョヴァンナは彼女にとっての夫の裏切りに絶望しながらも、

決してアントニオやロシア人妻を責めることはしない。自ら「別れ」を決意し、新しい人生を選ぶのである。心に悲しみを抱えながら、あえて前を向いて進もうとするその姿は美しくもあり、また悲しみが漂う。これもまた、愛の三角関係を清算する一つの方法である。

しかし、ほとんどの場合はこのように「訣別」することもできず、なぜ、自分を忘れたのか、または、なぜ自分から離れたのかと相手を恨むのが常であろう。どろどろの愛憎劇が刃傷沙汰を招くことはよくあることだ。結果、多くの場合、三者の関係は崩壊する。

一方、蜂谷と二人の妻、両者の間にあったのは、憎しみ合い関係性を「断つ」ことではなく、相手をいたわり、三者の関係を継続することである。これは三つの愛の形の中で一番難しいものである。蜂谷、そして、『神奈川新聞』に掲載された尾畑さんの例もそうなのであるが、別れてもなお、相手の存在を尊重し、三者がつながり、いたわり合って生きることは難しいだけに美しく、人間だけにできる行為なのかもしれない。それを実際に演じきったクラウディアから日本に届いた手紙を紹介したい。

わたしたちの物語は、三つの傷ついた魂、三人の人生がひとつになってこそそのものなのです。(中略) わたしは彌三郎さんを日本に送りださずにはいられませんでした。わたしは、そのときは自分のことは考えられませんでした。ただひとえに 自分だけの幸福をきずいてはいけないという固い信念を持っていたからです。(中略) わたしは、これから生きる若い人たちがかならず愛と喜びと幸福の中で、人生を送ることができるようにと願ってやみません。世界中のどこでも、いつも平和でおだやかな、青空が輝いていますように。わたしはいつも、一点の曇りもない青空を次の世代に手わたしたいと祈っています。

もう二度と悲惨な戦禍がくり返されませんように。全世界の平和を！(2006年3月)²³

クラウディア、久子には、蜂谷や相手の女性に対する何の疑いも憎しみもなかった、といったらうそになるだろう。心に少しも波風が立たなかった

ということはないはずだ。しかし、彼女たちは蜂谷を含めた三者が互いにいたわり合い、つながり合うことで、この「三角形」を保持していくことができた。こうした例は稀有な例といえるかもしれない。そこには映画『ひまわり』のように、「別れる」ことで新しい人生を生きてゆく潔さとその悲しみの美が生まれるのとはまた違った、調和的な愛が存在しえたのである。

いずれにしても、このような背景には戦争があったのであり、戦争のない平和な世界を祈るクラウディアの想いは普遍的なものであろう。

9. 終わりに

『クラウディアの祈り』を中心に、蜂谷と二人の妻を巡るこれら5冊の著作を併せ読めば、蜂谷が二人の妻たちの狭間で悩みながらも、望郷と子どもへの想いによって帰国の道を選んだことが明らかになる。その選択を誰も責めることはできないだろう。ただ、その耐えがたい望郷の念を一層強めたのは、蜂谷に対するソ連の故なき抑留である。非人道的な収容所生活、そして、その後も消えないスパイ容疑によって差別され続けた市民生活の苦しみがあったことを忘れてはならない。蜂谷と二人の妻たちは、戦争と共に不条理なソ連のスターリン体制とその後の社会体制の犠牲者でもあったのだ。だから、蜂谷とクラウディアの間には、男女の愛だけではなく、逆境を共に生き抜こうとする同志愛、または肉親愛と呼ぶべき愛情が芽生えたのである。

このように、戦争や、抑圧的・非人道的で強固な社会体制など、個々の小さな人間ではどうすることもできないような不条理に翻弄された男女の愛は、これまでも世界中で数え切れないほどあったに違いない。そして、不幸にもそこに「三角関係」が形成される場合がある。しかし、蜂谷たち3人は他の多くの三角関係の愛とは異なり、「他人の悲しみの上に自分だけの幸福を築いてはならない」とするクラウディアに導かれ、当事者たちがいたわり合い、つながりあい、持続していく愛の形を形成した。彼らの物語が感動を持って読まれるのは、主にクラウディアの自己犠牲と利他の精

神，51年間待ち続けた妻の久子の心，そして蜂谷の哀切な望郷の念に心打たれるからなのであろうが，それだけではなく，最後に当事者3人が互いに尊重し合い，調和的な愛の形を形成しそれを保持し続けた，という点にこそ理由があるのではないだろうか。人間は人，土地，権力など，あらゆるものに対し貪欲な所有欲を持つ。それは独占欲となることが多く，“嫉妬”を生み出してゆくのが常である。だから，蜂谷と久子，クラウディアが実現したのは極めて稀な愛の形であろうが，それを実現しえたことに，人間の存在意義と美しさが認められるのではないだろうか。この点において，『クラウディアの祈り』をはじめとする蜂谷彌三郎とその妻たちの物語はこれからも読み継がれていくだろう。

【註】

- 1 「私は取材を受けましたが，この本の原稿を一行も書いておりません。」とある。(P.232)
 - 2 『望郷』の中で具体的に触れてはいないが，『クラウディア最後の手紙』と『望郷』を比較すると，『クラウディア最後の手紙』には，生きるために周囲に合わせ生活をしてなかなか帰国がかなわず，自暴自棄になりロシア人女性・ドゥシャー家族と同居する蜂谷の姿が描かれている。そして，彼女が彼の行動を警察に知らせていたことが書かれている。
 - 3 1944年，山口県生まれ。結婚後，家事と子育てをしながら執筆活動。1998年の「NNNドキュメント98」，2002年クラウディアを見舞いに訪露する彌三郎のドキュメントを見て，取材を決意し，その取材をもとに執筆したのが『クラウディア 奇蹟の愛』と『クラウディアの祈り』である。
 - 4 『クラウディアの祈り』（村尾靖子著，ポプラ社，2009年3月），pp.194-196
 - 5 同掲書，pp.205-206
 - 6 同掲書，pp.202-204
 - 7 同掲書，p.208
 - 8 同掲書，pp.225-226
 - 9 同掲書，pp.232-233
 - 10 同掲書，pp.251-252
 - 11 『望郷』（蜂谷彌三郎，致知出版社，2012年10月）pp.203-204
 - 12 同掲書，p.4
 - 13 同掲書，p.213
 - 14 同掲書，p.204
 - 15 同掲書，p.143
 - 16 1952年（昭和27）1月，歌手の渡辺はま子に楽譜と短い手紙が届いた。その楽譜「モンテンルパの歌」は刑務所に収容されていた日本人111名の望郷の念を込めた曲であった。作詞代田銀太郎，作曲伊藤正康。代田銀太郎は元フィリピン憲兵隊少尉。伊藤正康は元陸軍将校。二人はフィリピンのマニラ郊外のモンテンルパの丘にあったニューピリビット刑務所で戦犯として死刑判決を受けていた。封書を受け取った渡辺は，早速歌をビクターレコードに持ち込み，ほとんど修正無しで吹き込んだ。題名は『ああモンテンルパの夜は更けて』とされた。その後，この歌のヒットや渡辺はま子をはじめ加賀尾秀忍ら関係者の努力が，当時のフィリピン当局を動かし，1953年（昭和28年）エルピディオ・キリノ大統領の特赦によって戦犯の帰国が実現した。
- (一)
- モンテンルパの 夜は更けて
つるるの思いに やるせない
遠い故郷 し の び つ つ
涙に曇る 月影に
優しい母の 夢を見る
- (二)
- 燕はまたも 来たけれど

恋しわが子は いつ帰る
 母のころは ひとすじに
 南の空へ 飛んで行く
 さだめは悲し 呼子鳥

(三)

モンテンルパに 朝が来りゃ
 昇るころの 太陽を
 胸に抱いて 今日もまた
 強く生きよう 倒れまい
 日本の土を 踏むまでは

- ¹⁷ 『望郷』(蜂谷彌三郎, 致知出版社, 2012年10月) pp.149-150
- ¹⁸ 同掲書, pp.151-153
- ¹⁹ 同掲書, p.156
- ²⁰ 同掲書, pp.158-160
- ²¹ 『クラウドディアの祈り』(村尾靖子著, ポプラ社, 2009年3月), p.35
- ²² ゴットリオ・デ・シーカ監督。ソフィア・ローレン, マスチェロ・マストロヤンニ出演。イタリア・フランス作品。1970年。
- ²³ 『クラウドディアの祈り』(村尾靖子著, ポプラ社, 2009年3月), pp.264-266

【主要参考文献】

- 1 『シベリア抑留—未完の悲劇』(栗原俊雄著, 岩波書店, 2010年5月)
- 2 『シベリア抑留とは何だったのか—詩人・石原吉郎のみちのり』(畑谷史代, 岩波書店, 2009年3月)
- 3 『極光のかげに シベリア俘虜記』(高杉一郎, 岩波書店, 2011年11月)
- 4 『シベリア抑留』(堀江則雄, 東洋書店, 2003年11月)
- 5 『コムソリスク第2収容所』(富田武, 東洋書店, 2012年10月)
- 6 「旬報試写室 ひまわり」(品田雄吉, 『キネマ旬報』, 1970年8月)
- 7 「ひまわり」(山本恭子, 『スクリーン』, 1970年10月)
- 8 『三角関係の超・心理』(畑田国男, 毎日新聞社, 1994年7月)

他異権・難民・ヘテロトピア・文化価値摩擦

—スウェーデンの難民大量受入れ問題—

石 渡 利 康

Toshiyasu ISHIWATARI. The right of being different from others, Refugees, Hetrotopia, and Cultural value friction: In the case of Sweden. *Studies in International Relations* Vol.36, No.2. February 2016. pp.23 – 30.

Swedish Migration Agency (Migrationsverket) says that all asylum seekers arriving to Sweden are entitled to have their asylum claim examined. This paper examines the problem of refugees from the four key notions, namely, right of being different from others, refugees, heterotopias, and cultural value friction.

1. 問題の所在

私は、北欧法と北欧地域研究を主たる専門分野としている関係上、北欧諸国の新聞やテレビ報道に毎日欠かさず接している。また、現地の友人・知人とメールやPC画像電話スカイプで連絡をとり、様々な情報の収集に努めている。こうした状況の中で、昨今の報道や会話として大きな地位を占めるのは、主として中東のシリアから特にスウェーデンへの難民流入問題である。

実際、flykting（難民）とかinvandrare（移住者）という言葉が聞こえて来ないスウェーデンの報道はほとんどない、といっても決して過言ではない。2015年は、まるで南から北への民族大移動の年である感じさえする。そして、難民受入れに対する行動を通して、今まで影に隠れてよく見えなかった北欧諸国の社会深層心理が浮かび上がって来るのである。

この小論は、スウェーデンでの難民受入れ問題を1つの切り口として、「他異権」の問題と利他主義、ヘテロトピア、価値摩擦、文化融合といった関連事象を少しばかり考えてみようとするものである。スウェーデンを中心にしたのは、難民受入れ問題に関して、他の北欧諸国と比較して非常に「熱心」というか、ほとんど「異常」に近いからである。他の北欧諸国は、これに反してかなりリラクタントな姿勢を示している。

問題が多岐にわたるので、本評論のトピックも散在的にならざるを得ない。考察の方法論は、歴史学、文明論、国際関係学、地域研究などをほんの少しずつ用いたクロスカルチュラルなものである。

本稿の内容に関しては、断り書きが必要である。本稿を執筆し終えたのは、2015年の10月である。言うまでもなく、難民受入れ問題は、極めて流動的である。本誌が発行される来年の2月の時点では事情が変わっており、本稿の記述の一部が古くなり若干の外れになる可能性がないわけではない。しかし、国際関係事象のような変動的な事項に関しては、そうしたことが常に起こり得るので仕方がないことである。

2. 新概念としての「他異権」

「他異権」という用語は、辞書を引いてもない。勿論法律用語辞典にも載っていない。それもその筈である。他異権は、ある存在が他と異なっている状態を表す「他異」に権利の「権」を付けた私の造語だからである。造語のきっかけは、droit d'être différent des autresというフランス語が急に頭に浮かんだことにある。

他異権とは、簡単にいえば、ある主体ないしは客体それ自体、あるいはある主体ないしは客体の属性が他人あるいは他人の属性と異なっている状

態が社会的保護の対象として意識され、権利として認められたものである。人の集合体にも、他異権は認められる。権利性が所有権のように100%認められるかという質問に対しては、成熟途中にある、とだけ答えておこう。

しかし、デンマークの法哲学者であるアルフ・ロス（Alf Ross）がTu-tuの理論で明らかにしたように、権利は実体を欠く方向指示機能をもつものなので、法理的に他異権を用いることにいささかの不合理性もないのである。

そもそも、他異権などという権利が、考えられるかと訝る人がいるかもしれない。しかし、権利は既定の所与のものだけではない。権利概念は、社会の発展に伴って新たに作られるものなのである。このことは、例えば女性の地位の向上につれて、性の自己管轄的人格権という意味で「性権」という概念が生まれてきたことを考えれば理解できるのである。他異権は、英語ではright of being different from others, スウェーデン語にすればrätt till att vara olik från andraということになるであろう。もっとも、これも造語だから、法律家でなければ支障なく法的理解に至ってくれるかどうか若干不安なところがある。

今私の頭の中にあるのは、こうである。個々人あるいは一定の集団はお互いに違っている。したがって、その違いを法的局面においては相違として率直に認め、ある場合にはそれに対して法的保護が与えられるという考え方である。

最近少しづつ見られるようになった、同性婚の承認などその好例であろう。これは、生き方に関する自己決定権の表象でもある。スウェーデンにいる難民も、他異権をもつと考えられる。

他異権が認められたとしても、それは無制限なものではない。他の種類の権利に何らかの制限が付いているように、他異権にも社会的制約が認められるのは当然である。

3. 他異権とヘテロトピア

他異権とヘテロトピア（heterotopia）は、奇妙な結び付きであると感じられるかも知れない。しかし、決してそうでない。難民や移民を例として

取り上げよう。

スウェーデンに来る難民は、俗にシリア難民と呼ばれている。しかし、難民はシリアだけから来るわけではない。北アフリカ諸国、アフガニスタン、パキスタン、バングラデシュなどからの難民も多い。難民の中には査証や身分証明書など所持していない者もいる。出身国に関する正確な統計は無いに等しいのである。さらに、難民であると自称している者でも、実際はより良い生活を求めての移民である場合もある。非合法組織のメンバーや犯罪者が混ざっている可能性もある。

難民と移民との違いは何か。1954年発効の「難民の地位に関する条約」第1条によれば、難民は人種や政治的な理由で迫害される恐れがあり、母国を逃れた人である。これと違って、自らの自由意思で外国に移る者は移民である。

難民は、難民として認められ、様々な法的保護を受ける。難民は、受入れ国において、いわば他異権を認められるのである。他異権をもつ難民は、異文化の受入れ国スウェーデン社会で一種のヘテロトピアを構成する。

ヘテロトピアとは、社会制度そのものの中で構成された異化空間（場所）で、ギリシャ語のἑτεροῦ δὲ τόπουが語源である。フランス語にすればheterotopieで語頭のhはアッシュ・ミュエだからエトロトピアである。

フランスの哲学者ミシェル・フーコーが1967年にある会議でDes espaces autresとして使用以来、ヘテロトピアという概念は様々なコンテクストの中で用いられるようになった。上述のヘテロトピアの定義をさらに分かりやすくすると、ヘテロトピアとは、現実の人間生活の中で、日常から断絶した異化的な他所である。

そのような異化的な効果のある場所としては、例えば、植民地、監獄、墓場、精神病院、売春宿、図書館、老人ホーム、祝祭空間、博物館などを指摘することができる。それに、他異権をもつスウェーデンにおける難民も、ヘテロトピアを形成しているといえるのである。

4. 中世欧州の他異権の発現－漂泊民と乞食

ここで少しばかり横道に逸れるが、実体としての他異権の歴史的存在について書いておこう。これは、他異権に関する理解を容易にするためである。

中世の欧州には、もちろん他異権という概念は存在しなかった。しかし、他異権の内に相当する実体は存在していた。その典型的なのは、漂泊民と乞食である。

漂泊民として有名なのはジプシーである。現在では、ジプシーが蔑称であるという理由でロマという呼称が一般的になっているが、ジプシーという呼称を好むロマもいる。少なくとも私がワルシャワの小さな広場で出会い、コーヒーを振舞ってくれ、音楽を奏で、友人として遇してくれた思い出に残る数時間を過ごしたロマの一群は、そうした意見をもった人達であった。

西暦1000年頃、イスラム勢力によって荒廃化したインド北部を出て西に向かった遊牧民のジプシーは、すでに数世紀後にはコンスタンチノーブルに姿を見せていた。やがてその人数は増加し、現代ではルーマニアを初めとして欧州各地、アフリカなどに1000万人を数えるといわれる。

ジプシーの歴史は、庇護から迫害への歴史である。最初、彼らは、神聖ローマ帝国の皇帝ジギスムントから聖なる乞食である巡礼者として「特許状」を与えられた。この時代の欧州は、当時のイスラム文化の多様性を受けて好奇心をもってジプシーの異質性を受け入れたのである。これは言い換えれば、他異権の承認である。

しかし、15世紀になると特許状は無効とされ、ジプシーは都市部への移動を禁止されるようになった。18世紀以降は、ジプシーにとっての苦難の時代である。奴隷化、強制定住、傭兵、ユダヤ人と同様の下等人間視、ナチスによる強制収容と処刑、土地所有の禁止、指定居住地への囲い込み等、その数例である。

現在でもジプシーは、欧州で異端視されている。年長者への独特の尊敬の念（patjiv）を欠かないことを名誉の1つとし、移動の自由を保つことを最高と考える彼らの社会は、明らかに欧州社会の

中のヘテロトピアである。

そうしたジプシーだが、欧州の音楽や芸術文化に大きな影響を与えた。ハンガリーの音楽チャルダッシュ、スペインのフラメンコ、ロシアのロマンス歌謡はジプシーなしには存在しなかった。それにヨハン・シュトラウスII世の母方はジプシー系だし、俳優のチャーリー・チャップリンの母方の祖母もジプシー系である。スウィング・ジャズのジャンゴ・ラインハルト、スウェーデンの作曲家でアコーディオンの名手カッレ・ユールボーンなど、これまた、ジプシー系である。

あまり知られていないが、英国には漂泊民として、外来のジプシーとは別に固有のトラヴェラー（traveller）と呼ばれる人たちもいる。彼らは、基本的には漂泊民だが現在は定着している。彼らの起源については明らかでないが、ケルト民族が渡来する前にアイルランドにいた先住民だともいわれている。そのため、Irish travellerとかItinerantsとも呼ばれる。彼らも、ヘテロトピアを形成している。

中世の欧州において、乞食は特殊なヘテロトピアであった。キリスト教支配の下で、乞食は人々が施しの善行を行う不可欠の対象として存在していた。ある時期、フランクフルトの課税表には、乞食は職業として認められていたのである。

5. 「文明の衝突」から「文化価値摩擦」へ

本筋に話題を戻して行こう。

小国に分裂していたドイツでプロイセン国王を皇帝としてドイツ帝国が成立したが、1870年カトリック教会が教皇権を強化し、国家対教会の対立になる危機が生じた。ドイツ帝国宰相ビスマルクは、ドイツ帝国の統一を妨げるものとして、1871年から1878年にかけてカトリックを封じ込めるための政策を行った。「文化闘争」（Kulturkampf）としてよく知られているが、これは一般国政文化価値と教会文化価値の摩擦の顕著な1例である。

現代においても、様々な衝突や摩擦が指摘、予見された。フランシス・フクヤマは『歴史の終わり』で、民主主義と自由経済が続くという考えを提示した。

これに対して、サミュエル・ハンチントンは、『文明の衝突』において、冷戦後は共産主義と民主主義に代わり、西洋文明、イスラム文明、中国文明、日本文明、インド文明、ラテンアメリカ文明、アフリカ文明に分け、イスラム文明と中国文明に対抗するため、アメリカ、欧州、日本は協力を強化しなければならない、と説いた。

ごく最近では、ソ連の崩壊を予測し、国家の基礎構造をなす家族制度からEUの弱点を論じているエマニュエル・トッドが、ギリシャの経済危機、難民の欧州への大量流入の最中に、EUとユーロが欧州諸国を閉じ込め、ドイツだけが得をするとした『「ドイツ帝国」が世界を破滅させる日本人への警告』（2015年）が、国家対国家、国家対EUの関係を鋭く分析している。これを見ても、文明の衝突というより、文化の摩擦の感じが強い現在である。スウェーデンによる難民の大量受け入れがもたらす結果も、文化価値の摩擦に思われる。

6. スウェーデンの難民受け入れの実態

難民に関する報道に接すると、心が痛む。それと同時に、難民受け入れに熱心であると言えば聞こえがいいが、スウェーデンの熱心さは度を越している、異常とも言えるまでに高まっている。これは、決して過言ではない。その異常性について、日本のメディアではあまり報じられていないので少し述べる必要がある。

2013年9月、スウェーデン政府は、入国を希望するシリア難民を全部受け入れる旨宣言した。欧州で初めての宣言である。一時的滞在許可の他、申請すれば永住権を与えられるのである。こうして2014年には、難民の地位申請者の数は8万人にのぼった。今年の難民申請者数は、16万人と推定されている。場合によっては、19万人になるかも知れないという。難民申請が難しい旨の警告を国外の新聞に出したデンマークとは、大きな違いである。

スウェーデンの難民、移民の数は1990年代から計算すると100万人に近く、全人口950万人の約2割である。この中には、兄弟国である北欧諸国からの移民も若干含まれる。もっとも彼らは、同質

の文化をもっているから実際は移民としての意識はないに等しく、隣の県から来た位の感覚である。

政府がこのように難民受け入れに積極であるのに応じるように、2015年9月6日にストックホルムで難民受け入れ促進大会が開かれ、1万5千人が集まった。同様の集会在第2の都市イエーテボリでももたれ、1万人が氣勢をあげた。

さらに、驚くことは、数人の警察官が「シリア難民よ、君たちは友達だ。安心してスウェーデンに来たまえ」という趣旨の意見をyou tubeに出したことである。いくら表現の自由があるとしても、私達から見れば明らかに度を越した行動である。

かなりの数の難民がEUに流入する一因にシェンゲン協定の存在がある。1985年のシェンゲン協定は、人の移動の自由の下に、協定調印国では人の移動の自由が保障され、第3国人もいったん調印国に入国を認められれば、調印国内での自由移動が認められるとしている。シェンゲン協定加盟国は現在26カ国であるが、英国は非加盟である。様々なルートでドイツに入った難民のかなりの人数は、さらにシェンゲン協定加盟国のスウェーデンへと北上するのである。

スウェーデン国民の約3分の2は、難民大量受け入れ賛成である。ちなみに、ドイツでは大量受け入れに危機感をもつ人が旧西ドイツでは36%、旧東ドイツでは46%という高い数値を示している。

スウェーデンへの難民は、大抵バルト海を横切って大陸から大型船で第3の都市マルミョーの港へ上陸する。その人数は何百人単位である。大人ばかりでなくensamkommande barnと呼ばれる、家族と一緒にではなく単独でやってくる10代の子供も多い。彼らは、多くの場合グループを構成している。

難民の中にはスウェーデンに留まらず、フィンランドへ向うトランジット難民もいる。ストックホルム中央駅には、毎日何百人もの難民がやってくる。トランジット難民に対しては、Migrationsverket（難民・移民庁）や地方公共団体は法律上経済的援助をする権利をもたない。これを憂いて、9月25日には、ストックホルム市財政長官カーリン・ヴァンゴードが、「緊急時においては、法を無視し援助してもいいのではないかと政府に質したが、

ここまで来ると、法治主義の破壊思考であるとしか言いようがない。

7. 受入れ積極要因

なぜ、スウェーデンはこれほどまでに難民受け入れに熱心なのか。その理由をいくつか考えてみよう。

第1は、人権保護意識が強いということである。外国人差別は皆無だとは言えないにしても、最も少ない国の1つである。唯一の例外は、ジプシーに対する差別観であろう。

第2は、利他主義（altruism）が社会の根底にあるということである。利他主義は素晴らしいが、相互的なものでなければならぬのは当然である。

第3は、かつてスウェーデン自体が貧しかった時代にアメリカに多くの移民を送り出した歴史的経験が、今度は難民、移民の受入に非常に好意的に作用しているということである。

第4は、国際協調性が強いということである。今回の難民受入に関しては、あたかもドイツと歩調を合わせているかのように見える。第2次大戦中ドイツに支配されたデンマークやノルウェーと違って、戦時中立を貫いたスウェーデンにはドイツに対する心理的反感はない。しかも、戦時中立国の義務に反して自国領土の通行をドイツ軍に認めたように、ドイツ鼠兎の感じが否めない。コペンハーゲンの博物館にある対独レジスタンス展示は、スウェーデンにはないのである。

第5は、外国に支配された経験がなく、国民も同質文化の中で生きてきたので、異質の文化と宗教の混在がいかに困難であるかの認識度が低く、多文化共生の実現をナイーブに信じ込んでいることが挙げられよう。この場合ナイーブとは、マイナス的意味である。世界を悪い目で見ない純真さは、場合によっては「とろくささ」ともなり得るのである。

第6は、植民地をもった歴史もないので、心理的に負の遺産を感じていることもないのである。植民地をもっていた英国やフランスは、旧植民地の人々との間の様々なやりとりを通して国際関係の中で強かさを身につけている。そうした経験が

スウェーデンにはないので、強かさにも欠けているのである。

第7は、「スウェーデンらしさ」（svenskhet）に対する求心性が少なくなってきたことである。国際関係におけるスウェーデンらしさとは、平時においては中立政策、戦時においては戦時中立の国是であり、それなりの評価と尊敬を受けてきた。ところが、ごく最近ではNATOへの加盟問題が論じられたりしている。これも、スウェーデンらしさの喪失を意味するような気がするのである。

8. 文化価値摩擦

難民や移民は、スウェーデンでは他異権をもつが、諸種の局面に見出させる難民ヘテロトピアを構成してる。難民はスウェーデン語を理解しないから、難民同士で集団を形成する。その結果、居住地分離現象が起こる。

ストックホルムを例にとれば、市内には非移民のスウェーデン人が住み、地下鉄の終点の郊外の町では難民、移民が住民の大半を占める。一種の住み分けである。その結果、そこでは難民でない先住の小学生などが正式なスウェーデン語を話せなくなったりする事態が発生している。これは、国語としてのスウェーデン語の混合言語化現象である。

宗教も作用する。難民の多くはイスラム教徒である。イスラム教徒の習慣、思考、人権観、服装、男尊女卑的行動などは、男女平等社会を達成しているスウェーデン社会とは相容れない。

難民は、スウェーデンでは、衣食住が保障され、小遣いまで支給される。至れり尽くせりである。これだけ手厚く遇しても、住居が都市部でないことを不満として、ハンガー・ストライキを行ったりする。理解に苦しむ現象である。

こうした行動をとる難民には、感謝の念が欠如している者がいる。富める者は貧しい者に施し、すなわち喜捨をするのが当然だから、施しの善行の機会を与えられた富めるものが感謝すべきである、というイスラムの教義を持ち込んでいるのではないかと思ったりする。

さらに、最も忌むべき事件も起きている。イス

ラム難民・移民による性犯罪である。こうした情報は、日本のメディアにはあまり伝わってこない。犯人は、肌を隠していない白人女性は男を欲しがっている、という解釈をしている。祖国で婦女暴行をすれば、血の復讐を呼び起こす。スウェーデンでは、刑務所に送られても3食付きで重労働もない、気楽なものだ、と嘯いている。

難民、移民による性犯罪発生率は、極めて高い。スウェーデン国民もあまりこうした事を知っていない。というのも、1987年3月21日にジャーナリストと組合との間で、特定の記事掲載を制限できるとの取極めがなされているからである。難民による性犯罪を詳しく報じれば、難民憎悪が起きるので、メディアが自己規制をしている感じさえある。

入国した難民のうちの難民申請をしていない1万人の所在が明らかでないという報道もあるが、難民・移民庁はそれを危機とは考えていない。テロリストが混ざっている危険性だってあるのに、信じられないような危機管理意識のなさである。

こうした諸点を総合して言えることは、スウェーデンの目指した多文化共生、統合政策(integrationspolitik)は成功していないということである。ある評論家によれば、2030、40年代には国民の半数近くが外国出身者およびその子孫によって占められるだろうというという予測がある。それをどのように評価するかは、スウェーデン国民自身である。

自国民を犠牲にして、国際的に密度の濃い交流のあまりない国の難民、移民の無計画とも言える受入に反対している政党もある。社民党を中心とする現連合政権に対して、第3番目に大きい政党「スウェーデン民主党」である。ジミー・オーケソンを党首とするこの党は、政権を担う社会民主党やその支持者などからは極右政党であるとかネオ・ナチであると評されているが、見当違いも甚だしい。

スウェーデン民主党は、まずスウェーデン人のための福祉を考えている至極真っ当な理念に基づいている政党である。難民援助を排する訳ではないが、まず自国民の利益を考えるのが政治家の任務である、と主張しているだけである。

現在のような難民政策を続ければ、スウェーデ

ン社会が大きな損害を被ることは目に見えている。簡単にいえば、難民受け入れによって自国の老人、弱者に対する社会福祉に大きな皺寄せが来ており、さらに財政が圧迫され伝統ある福祉社会の根底を揺るがしかねない事態を招いているということである。その兆候は、すでに現われている。

JAICAの前理事長だった女性が、我が国は積極平和外交でもっと難民を受入れるべきだと新聞で述べていたが、事はそう簡単ではないのである。アニミズム、多神教の日本と一神教との根源的差異が文化価値摩擦を呼び起こすことは明らかである。

1ヵ月前の訪米の際、日本も難民受入にもっと積極的になるべきであるという意見に対して、安倍首相が、970億円の拠出はするが日本は高齢者と女性の地位向上の問題もある、と答えたのはスウェーデンの事例を考えて見れば正論である。これは、安倍内閣の唯一といってもいい位の功績である。

政治家は、まず第一に自国民の利益、すなわち「自国民益」を考えなければならないのである。難民を受け入れるには、気の毒、可哀相といった感情に情緒的に瞬間反応するのではなく、まず予測可能な事態を周到に検討して用意しておく必要がある。それでも、不測な出来事の発生を免れないのが実情なのである。

私には、難民を非難したり誹謗したりする意図はない。人種差別観もないし、国粹主義者でもない。現に、私の妻は生粋のスウェーデン人で、私達の日常言語はスウェーデン語である。しかし、シリア難民について言えば、オバマ大統領が明言したように、非難され任を離れるべきは、自国民の多くのが脱出し難民とならざるを得ないほど統治能力を欠いている大統領のアサドである。統治能力の欠如が、難民を作り出しているのである。

9. 結語—芸術は文化価値の融合を促す

ここで、論調を変えて文化価値の融合を見ることにしよう。

ジプシーは、他の欧州諸国におけると同様、スウェーデンにおいても差別されている。しかし、

事が芸術に関係すると、差別観は無くなる。こうした現象は、どこの国あるいはどの地域においても見られるのである。その好例が、スウェーデンではカッレ・ユーラルボー（Kalle Jularbo, 1893年－1966年）である。

ジプシーの家系のユーラルボーは、作曲家であると同時に5才の時からアコーディオンに親しんだスウェーデン最高のアコーディオン奏者であり、また彼の作曲した多くのメロディーを知らないスウェーデン人はいないといわれる位、人々に親しまれた。80人ほどの寒村で生まれたユーラスボーは、音楽という芸術でジプシーの文化とスウェーデンの文化価値を見事に融合、構築したのである。

短い夏の夕べ、各地で行なわれる野外での音楽祭やダンスの場では、彼の作曲したアコーディオンの曲が流れ、人々はワルツを踊り人生を楽しんでいる。多くの作曲の中で、特に人々に好まれている曲『エーリンを夢見て』（Drömmen om Elin）の歌詞と直截的でなく意識に近い感覚的な拙訳を載せて、この小論を閉じることにしよう。

“Drömmen om Elin”

Vad jag drömt om dig
Lilla Elin lik som sommarns vind
Söt som socker strut
Med brun och fjunig kind
Under alla år
har jag burit med mig drömmen
Drömmen om Elin
Leende under en blommande lind

Vad min dröm ar skön där är du så ung och
varm och ljus
Solen i ditt hår
Ett avsked vid ditt hus
I min ensamhet vänder jag till drömmen
Drömmen om Elin
Barbent i tunn sommar blus

Elin i min dröm
Går ditt skratt mot skyn som en ballong

Du far
I min famn och vinden drar en sång
Det blev aldrig vi
Men jag drömmer ändå drömmen
Drömmen om Elin
Och om en sommar en gång

《エーリンを夢見て》

心に想うは君のこと
夏風のように爽やかで
綿菓子のように甘く
陽にやけた柔肌の頬
いつも夢見る君のこと
若樹の下で微笑んでいる
愛しのエーリン

心に抱くは君のこと
夕陽に映える金色の髪
君の家から帰るとき
はや孤独の念に麗われて
心を占めるは君のこと
素足に夏服の愛しのエーリン

夢の中のエーリン
笑声は風船のようにはじけ
歌声となって風にのっていく
夢だけど夢でもかまわない
あの夏がまた来て欲しい

参考文献・資料

邦文（訳文を含む）：

- 阿部謹也：『中世を旅する人々』，平凡社，1978年。
- 石渡利康：「ジプシーの自由と死とその周辺問題－『ジプシーは空に消える』（Таб ор ухолит в небо）からの小考－」，日本情報ディレクトリ学会誌Vol.11 2013年。
- 石渡利康：『性権と人間存在』，高文堂出版社，1987年。
- 石渡利康：『スカンジナビア法論集』，八千代出

版, 1986年。

- 石渡利康:「非領域的マイノリティー—欧州におけるロマ (Roma), 国際関係研究, 第18巻第3号, 平成10年3月。
- 石渡利康:「ヤンテの法と価値ニヒリズム—北欧福祉平等社会の基礎表象と変容—」, 国際関係研究, 第35巻第1号, 平成26年10月。
- 坂田正顕:「ヘテロトピアとしての巡礼空間」, 早稲田大学大学院文学研究科, 紀要第1分冊, 2013-02-26。
- 挽地康彦:「スウェーデンにおける移民統合のパラドクス」, 和光大学現代人間学部紀要第8号, 2015。
- 廣瀬浩司:「ヘテロトピアのまなざしと制度の身体」, 言語文化論集, 第44号, 筑波大学, 1997年。
- 南直哉:『善の根拠』, 講談社, 2014年。
- 三好範英:『ドイツリスク 「夢見る政治」 が引き起こす混乱』, 光文社, 2015年。
- クレボン・マルク:『文明の衝突の欺瞞』(白石嘉治編訳), 新評論, 2003年。
- フランシス・フクヤマ:『歴史の終り』(渡部昇一訳), 三笠書房, 1996年。
- ハンチントン, サミュエル:『文明の衝突』(鈴木主悦訳), 集英社, 1998年。
- トッド・エマニュエル:『「ドイツ帝国」 が世界を破滅させる』(堀茂樹訳), 文芸春秋社, 2015年。

スウェーデン語:

- Aftonbladet. Lördag 26 September.
- Debatt. Fredag 9 oktober 2015.
- “Flyktingmottagandet”. STV Inrikes. Stockholm vill bryta mot lagen för att hjälpa flyktingar. 2015-9-25.
- Migrationsverket: Den svenska flyktingkvoten. 2015-05-12.
- Migrationverket: Lagar om asyl, lagar om vård och samhällsvård (Migrationsinfo. se)
- Sandaren: Minoriteten av som får stanna är enligt internationell lag. 2015-09-15.
- STV. Presskonferansen om flyktingstationen. 2015-10-9.

- TT. Elisabeth Mormorstein. pub. 21-10-2015.

デンマーク語:

- Danmarks historien. dk., Invandring til Danmark efter 1945. Aarhus Uni., 2014.
- Flyktingfakta. info, Danmark,
- Ross, Alf: Om ret og retfaerdighed. Reizel. 1953.

フランス語:

- Fernand Beckmann, Dan: Benevolat et solidarité. Syros, 1992.
- Foucault, Michel: “Des espaces autres”. EMPAN, 2004/2 (nr. 54)

英語:

- Baille, Caroline & Kabo, Jens: Heterotopia: Alternative Pathway to Social Justice. Zero Books, 2013.
- Giugni, Marco and Passy, Florence (eds.): Political Altruism? Solidarity Movement in International Perspective. Rowman Littlefield Publishers. 2001.
- Miller, John: The globalization of Spaces: Foucault and Heterotopia. Routledge. 2015.
- The Cultural Reader. Article summaries and Reviews in Cultural Studies. May-11-2011.

新安郡のキリスト教と島民生活

金 美 連

Miyeon KIM. Christianity and the Islanders' Lives in Shinan County. *Studies in International Relations* Vol.36, No.2. February 2016. pp.31 – 38.

Shinan County(Sinan-gun), located at the south-west of the Korean Peninsula, showed the highest proportion of Christians in a survey of the National Statistical Office in 2005. Christianity was spread throughout the region by martyrs who have influenced believers until now. Many Christians have especially visited Jeung island(Jeung-do) which has a martyr memorial.

Christianity has changed ancestor worship, funeral rites and festivals in Shinan County. The churches have also been influenced by traditional culture. For example, there are many Christian rites that follow traditional manners, and churches have opened schools for the increasing elderly population, to cope with an aging society.

This paper historically considers the Christian evangelical process in Shinan county. Also the changes and impacts that Christianity has brought to the islanders' lives are considered.

はじめに

新安郡は朝鮮半島の南西の海上にある73の有人島と754の無人島で構成されている。この中で智島(1975年)は海峡が埋められ、押海島(2008年)は橋で内陸部とつながっているが、それ以外はすべて島嶼であり新安郡は全国で一番島嶼の多い行政地域である。地理的には中央政府から孤立しやすく、産業化や近代化にも遅れをとっている地域である。

しかし、このような新安郡が2005年の統計庁の調査で全国でもっともプロテスタントの比率が高い地域ということが判明した。1995年の統計庁の調査ではプロテスタントの比率は人口の29.48%であったが、10年間5.52%増加して2005年の調査では34.98%を示した。全国のプロテスタントの比率が1995年の19.64%から2005年の18.23%に減少した現状とは逆である。

とりわけ新安郡の曾島は実際に住んでいる住民の90%近くがプロテスタント信者であり、全国でもっともキリスト教信者の比率が高い地域である。曾島には寺はなく、村の堂(村祭りを行う所)も1カ所残っているだけで、教会が共同体活動の中

心となっている。他の島は曾島ほどではないが、それでも多くの村に教会が建てられている。

本稿では、辺鄙な新安郡にキリスト教(プロテスタントを中心に)が伝来して、全国一のキリスト教化に至った過程を探りたいと考える。そしてキリスト教が島民生活にもたらした変化や影響、さらにキリスト教の土着化過程についても考察したい。

I. 新安郡のキリスト教概要

新安郡は行政的に全羅南道に属しているので、全羅南道のキリスト教の伝来に触れながら新安郡のキリスト教の伝来と普及について述べることにする。

韓国におけるプロテスタントの伝来は1884年にアメリカ宣教師の来韓から始まったが、1892年6月には北監理教(日本におけるメソジスト教団)と北長老教の宣教師たちによって宣教地域を分割することが協議された。そしてその翌年には全羅道は忠清道とともに南長老教が担当することが決まった¹⁾。1894年には南長老教に所属していたテイ(L. B. Tate)宣教師と彼の妹のメティ・テイ

ト (Mattie S. Tate) 宣教師が全羅北道全州に派遣され、宣教活動が始まった。1897年3月には全羅南道羅州にも宣教拠点の築こうとしたが、儒教学者たちの活動が活発な羅州ではキリスト教への反発が大きかったため、同年9月に羅州での宣教事業を撤回し、木浦に活動の場を移した。全羅南道の港町である木浦は1897年10月に開港したばかりで外国人が居住しやすく、宣教の自由が保障されていたからである²⁾。それから光州や順天にも宣教拠点を築き、全羅南道は広い範囲にわたってキリスト教が伝えられるようになった。宣教師たちは教育や医療活動と並行しながら献身的に布教に励み、信者数はますます増加していった。初期は年寄りや夫人、農民、漁民など、主に下層の人々の入信が多かったが、1919年の3・1運動³⁾以降は青年や知識人も入信した⁴⁾。

木浦におけるキリスト教の普及は木浦から近い新安郡にも影響を与えた。木浦で働いていた宣教師たちの中には近隣の島にも足を運んでキリスト教を伝えた者がいたが、中でもメッカルリ (Mr. Mrs. H. D. McCallie) 宣教師夫妻は島嶼地域の布教に献身的であった。下に引用している1910年の木浦宣教部のレポート⁵⁾には、彼らの活動振りが記されている。メッカルリ宣教師はアメリカから送られてきたボートに乗って、100以上の島々を訪問しながら布教した。彼が島嶼地域を最初訪問した1908年には教会が1カ所しかなかったが、1910年には6カ所の教会が新たに誕生した。その中には新安郡の最初の教会である飛禽島の徳山教会も含まれている⁶⁾。

H. D. McCallie says "This work is nearly all quite new, there being only one church with baptized members when turned over to me in the Fall of 1908. The Islands embrace four whole counties and number over 230. …… Faithful pioneer work, chiefly through native assistants, was done by Dr. Owen and Mr. Preston, and thus is illustrated the saying that one sows but another reaps. After the gift of a sail boat from my father I have gone North, East, South and West visiting over one hundred Islands and

hundreds of villages so that thousands have heard the Good News for the first time. Almost without exception our welcome was cordial while our message received an attentive hearing. Every part of my territory was revisited this spring and six new churches started. ……"

1920年代に入ると、韓国人による布教も活発になっていく。特に朴道三長老⁷⁾は小船に乗って南西海岸の島々を回りながら布教し、新安の教会成長に大きく貢献した。そして文俊卿 (문준경) 伝道師 (写真1) が、朝鮮戦争 (1950~53) の最中に新安の曾島で共産党に殺害され殉教した事件を契機に、聖潔教 (日本におけるホーリネス教団) の教会が大きく発展していくことになった⁸⁾。



写真1 文俊卿伝道師 (八禽島元山教会所蔵)

文俊卿伝道師は、1892年に新安郡岩泰島で生まれた。17歳の時に新安郡曾島に嫁に行ったが、夫には既に愛人がおり、結婚初日からやめのような生活をしなければならなかった。男尊女卑の社会の下でやりたい勉強はできず、夫には捨てられ苦しくて寂しい日々を送らざるを得なかった。その後、彼女は木浦に出ていったが、そこでキリスト教に導かれた。彼女は新しい人生を得た喜びのあまり、キリスト教に献身することとなった。神学校での勉学の途中、彼女はまず夫が愛人と暮らしていた新安郡荏子島に真理教会を建てた。さらに、結婚して20年あまり住んでいた曾島にも甌島里教会を建てた。そればかりでなく、小船に乗って新安郡の多くの島々に出向き、キリスト教の布教に励んだ。

しかし日本の植民地支配の末期には、曾島の教会は親日派に売られ、文俊卿伝道師も日本の警察に尋問を受けることがあった⁹⁾。だが悲劇はそれに留まらず、彼女は朝鮮戦争の最中に共産党に逮捕され、「卵をたくさん産んだ雌鳥」と嘲られながら殺されたのである。彼女は死を避けることができる状況だったにも拘らず、信者たちを心配して自ら曾島に入って行って、結局殉教（写真2、3）したのである。文俊卿伝道師が殉教した日には荏子島の真理教会でも48人の信者たちが共産党に殺された。彼らの命も惜しまない殉教信仰は多くの人々に感動を与え、新安郡でキリスト教を広める原動力となった。



写真2 文俊卿伝道師の葬列
(八禽島元山教会所蔵)



写真3 文俊卿伝道師の殉教記念碑

戦後は様々な教派のキリスト教会が新安郡でも活動するようになった。しかしキリスト教の伝来初期に全羅道を割り当てられた教派は南長老教で

あったため、現在でも新安の南部地域では長老教の教会が多い。一方、新安の北部地域では文俊卿伝道師の熱心な布教と殉教の影響を受け、聖潔教が優勢である。中部地域では諸教派が混在している。ただし、これらの諸教派は競争関係にあるだけではなく、島という限定された空間の中にいるという連帯感もあり、教派を越えた集会も催される。

新安郡における長老教と聖潔教は、まず島の中心の村にそれぞれの教派の拠点となる教会を建てた。そしてその教会が成長すると、他の村々にも同じ教派の教会を設立していった。その結果、現在は新安郡のほとんどの島に、しかも多くの村に教会が建てられており、全国一のキリスト教化を誇る地域となったのである。次の表1は新安郡の宗教団体の現況を示しているが、新安郡ではプロテスタント教会が圧倒的に多い。

表1 新安郡の宗教団体の現況
(2013年3月現在)

| | 人口 (人) | プロテスタント 教会 | カトリック 教会 | 仏教寺院 | 儒教の郷校* |
|-----|-----------|---------------|-------------|------|--------|
| 智島邑 | 5,012 | 27 | 1 | 1 | 1 |
| 曾島面 | 2,025 | 11 | | | |
| 荏子面 | 3,647 | 13 | 1 | | |
| 慈恩面 | 2,405 | 9 | 1 | 1 | |
| 飛禽面 | 3,891 | 15 | 1 | 1 | |
| 都草面 | 3,097 | 14 | 1 | 2 | |
| 黒山面 | 4,578 | 20 | 1 | 2 | |
| 荷衣面 | 2,020 | 11 | 2 | | |
| 新衣面 | 1,856 | 7 | 1 | | |
| 長山面 | 1,772 | 7 | 1 | | |
| 安佐面 | 3,483 | 18 | 1 | | |
| 八禽面 | 1,190 | 5 | | 1 | |
| 岩泰面 | 2,224 | 11 | 2 | 1 | |
| 押海面 | 6,753 | 24 | 2 | 1 | |
| 合計 | 43,280 | 192 | 19 | 12 | 1 |

典拠：新安郡庁の資料をもとに作成。

*郷校(향교)は儒教を教えるための国家教育機関である。現在、全羅南道には29カ所の郷校が残っているが、新安郡には1カ所がある。智島の郷校は1898年に設立され、現在は春と秋に孔子や儒教の先賢たちのために祭祀を行っている。

新安郡は交通が不便で近代化にも遅れをとっている地域であるが、プロテスタント教会は192カ所にも上る。カトリック教会は大きな島に1カ所ぐらいあるだけである。ただ、例外的に黒山島のカトリック教会の教会員の人数（2013年3月現在）は352人であり、20カ所のプロテスタント教会の教会員の人数を合わせた641人の約半分に当たる。黒山島におけるカトリック教会は1952年に建てられ、1915年に建てられたプロテスタント教会より始まりは遅かったが、教育や福祉に力を入れながら活動したため、新安郡の中ではもっともカトリック教会の活動が活発である¹⁰⁾。仏教寺院は12カ所あるが、すべてが20世紀に建てられており、寺院の規模も小さい。そして寺院に所属している信者たちの信仰心も本土に比べると深いとはいえない。その他、「タンゴル（당골）」¹¹⁾と呼ばれる巫女は現在飛禽島に1人、長山島に3人いるだけで、近代化やキリスト教の普及などにより巫俗も衰退化を辿っている。

新安郡におけるキリスト教の普及の要因として考えられるのは、前述した通りに宣教師たちや信者たちの献身的な働きと殉教、そして長老教と聖潔教を中心として繰り返された教会開拓である。また新安郡は15世紀から16世紀にかけて日本の侵略により島を空けておく「空島化政策」が進められ、今日の島民の先祖といえる人たちは17～18世紀に本土や近隣の島嶼地域から移住してくるなど、大きな社会変動を経験しており、そのため本土に比べると儒教や仏教の基盤が強くなく、外来宗教がより受け入れやすかった側面がある。特に男尊女卑の儒教倫理の下で抑圧されていた女性たちは、教会活動を通して新たな自分を見出すことができた。現在も女性信者の方が男性信者の2倍を超えており、島特有のたくましさや備えている女性たちは積極的に教会を支えている。教会側も島民の宗教的欲求や必要に応じながら島嶼文化に根付くことができたと思われるが、これについてはIIIで具体的に述べることにする。

II. キリスト教による在来文化の変容

1. 信者個人への影響

ここでは、キリスト教が島民生活にもたらした影響や変化について論じることとする。まずキリスト教の信者個人への影響を探りたい。

韓国では古来から家の守護神が財運と食運を象徴する穀物に宿ると信じ、それらを甕や壺に納めて拝んできた。新安郡でも初稲粃を納めてマレ（마래；板の間）の隅に安置するソングドヌウ（성주동우；成主甕）や、新米を納め白い紙で蓋をして部屋の棚の上におくアネオガリ（아내오가리）、子供を授け安産と成育を見守るとされるチアン婆さんが宿るとされるチアンオガリ（지앙오가리）などを家の守護神と見なし、大事に祀ってきた。しかし近年新安郡では家の守護神信仰の神体として用いられた甕が多く姿を消してしまった。1980年代以降行われてきた住宅改良の際に甕を処分した場合が大半であるが、中にはキリスト教信者となり、偶像崇拜的要素を排除しようとする信仰的決断から甕を処分したケースもある。

また初期の宣教師たちは偶像や迷信を打破することを唱えていたが、その精神は現在でも受け継がれており、偶像崇拜に当たるベッコサ（벉고사；船告祀）や、クッ（꺄；巫俗祭儀）、占いなどははいけないこととされている。

ただし、伝統儀礼のうち、現在なお重要視されている死者儀礼に関しては折衷的な儀礼を設けて対応している。死者の生者への影響を信じている新安郡の島民にとって死者儀礼は粗末にはいけないものである。そのため、キリスト教信者になった場合でもキリスト教式に形式を変えて儀礼を行っている。祖先祭祀に代わるキリスト教式儀礼を「追悼式」と呼んでおり、葬式に代わる儀礼は「キリスト教式葬式」という。キリスト教式儀礼は伝統的儀礼の方式を踏襲しているが、それでも供物を供えて行う死者への祭祀をしないため非信者にとっては在来の死者儀礼への否定として受け入れられている。そのため、キリスト教式儀礼への移行をめぐる信者と非信者の間で葛藤や衝突が頻繁に生じている。

墓地については、押海島の中央聖潔教会、押海

大川教会、大川中央教会で教会墓地を所有しているが、それを利用する信者は多いとは言えない。中央聖潔教会の場合は、2015年9月現在50数体が埋葬されており、押海大川教会は40数体が埋葬されている。新安郡では畑や山の一面に一族を個別の墓に土葬するか、あるいは風水的な理由や便宜を図るために先祖が葬られている場所とは別の所に個々人の墓を造成するかにする。ところが、キリスト教信者になっても墓地は家族で保持・継承するものであるという認識にあまり変わりはない。ただ、信者の印として墓石に十字架を彫り入れることはある。

価値観や観念の変化としては神観念の変化が大きい。新安郡は本土に比べて儒教や仏教の影響が強くなく、韓国本来のものと推察される靈魂観が窺われる地域である。現在でもソンチュ（성주；成主）¹²⁾信仰や鬼神（귀신）¹³⁾・トッケビ（도깨비）¹⁴⁾信仰、龍王神（용왕신）¹⁵⁾信仰などが衰退しながらも存続している。しかし、キリスト教ではこれらの神々は単なる偶像に過ぎず、キリスト教の神だけが唯一神である。新安郡は死の前にしても信仰を屈しなかった殉教によってキリスト教が広がった地域であり、現在でも本土より迷信や偶像に対する排他的姿勢が強い。ただし、長年伝統文化の中で生活してきた年寄りの信者たちは伝統的な神観念や靈魂観を引きずっており、それらがキリスト教的な神観念と重層的に重なり合っている。

その他、酒やタバコをやめ、誠実になったという評判もある。また年老いた女性信者たちはほとんどが無学で韓国語が読めなかったが、10年以上教会に通った信者たちの中には韓国語の聖書を手に取りながら韓国語を読んだり、書いたりすることができるようになった場合もかなりある。

2. 村への影響

ここでは、キリスト教が村へ及ぼした影響について探してみたい。

新安郡では島民の安寧と豊作を祈願して行う村祭りを「堂祭（당제）」という。1983年の報告によると、新安郡では120カ所で堂祭が行われていたというのが¹⁶⁾、現在は堂祭を行っているところは

数少なくなった。若者の都市への転出や近代化などが大きな要因であると思われるが、キリスト教の普及も堂祭の衰退を促した一因であると考えられる。なぜなら堂祭は儒教式あるいは巫俗式で行われるため、キリスト教信者たちは参加を忌避するからである。これをめぐっては信者と非信者の間で葛藤が起こっている。信者が多い村では教会が村共同体の中心となるため堂祭への対応は難しくないが、そうでないところでは対立関係になってしまう。

自然の力に多く頼らなければいけない島嶼地域であるため、豊魚祭や祈雨祭なども多く執り行われていたが、現在は堂祭と同じく、キリスト教の普及などにより衰退の道を辿っている。豊魚祭は個人的に儀礼を行うこともあるが、堂祭と同じく村共同体で執り行う場合が多い。村で執り行う際は儀礼の方式をめぐって、信者と非信者の間で摩擦が生じることがある。荏子島下牛里では1997年から豊魚祭を再び始めたが、教会では豊魚祭をキリスト教に反する儀礼と見なし、キリスト教の礼拝を取り入れた豊魚礼拝として行うことを要求した。しかし非信者たちはこの提案に強く反対したため、教会側と非信者がそれぞれ違う形式で別々に儀礼を行うことになった¹⁷⁾。キリスト教が村の生活にも影響を及ぼそうとするとこのような葛藤が付きまとう。しかし今日はキリスト教の影響だけでなく、高齢化や科学の発達などにより、村祭りの衰退は加速されている。そのため、新安郡庁では海水浴などで年々増加している観光客を誘致するための手段として、これらの祭りを奨励しようとしている。ただし、宗教的色彩の少ない郷土祝祭として推進している。

一方、押海島宋孔里の事例のようにキリスト教への反動として巫俗儀礼が復活した場合もある¹⁸⁾。宋孔里では村で交通事故のような悪いことが多発したため、木浦にある巫堂（무당；巫女）に伺いを立てた。すると事故の原因が教会の建物と教会の前にある墓が村の運気を断ってしまったからだといわれた。それで村ではお金を集めて巫俗儀礼であるクッを行ったことがある。このように非信者たちがキリスト教に対するリアクションを起こして、伝統儀礼を復活させたこともある。

一方、キリスト教は村の非信者たちの儀礼にも影響を及ぼす。新安郡では旧正月や秋夕（陰暦8月15日）の前夜に本土に比べると素朴ではあるが、祖先を祀る「茶礼（차례）」を行っている。キリスト教信者の場合は家族でキリスト教式礼拝を行ったり、本土に出ている家族が戻らなかった場合は何もしなかったり、教会でプログラムがある場合は教会に出席したりする。ところが、村人の関係が親密である新安郡では、このような信者らの対応は非信者たちにも影響を及ぼし、非信者の茶礼も段々簡素化してきている。またキリスト教式葬式の場合も虚礼でないという点については非信者からもいい評判を得ており、葬式の簡素化に影響を与えている。

それから妖怪的存在、あるいは人に取り付くと災いや病気をもたらす疫神的存在として観念されている「トッケビ（도깨비；鬼）」や、青色の花火のような「トッケビ火（도깨비불；鬼火）」も以前は夜よく村に現れたが、教会が建てられてから現れなくなったという話もある。

Ⅲ. キリスト教の土着化

キリスト教が信者個人や村にもたらした影響や変化は先述した通りに様々なことが挙げられるが、ここからは今までの論述とは反対に在来文化の影響で被ったキリスト教側の変化や対応について探りたいと考える。

森岡清美は、文化変容と土着化を区別して、前者が外来文化との接触によって在来文化がどのように変化したかに焦点を置いているのに対し、後者は外来文化の変化の方に観察の焦点が置かれ、外来文化の型が在来文化の型によって変容し、かくて在来文化の中に受容され定着することと規定している¹⁹⁾。そして外来宗教の受容・定着の問題を個人的レベル、集団的レベル、制度的レベルという三段階に分け、土着化は外来宗教が制度的レベルの定着に達した段階で用いることを提案した²⁰⁾。

この森岡の定義によると、今まで論じてきたキリスト教の信者個人や村への影響は文化変容に当たり、これから探るキリスト教側の変容や定着過

程は土着化に当たるといえよう。

新安郡におけるキリスト教の土着化の現象として見られるのは次のようなことである。

第一に、島民の宗教的欲求に応じて儀礼を催していることである。新安郡では従来から年中行事や人生の節目、入居、生業に関連した様々な場面において厄運を追い払い、幸運をもたらすために儀礼を設けてきた。儀礼の方式は巫俗式であったり、儒教式・仏教式であったりする。ところが、キリスト教信者たちの場合もこれらの長い間の慣習を完全に切り離すことができず、キリスト教式に形式を変えて儀礼を行っている。例えると、誕生日の感謝礼拝、起工礼拝、上棟礼拝、入居礼拝、開業礼拝、豊漁礼拝、播種礼拝、追悼式などであるが、牧師は島民の依頼に応じていろんな形の儀礼を執行している。

第二に、上記に挙げたキリスト教式儀礼は伝統的方式を踏襲して行われている。とりわけ葬儀は伝統的方式をもっとも取り入れており、臨終礼拝、入棺式、葬礼式、下棺式といった葬儀の流れは伝統的方式にのっとっている。またキリスト教式葬儀を行う場合でも村の広場で村人をもてなすことは従来通り行っている。そして、新安郡は葬式の前夜に太鼓を叩きながら踊ったり、歌ったりする「バンダレ（밤달애）」という風習が現在でも残っている地域であるが、キリスト教式の場合でもバンダレを行うことがある。棺を部屋から運ぶときに、悪霊を追い払うために部屋の入り口に瓢を置き、それを割って出ていく「動棺祭（동관축）」も親族らが行えば黙認する。

祖先祭祀をキリスト教式に変えた追悼式の場合も、祭壇の供物を下げて身内の者で食べる「飲福（음복）」という伝統的慣習に因んで、追悼式を行っても食べ物たくさん用意して、翌日村人を呼んで一緒に食べることが多い。ただし、先祖に供物を供えたり、拝礼したりすることは偶像崇拜に当たり、やってはいけないこととされている。

キリスト教式儀礼が行われる際に、これらの方式の踏襲だけではなく、伝統的心情の引きずりも窺われる。キリスト教信者でも死者の祟りや、風水、遺骨の色を気にすることがある。特に供物への拘りは強く、供物を供えないことについて不安

を感じたり、子女としての責任を果たしていないと思ったりする。新安郡の場合は無学の年配の女性信者が多いが、彼女たちは牧師の説教以外は聖書のことを詳しく知る機会があまりない。そのため、牧師が禁じていることについてはきちんと守ろうとするが、牧師の力の及ばないところでは伝統的意識の中に留まっていることが多い。

第三に、キリスト教信者であっても村の共同体との関係は維持される。村には青年会、婦女会などの組織があるが、信者でも加入して行事などを一緒に行っている。また葬式を助け合う「喪徒契(상두계)」に入っている場合は、教会と喪徒契が役割分担をして一緒に協力する。ただ、やり方をめぐって摩擦が起こる場合がある。

第四に、教会では深刻になっている高齢化問題に対応して老人学校を開いている。聖潔教の教会では年寄りを対象に、韓国語や教養などを教える老人学校を始めた。押海島中央聖潔教会では2004年から老人学校を始めて、2015年9月現在は約300人が在籍しており、歌やゴルフ、韓国語、コンピューター、ヨガ、体操などを習っている。2008年には智島中央教会、2009年には八禽中央教会、荏子真理教会、慈恩新中央教会、長山中央教会、2013年には曾島甌島里教会、都草聖光教会、安佐中央教会、2015年には飛禽道谷教会でも始まった。このように多くの島で老人学校を開いており、これらの老人学校には信仰に拘らず、島民であるならば誰でも通うことができるので、非信者からもいい評判を得ている。

第五に、キリスト教が世俗化や合理化に乗っている側面がある。それまで葬儀は村人が協力して行うものであったが、現在は高齢化や共同体精神の衰退に伴い、内陸部の木浦にある葬儀場への依存度が高くなった。木浦でもっとも近い押海島の中央聖潔教会の牧師の話によると、2006年頃から人が亡くなると木浦にある葬儀場へ送ることが増えたという。現在は信者の場合でも3分の1ぐらいは木浦の葬儀場を利用している。木浦には納骨堂があるため、火葬してそのまま納骨堂に納める場合もある。

火葬は2003年と2004年、そして2006年の調査では見当たらなかったが、2009年以降の調査では

見られるようになった。火葬の増加は押海島だけではなく、他の新安郡の島でも起きている現象である。新安郡の中央部にある安佐島でも数年前から火葬をするようになり、西部教会では2015年9月現在5人が火葬をし、4体は家の墓に、1体は納骨堂に納めているという。火葬の場合は家の墓の一角に小さな穴を開け壺だけを納めるため、埋葬が簡単で楽だと考えられている。新安郡のキリスト教信者の間で葬儀場の利用や火葬が増加している原因は、子女が島に住んでいないため頼れる人がなく、村人との関係も以前ほど親密ではないからである。新安郡のキリスト教にも合理化や世俗化の波が押し寄せてきていることが窺われる。

おわりに

新安郡はキリスト教信者の殉教によってキリスト教が広がっており、現在韓国でもっともキリスト教が普及している地域である。現在でも殉教精神を見習うために牧師や伝道師たちが新安郡を訪れている。とりわけ曾島には2013年に文俊卿伝道師殉教記念館が開館し、キリスト教信者たちの訪問が続いており、夏になると若者向けのキャンプも開かれる。新安郡のキリスト教は殉教の血を無駄にしまいということから唯一神信仰に敏感に反応してきており、島嶼という孤立した環境条件もあって世俗文化に触れる機会が少なく、都会に比べると純粋な信仰を保っているといえる。迷信打破を掲げているキリスト教の普及に伴い、巫俗儀礼や家の守護神信仰、村祭り、生業に関わる祭りなどは多く姿を消すことになった。

ただ、高齢化が深刻な問題である新安郡では信者の多くが年配者である。彼らは長年伝統文化の中で過ごしてきたため、伝統文化が意識下にまで染み込んでいる。そのため、新安郡の教会は伝統文化に柔軟に対応しており、伝統的儀礼をキリスト教式に変えた新たな儀礼が多く作り出されている。キリスト教式儀礼は伝統儀礼の方式を踏襲した形式が多いが、方式だけではなく、執り行っている信者の意識や観念の引きずりも窺われる。

今やキリスト教を抜きにして新安郡の文化を論じることはできないほど、新安郡にはキリスト教

が浸透している。近代化の波に乗ってキリスト教は在来文化に様々な働きかけをしてきたが、今後は高齢化や過疎化, 世俗化の問題を抱えている新安郡の社会にどう対応し, 生活の活性化を確立していけるかが課題であるといえよう。

注

- 1) 이만열 『한국 기독교 수용사 연구』, 두레시대, 1998, 333頁。
- 2) 吳鍾豊 『全羅南道の 基督教에 關한 文化地理的研究』, 高麗大學校教育大學院, 1987, 9頁。
- 3) 日本の主権侵害と武力支配によって形成された民族的矛盾を克服するために, 全民族が独立の力を發揮して起こした抗日独立闘争。
- 4) 吳鍾豊, 前掲書, 63頁。
- 5) 1910 Station Reports of the Southern Presbyterian Mission in Korea, pp.45-46.
- 6) 안영로 『전라도가 고향이지요—미국남장로교 선교사들의 눈물과 땀의 발자취』, 콤파출판사, 1998, 152頁。
- 7) 教会役職の名称。
- 8) 신안군지 편찬위원회 『新安郡誌』, 전라남도 신안군, 2000, 489-490頁。
- 9) 임병진·유승준 『천국의 섬』, 가나복스, 2007, 229頁。
- 10) 신안군지 편찬위원회, 前掲書, 485-486頁。
- 11) 韓国では巫女を「巫堂(무당)」と呼ぶが, 新安郡では「ダンゴル(당골)」と呼んでいる。ここで「ダンゴル(당골)」とは韓国語の「ダンゴル(단골)」から来た言葉であり, この言葉の意味は常連である。以前韓国では村ごとに巫女が住んで村の人々の生活に深く関わっていたので, このような名前がつけられている。
- 12) 「ソンヂュ(성주; 成主)」は屋敷内のすべてを支配するもっとも格の上の守護神。
- 13) 韓国における「鬼神(귀신)」は死者の霊, または人に福と禍をもたらす霊という意味を持っている。
- 14) 「トケビ(도깨비)」は本来財宝に関わる神格であったとされるが, それが時代がくだるにつれてトケビの概念も変化を重ね, 意地悪でいたずら好きな妖怪的属性の強い存在として観念されるようになった。
- 15) 龍は海を司る神聖な動物として観念されており, 龍を神格化したのが龍王神(용왕신)である。
- 16) 신안군지 편찬위원회, 前掲書, 457頁。
- 17) 이경엽 「기독교의 전파와 의례생활의 변화—신안군 중도를 중심으로」, 『島嶼文化』 제28집, 목포대학교도서문화연구소, 2006, 198-200頁。
- 18) 윤형숙 「기독교의 전파와 압해도 사회문화의 변화」, 『島嶼文化』 제18집, 木浦大學校 島嶼文化研究所, 2000, 220-221頁。

19) 森岡清美 『『外来宗教の土着化』をめぐる概念的整理』, 『史潮』66号, 大塚史学会, 1972, 53頁。

20) 森岡清美, 前掲論文, 53-54頁。

参考文献

- 김수진 『예수께서 오신 아름다운 섬—비금 기독교 100년사』 도서출판 진흥, 2008.
- 송현숙 「호남지방 기독교 선교기지 형성과 확장에 관한 연구」, 『한국 기독교와 역사』 제一九호, 한국 기독교 역사 연구소, 2003.
- 안대회 「一八九三—一九四五년全州西門外教會의 成長過程과 民族運動」, 『지방사와지방문화』 五권一호, 역사문화학회, 2002.
- 朱明俊 「미국 남장로교 선교부의 전라도 선교」, 『論文集』 21, 全州大學校, 1992.
- 차중순 「미국 남장로교회의 호남지방 선교활동」, 『기독교사상연구』 5, 고신대학교 기독교사상연구소, 1998.
- 호남교회사연구소 『湖南教會史研究』, 신흥기획, 1998.

A Contemporary Perspective on the Benefits of Teaching an Integrated Content/ESL course Specific to a Discipline

Jody A. FRIBERG

ジョディ フライバーグ. 内容 統合学習における利点についての一考察. *Studies in International Relations* Vol.36, No.2. February 2016. pp.39 – 46.

ESLやEFLの教室において、学術的な内容を教えるアイデアは新しい概念ではなく、実際には増えてきている (Braine, 2001) が、ESLやEFLのカリキュラムにおいては、未だに非常に重要なものである。しかしながら、英語の読み書き、会話、また理解をする際、こうしたテキストで扱われている内容の多くは、英語母語話者の様に話したいという学生の要求を満たしているとは思えない。また、多くの学生がESLやEFLのコースで学んでいる内容では実務の世界に対応しきれない現状がある。こうした背景から、本論文では、ESLやEFLとして英語を学ぶ学生が、卒業後に英語圏の学部や大学院のプログラムによりスムーズに進むことを可能にする教授内容、またその方法を提起する。

Introduction

Though the idea of teaching to academic content in the ESL or EFL classroom is not a new concept, and in fact in some places is on the rise (Braine, 2001), it remains an issue of great importance in English language programs that have yet to consider or implement academic content in their ESL or EFL curriculum. It can be argued that learning to read, write, speak and understand the English language via contexts derived from any number of highly pragmatic English language learning texts has its place in English language education. Especially for true or false beginners, those with little exposure to the language, or those students transitioning between levels intermediate to advanced. However, lessons derived from such texts used repeatedly throughout a student's language development fail to fulfill the needs of those students planning to matriculate into native English speaking undergraduate courses or postgraduate courses. Courses where language and concepts learned for the general articulation of English prove less than adequate where the reading, writing, speaking and listening skills necessary to communicate language specific to the discourse community are concerned. (Pally, 2001). This paper suggests that ESL or EFL students will be far more likely to grasp the terms and concepts of the ESL or EFL student's chosen undergraduate or postgraduate discourse community (as well as meet the rigors of undergraduate or graduate studies) if subjected to them prior to graduation from ESL or EFL. It presents content approaches used both presently and in the past and serves to support the idea that content education prior to graduation from ESL or EFL is a viable approach to helping students matriculate more smoothly into native English speaking undergraduate or postgraduate programs.

There has existed for decades now amongst teacher/researchers within the field of TESOL (Teaching English as a Second Language), a question of lingering concern that has effected not only the methods used to encourage L2 growth in the ESL student, but how these methods will likely transfer over into an ESL student's undergraduate, or mainstream courses, encouraging growth there as well (Harklau 1994). That is

the question of how to integrate content learning specific to an ESL student's undergraduate or graduate goals, without ignoring language-teaching aims (Brinton, Snow, & Wesche, 1992).

Prompting this question is a long history full of research that serves not only to justify the question, but through exploration and practice, develop methods that meet student's ESL, as well as content needs after ESL equitably. This paper aims to support the underlying assumption that ESL students will be far more likely to grasp the terms and concepts of a chosen discourse community, as well as meet the rigors of undergraduate or graduate studies, if subjected to a content curriculum prior to graduation from ESL.

History shows that for many students English, and the elements that embody it, reading, writing, speaking, and listening, exists only as a means to an end. The end being whatever the student intends to use English for once it has been determined they have achieved a specified level of fluency. Therefore, students tend to place less priority on the means, than on the objective the language is to be used for (Johns, 2002). Content then, as it is viewed as more of a need, becomes a priority for the student, and it is this need that teacher/researchers have sought to meet that brings us to the whole point of prioritizing content at all. Teaching to content cannot surpass the need for structure, proper syntax, spelling, etc., too however. There must be rules to ensure an equal balance of content and integrated skills instruction (Brinton et al., 1989). So, how is this accomplished? Though there is no single template that works best for content-based instruction (Stoller, 1999), teacher/researchers have experimented, and continue to experiment with 6.

Teacher/researchers in an attempt to find an approach capable of sustaining content learning across curricula, pedagogies, and borders, while promoting language learning also, started with 3 approaches that 1) would support language learning and content learning concurrently, as language and content, inextricably woven together, were shared between content and language instructors in an attempt to help students reach their full academic potential, 2) would serve to unequivocally address students' academic and professional needs by teaching expressly to their content needs, and 3) would seek to meet students' academic needs through total immersion in the target language. These approaches respectively were language-across-the-curriculum (LAC), language for specific purposes (LSP), and immersion education. These three approaches would eventually give way to theme-based, sheltered, and adjunct instruction, as teacher/researchers endeavored to find ways of teaching content and language to University ESL students. These will be touched on following a brief synopsis of LAC, LSP, and immersion education.

LAC was put into action by "a committee commissioned by the British government in 1975, to consider all aspects of teaching the use of English, including reading, writing, and speech" (Brinton et al., 1992, p. 5). In LAC, a need was recognized to integrate subject matter, or content, and language, in order that native English speaking students might benefit more abundantly in the educational process from the reciprocal relationship seen to be taking place between content courses and language classes. Students in a language across the curriculum environment are obliged to learn to read and learn to write, but are also encouraged to read to learn and write to learn. In learning across the curriculum the collegial bonds between content teacher and the language teacher must be strong in order that the student benefit fully from the writing and reading problems administered by the language instructor, and the supplementary work used by the content instructor to reinforce the work given by the language instructor (Brinton et al., 1992). Since first making its mark in 1975 with the help of the British government, the language across the curriculum movement has benefited both teacher training and materials development in the U.S. and the U.K. Evident in publications detailing "strategies for cross-curricular teaching at the secondary and post-secondary levels dealing with such issues as designing effective writing assignments and essay questions, improving the writing process, and evaluating

student work” (Anderson et al., 1983; Simmons, 1983, cited in Brinton et al., 1992, p. 6)

LSP evolved from a need, as seen by both commercial and academic language teaching programs, to address the English language demand of adult students either in an occupational, or post-secondary setting, needing English specific to their particular circumstances. Typically, LSP embraced the “what” of second language education, rather than the “how”, as learning the language elements synonymous with academic and professional reading, writing, speaking and listening were viewed as secondary to the more immediate language issues of the target discipline or occupation (Brinton et al., 1992). LSP exists to serve the specific needs of a group intent on acquiring the language necessary for their specific goals, and can therefore be viewed as a homogeneous content-based language approach. Those utilizing this approach understand that the study of content alone does not typically lead to competency at every level of language learning. It is understood however, that the use of authentic content, examples, and careful attention to the needs of the language learner parallel “methodology similar to that of other content-based models in which a major component is experiential language learning in context” (Brinton et al., 1992, p. 7; see also Lenker & Rhodes 2007).

Immersion education gained notoriety largely across Canada and the U.S., with the emergence first of the French immersion project in 1965 in St. Lambert, Quebec, and then in the U.S. in 1971, with the establishment of a Spanish Immersion Program in Culver City, California (Brinton et al., 1992; Lenker & Rhodes 2007). Immersion programs presently exist in one of two forms, those being either 1) total immersion, with all subjects in the lower grades being taught in the target language, or 2) partial immersion, in which only half of the instruction provided is in the target language (Lenker & Rhodes, 2007).

Immersion education has the distinct advantage, unlike LAC and LSP, through constant input and output of the target language, of developing in the student total fluency. Moreover, it has been shown to enhance student achievement in content classes, as well as “enhance a sense of global awareness, linguistic confidence, and learning strategies useful in many aspects of life” (Lenker & Rhodes 2007, p. 4)

The Center for Applied Linguistics 2006 directory, or simply CAL directory, showed that as of that year, more languages were being offered through immersion than ever before, 18 in fact, which was double the number offered in 1995. The most commonly taught languages in immersion programs as of 2006 were, “Spanish (42.6%), French (29%), Hawaiian (8.4%), Japanese (7.1%), Mandarin (3.9%), and German (3.2%).” The states boasting the highest numbers of schools offering language immersion programs were “Louisiana (30), Oregon (25), Minnesota (24), and Virginia (24).” Among these, “56% labeled themselves partial immersion, with the other 44% labeling themselves total immersion (Lenker, A. & Rhodes, N., 2007, p. 3).

Students in total immersion education receive instruction from language instructors entirely in the second language, with the language instructor using various strategies to get students to understand the use of the L2 (Lenker & Rhodes 2007). Typically after several years in an immersion program, “students achieve a high level of functional ability in the L2, with near native proficiency in receptive skills by the time they graduate from an elementary school immersion program or a late immersion high school program” (Brinton et al., 1992, p. 9). Though in immersion programs students’ reading and writing skills fall short of those of their native speaking peers early on during primary education, students who remain in immersion education are known to match the reading and writing skills of their peers as early as secondary school. Moreover, according to research conducted by Lenker and Rhodes (2007) and Brinton et al., (1992) students enrolled in or completing immersion programs far surpass the foreign language abilities of those students pursuing L2 interests post primary or secondary school.

Kindergarten and elementary school children have largely been the focus of immersion education; though

its applications can certainly be applied to adult education as well (Brinton et al., 1992; Lenker & Rhodes 2007).

Stoller (1999) explains that as language instruction continues to evolve and change in the face of changing student needs and education, various approaches are introduced, experimented with, and utilized, as teacher/researchers attempt to find methods of instruction that serve student's academic needs best. History, as exhibited in research conducted by Rubin (1975), Munby (1978), Johns, A. (1988), Brinton et al., (1992), and others shows this to be the case. LAC, LSP, and immersion education have each emerged after years of research and practice, to share a significant part in the evolution of language education, and each continues to play a part, however significant as the field continues to change, in content instruction and preparing student for life after ESL. Preparing students for life after ESL in that LAC, LSP, and immersion education pedagogy according to Evers (2007), create a bridge between what students are learning and experiencing in their language courses, and what they are or will be experiencing academically or professionally after the language course.

LAC, LSP, and immersion education all presuppose substantial language growth through an extended, more intense relationship with the language of the content community. Three other approaches I will discuss now that share a similar notion, yet differ from LAC, LSP, and immersion education in that they were developed for use by college level ESL students, are the Theme-based approach, Sheltered approach, and Adjunct approach. Research conducted by Brinton et al., (1992), Stoller (1999), Flowerdew & Peacock (2001) and Evers (2007), explains that these approaches are similar to LAC, LSP, and immersion education in that together with a strong language component, they attempt to expand content knowledge relevant to passion, purpose, and culture. Also similar, is the idea of bridging the language and content gap that all too often exists between language courses and the content they are intended for (Stoller 1999).

They are different from LAC, LSP, and immersion education however, in that they were created mainly to target tertiary level language students intent on taking academic courses in Community College, or a 4-year University. They are more contemporary, and furthermore, are generally adapted for use in college level ESL courses, otherwise known as English for Academic Purposes courses (Stoller 1999).

Content as it relates to a specific theme or topic is generally collected and read. Vocabulary and grammar are acquired, processed, and then regenerated through writing, speaking and listening, and further reading. Lending to further scaffold the theme or topic are authentic video or audio materials related to the content that provide a visual reference and listening tool, corroborating the theme or topic, vocabulary, or grammar under scrutiny, as well as eliciting further discussion. Student writing, presentations, tests and quizzes confirm synthesis of materials relevant to the theme or topic. This approach forms the basis for the Theme-based approach to language teaching. Among Theme-based, Sheltered, and Adjunct approaches, Theme-based is the most widely spread according to Brinton et al., (1992), and proves unlike other more traditional language teaching approaches in 3 ways. 1) More traditional approaches may limit language support to a single activity, such as reading or writing. 2) The variety of activities offered by the Theme-based approach are substantial enough to provide context, and support content, and 3) the theme or topic, as well as all of its components, including text types, formats, and activities, are typically engineered by the language instructor from some outside source, rather than taken from a course textbook. This has the advantage, given the unusual amount of exposure the student receives to the language in multiple forms, of developing in the student superior language processing skills as they analyze and compare information, separate fact from opinion, and learn to constructively criticize their work and the work of others (Brinton et al., 1992).

Another approach to the Theme-based model, is a topic based curriculum characterized by Brinton et al.,

(1992), Dantas and Larson (1996), Stoller (1999), Pally (1999), and others as a course in which the curriculum revolves around one topic or theme, called perhaps the core topic/theme, surrounded by other smaller topics which support the core topic/theme. It is designed to simulate a university course in that explicit instruction in language and academic skills are taught over a sustained period of time. An advantage to this approach is that through constant coverage of one topic over an extended period, “topic-related vocabulary and concepts are continuously recycled through various materials, and students become increasingly able to communicate their ideas on the topic(s) fluently” (Brinton et al., 1992; p. 15; See also Pally, 1999).

This topic based model also developed out of concern posited by Pally (2001) and Evers (2007), that L2 students may not be developing the critical and analytical skills needed to properly address in discourse or writing, profound issues raised in university level reading and discussion in the second language. Research conducted by the likes of Brinton et al., (1992), Stoller (1999), Pally (1999), Evers (2007), and others, has long asserted that learning language in a sustained way best mimicked the attributes of a real university course, and that L2 student would better be able to manage the complexities of critical and analytical thinking, reading, writing, and discussion in the language of their content courses if support for sustained content learning could be achieved and maintained.

Brinton et al., (1992), and Dantas-Whitney & Larson (1996) point out that the Sheltered-approach to language teaching is different from the Theme-based approach, or the topic/sustained-content model, in that rather than the course being built around a theme or topic, using outside sources somehow specific to the context of the theme or topic to help students develop L2 competence within specific topic areas, L2 students master content material with the help of a content area specialist that either teaches or visits the language class regularly. Segregated from the Native English speaking students, L2 students learn area content without the pressure of the native speaking element. This in effect, as reported by Krashen,

Places all second language learners in the same linguistic boat, thereby enabling them it is believed, to benefit from the adjustments and simplifications made by native speakers in communication with the second language learners, and from low-anxiety situations. Cited in Brinton et al., (1992, p. 16)

Sheltered language classes it is believed in a similar fashion to immersion education, give L2 students an edge in their eventual contents courses through ample exposure to the target language (Brinton et al., 1992; Evers 2007). Sheltered language classes, through providing ample exposure to the L2, may be somewhat simplified to accommodate less than proficient L2 readers, speakers, writers and listeners (Brinton et al., 1992). Those institutions wishing to implement a sheltered approach might find they are somewhat constrained by the lack of content area specialists to teach or lecture, should they be other than an institution without both language and content courses to offer, such as a language school or an adult learning center.

The Adjunct language approach is even farther distanced from the Theme-based and Sheltered approaches, in that the language course and the content course are taught collaboratively. That is, the language and content instructors work cooperatively to develop curriculum that can be shared across the two disciplines. Typically, students are sheltered in the language course, but share equally in all facets of the content course, in that the lectures they listen to, the homework assignments they are given, tests, quizzes, etc., complement those of their native speaking peers. The Adjunct model is probably the hardest to implement of the 3 currently under discussion, as a great deal of investigation, collaboration, and coordination must take place between the content instructor and language instructors. Dantas-Whitney & Demit (2002), and Brinton et al., (1992) champion the

belief that should content and language instructors agree to institute such a model, especially for academic credit, the institution harboring the two disciplines must be involved and supportive. Finally there are curriculum changes that both departments will have to consider if the two disciplines are to complement each other. This is key if students, faculty, and administrators, all equally significant participants in implementing the Adjunct model successfully, are to stand behind the idea.

The Adjunct approach maintained by Dantas-Whitney & Larson (1996) most closely imitates the content course in that unlike the Theme-based and Sheltered approaches, the students in this type of approach are actually enrolled in content courses alongside their language courses. Much as in the Sheltered approach, students conceivably through prolonged, ample exposure directly to the L2, will acquire overtly as well as implicitly the vocabulary, grammar, speaking and listening skills necessary for success in all their university courses. Furthermore, colloquialisms, as well as social, and cultural norms, all quite necessary for a smooth transition into the university community, will be acquired (Dantas-Whitney & Dimmitt 2002).

Despite the differences or similarities in content approaches used, they all share 3 distinguishing features, which are 1) “The common underlying assumption that successful language learning occurs when student are presented with target language material in a meaningful, contextualized form with the primary focus on acquiring information” (Brinton et al., 1992, p. 17). 2) Authentic tasks and materials which accurately mirror the demands placed on students in tertiary education are used to acculturate ESL students to the native speaking university or professional environment, and meet students’ needs (Bosher 1992). Authentic materials are called ‘authentic’ in that they are or were not originally designed for language courses. Instructors must use strategies as they adapt such material for the language course, that help their students understand and use the material to their benefit. 3) As teachers help students through reading, writing, and discourse to process content material, it is assumed student needs are being met to some degree through “increased redundancy and exemplification, use of advance organizers, frequent comprehension checks, and straightforward, frequent assignments and assessment procedures” (Brinton et al., 1992, p. 18).

As we have seen, content approaches appeal by design to either students’ professional or academic needs by heightening student awareness of the materials and methods used in content areas of interest or necessity. L2 students plausibly need information specific either for work or academia that will be most beneficial to success in their chosen area. That is not to say that integrated skills instruction does not share an equal, if not essential part in the metamorphosis of the language students’ communication ability at all levels of the target society. Rather that students, made clear by authors including Brinton et al., (1992), Fox (1994), Stoller (1999) Flowerdew & Peacock (2001), and others, need the language skills and the information to coexist in equal measure to be most effective in content areas after life as a language student.

Though there are other content approaches, historically, the 6 mentioned here have dominated ESL pedagogy since the 1970’s, as teacher/researchers persistently looked for ways to get language students more involved in content. To prepare students more suitably for academia in a new culture, using the L2, to focus on, interpret, and translate situations and context. They have impacted ESL programs throughout the world, including the United Kingdom, Australia, New Zealand, Canada, and the United States, as well as many non-native English speaking countries including post-colonial Hong Kong, Taiwan, and India (Flowerdew & Peacock 2001). Some more contemporary methods and the pedagogy that define them, like the theme, sheltered, and the adjunct approaches continue to guide and transform ESL instruction, influencing how we perceive and use content to help ESL students achieve their professional and academic objectives. Whichever pedagogy or methodology we perceive to be best for our English language students, we must not neglect the fact that many

of them will choose to move on after ESL to pursue other academic endeavors. Endeavors that are sure to prove as challenging academically as they are linguistically. Research has shown that one sure way to prepare them is by exposing them to content they will engage in as undergraduate or postgraduate students. Likely for which they will be unprepared to meet head on in a language environment that far outmatches what they experienced as ESL students. It is our responsibility to prepare them not only academically, but also linguistically for the rigors of university life after English language training.

Works Cited

- Bosher, S. (1992) *Developing a Writing Curriculum for Academically Underprepared College ESL Students*. (Monograph) Retrieved June 1, 2009, Eric database.
- Braine, G. (2001) "Twenty Years of Needs Analysis: Reflections on a Personal Journey. In Flowerdew, J. and Peacock, M. (Eds.) *Research Perspectives on English for Academic purposes*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brinton, D.M., Snow, M.A., & Wesche, M.B. (1989). *Content-based second language instruction*. Massachusetts: Heinle & Heinle.
- Brinton, D.M., Snow, M.A., & Wesche, M.B. (1992). *Content-based second language instruction*. Massachusetts: Heinle & Heinle.
- Dantas-Whitney, M., & Larson, A. (1996, August/September). Mini-sheltered courses; Authentic university preparation for intermediate students [Electronic version]. *TESOL matters, NA(NA)*, 9.
- Dantas-Whitney, M., & Dimmitt, N. (2002). *Intensive English Programs in Postsecondary Settings*. New York: Teachers of English to Speakers of Other Languages.
- Evers, A. (2007). Does discipline matter? Pedagogical approaches to critical thinking in English for Academic Purposes (EAP) and economics. *Masters abstracts, NA*, (1-34). Retrieved March 9, 2009, ERIC database.
- Flowerdew, J., & Peacock, M. (2001). *Research perspectives on English for Academic Purposes*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fox, H. (1994). *Listening to the world: Cultural issues in academic writing*. Illinois: National Council of Teachers of English.
- Harklau, L. (1994, Summer). ESL versus mainstream classes: Contrasting L2 learning environments. *Teachers of English to Speakers of Other Languages*. 28(2)(241-272). Retrieved April 21, 2009. [<http://www.jstor.org/stable/358-87433>].
- Johns, A. M. (1988). The discourse community's dilemma: Identifying transferable skills for the academic milieu [Electronic version]. *English for Specific Purposes*, 7(1), (55-60)
- Johns, A., (2002). *Genre in the classroom: Multiple perspectives*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates.
- Lenker, A., & Rhodes, N. (2007, February). Foreign language immersion programs: Features and trends over 35 years. *CAL digest*, (1-4). Retrieved May 21, 2009, [<http://www.cal.org>].
- Munby, J. (1978). *Communicative syllabus design*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pally, M. (1999, March). *Sustained content-based teaching for academic skills development in ESL/EFL* (Monograph).
- Pally, M. (2001). Skills Development in 'Sustained' Content-Based Curricula: Case Studies in Analytical/Critical Thinking and Academic Writing. *Language and Education* 15.4, 279-305.
- Rubin, J. (1975, March). What the "good language learner" can teach us [Electronic version]. *Teachers of English to Speakers of Other Languages*, 9(1), (41-51).
- Stoller, F. L. (1999, Spring). Time for change: A hybrid curriculum for EAP programs. *TESOL Journal*, 8(1), (9-13).

日本大学国際関係学部国際関係研究に関する内規

平成21年3月18日制定
平成21年4月1日施行
平成24年3月7日改正
平成24年4月1日施行

(趣 旨)

第1条 この内規は、日本大学国際関係学部国際関係研究所（以下研究所という）が発行する国際関係研究に関する必要事項を定める。

(発 行)

第2条 国際関係研究の発行者は、国際関係研究所長とする。

2 国際関係研究は、毎年2回10月及び2月に発行するものとする。ただし、国際関係研究所運営委員会（以下委員会という）が必要と認めたときは、この限りでない。

(編集委員会)

第3条 日本大学国際関係学部国際関係研究所規程第14条に基づき、研究所に編集委員会を置く。

2 編集委員会は、国際関係研究の編集・発行業務を行う。

3 編集委員会は、国際関係研究所運営委員会をもって構成する。

4 編集委員会委員長は、国際関係研究所運営委員会委員長とし、編集委員会副委員長は、国際関係研究所運営委員会副委員長とする。

(投稿資格)

第4条 国際関係研究に投稿することのできる者は、次のとおりとする。

① 国際関係学部及び短期大学部（三島校舎）の専任教員（客員教授を含む）

② 国際関係学部及び短期大学部（三島校舎）が受け入れた各種研究員及び研究協力者（名誉教授を含む）

③ 国際関係学部及び短期大学部（三島校舎）の非常勤講師

④ その他委員会が適当と認めた者

(原稿の種別)

第5条 国際関係研究に掲載する原稿は、国際関係及び学際研究に関する研究成果等とし、原稿の種別は、論文、研究ノート、資料、学会動向、その他編集委員会が認めたものとする。

(投稿数)

第6条 投稿は1号につき1人1編とする。ただし第4条第3号及び第4号の者は年1回限りとする。

(使用言語)

第7条 使用言語は次のとおりとする。

① 日本語

② 英語

③ 英語以外の外国語で編集委員会が認めたもの

(字数の制限)

第8条 原稿は字数16,000字以内（A4で10頁程度）とする。

2 前項の制限を超える原稿は、編集委員会が認めた場合に限り採択する。

(原稿の作成)

第9条 原稿の作成は、別に定める「国際関係研究執筆要項」による。

2 原稿はパソコンで作成したものとする。

(禁止事項)

第10条 原稿は未発表のものとし、他誌への二重投稿をしてはならない。

(原稿の提出)

第11条 投稿者は、印字原稿(図表、写真を含む)と当該原稿のデジタルデータ(原則として図表、写真を含む)を保存した電子媒体及び所定の「国際関係研究掲載論文提出票」を添付し、研究事務課に提出する。

(提出期限)

第12条 原稿の提出期限は、毎年6月30日及び10月31日とする。

2 前項の提出日が祝日又は日曜日に当たる場合は、その翌日に繰り下げる。

(審査)

第13条 投稿原稿は、別に定める審査要項に基づき編集委員会において審査するものとする。

2 論文の審査は、受理した原稿1本につき、編集委員会委員のうちから選任された審査員2名が審査する。ただし、投稿原稿の専門領域に応じて、学部内又は学部外から審査員を選任し、審査を委託することができる。

3 研究ノート、資料、学会動向、その他の審査は、編集委員会委員のうちから選任された審査員1名が、審査する。ただし、投稿原稿の専門領域に応じて、編集委員会委員以外の審査員1名を選出し、審査を委託することができる。

4 審査員は、自ら投稿した論文等について審査することができない。

5 審査員は、当該審査結果について、所定の「審査結果報告書」を作成し、編集委員会に報告する。

6 編集委員会は、前項の報告に基づき、投稿原稿掲載の可否について審議し、決定するものとする。

(校正)

第14条 掲載が決定した投稿原稿の執筆者校正は、二校までとし、内容、文章の訂正はできない。

(別刷の贈呈)

第15条 国際関係研究の別刷は、1原稿につき30部を投稿者に贈呈する。

2 前項の部数を超えて別刷を希望する場合の経費は、投稿者の負担とする。

(著作権)

第16条 国際関係研究に掲載された論文等の著作権は、各執筆者に帰属する。ただし、論文等を出版又は転載するときは、編集委員長に届け出るとともに、日本大学国際関係学部国際関係研究からの転載であることを付記しなければならない。

(電子化及び公開)

第17条 国際関係研究に掲載された論文等は原則として電子化(PDF化)し、本学部のホームページを通じてWEB上で公開する。

附 則

1 この内規は、平成24年4月1日から施行する。

2 従前の『国際関係研究』寄稿要項は廃止する。

国際関係研究執筆要項

平成21年3月18日制定
平成21年4月1日施行
平成24年3月7日改正
平成24年4月1日施行

- 1 原稿は完全原稿とし、締切日を厳守してください。また、翻訳原稿については、必ず原著者の許可を得てください。
- 2 原稿の種別は次のとおりとします。
 - ① (1) 論文 (2) 研究ノート (3) 資料 (4) 学会動向
 - ② (1)～(4)以外のもので編集委員会が認めたもの
- 3 本文は常用漢字、現代かなづかいとし、学術上で必要な場合においては、その分野で標準とされている漢字を用いてください。数字はアラビア数字を用い、外来語はカタカナ書きとしてください。
- 4 原稿は、字数16,000字以内(A4で10頁程度)とし、次の書式で作成してください。
 - ① 日本文 22字×42行×2段
 - ② 英文 50字×42行×1段
- 5 原稿はパソコンを使用し、A4の印字原稿(図表、写真を含む)及びデジタル原稿(図表、写真を含む)に別紙「国際関係研究論文提出票」を添付し、研究事務課に提出してください。
- 6 図、表、写真は、パソコンを使用して作成しデジタル原稿に含めて提出してください。
 - ① 図、表、写真は著者がオリジナルに作成したものを使用してください。
 - ② 図、表、写真は本文中の該当箇所に挿入・添付してください。
 - ③ 図、表、写真にはそれぞれ、図—1、表—1、写真—1などのように通し番号をつけ、タイトルをつけてください。
 - ④ タイトルは、表の場合は表の上に、図・写真の場合は下につけてください。
 - ⑤ 図、表、写真は原則として1色とします。カラーページが必要であれば使用できるものとしますが、費用は著者の実費負担とします。
- 7 英語の表題とアブストラクト(約200語)を添付してください。本文が英文の場合は、日本語アブストラクト(約400字)を添付してください。
- 8 引用文献は、本文中に番号を当該箇所の右肩につけ、本文の終りの引用文献の項に番号順に、以下の形式に従って記述してください。ただし、特別の専門分野によっては、その専門誌の記述方法に従ってください。
 - ① 原著論文を雑誌から引用する場合
番号、著者名、論文表題、掲載雑誌名、巻数、号数(号数は括弧に入れる)、頁数(始頁、終頁)、発行年(西暦)の順に記述してください。
 - ② 単行本から引用する場合
番号、著者または編者名、書名、版次、章名、引用頁、発行所、その他所在地、発行年(西暦)の順に記述してください。
 - ③ 文章を他の文献から引用する場合
原典とそれを引用した文献および引用頁を明らかにして〔 〕に入れて〔・・・より引用〕と明記してください。
- 9 参考文献は文末にまとめてください。表記については、8の引用文献の表記を参照してください。

具体的な引用方法については、それぞれの国や学問分野によって違いもありますが、以下の例示をひとつの基準として参考にしてください。

(1) 日本語文献引用の例示

四宮和夫『民法総則』（昭和61年）125頁

末弘厳太郎「物権的請求権の理論の再検討」法律時報〔または法時〕11巻5号（昭和14年1頁）

すでに引用した文献を再び引用する場合には、

四宮・前掲書123頁または四宮・前掲『総則』123頁

末弘・前掲論文15頁または末弘・前掲「再検討」15頁

(2) 英語等文献引用の例示

Charles Alan Wright, *Law of Federal Courts*, 306 (2d ed. 1970)

Dieter Medicus, *Bürgerliches Recht*, 15. Aufl., 1991

Georges Vedel, *Droit administratif*, 5e ed., 1969

Harlan Morse Brake, “Conglomerate Mergers and the Antitrust Laws”, *73 Columbia Law Review*〔または *Colum. L. Rev.*〕555 (1973)

Alexander Hollerbach, “Zu Leben und Werk Heinrich Triepels”, *Archiv des öffentlichen Rechts*〔または *AoR*〕91 (1966), S. 537 ff.

Michel Villey, “Préface historique à l’étude des notions de contrat”, *Archives de Philosophie du Droit*〔または *APD*〕13 (1968), p.10.

すでに引用した文献を再び引用する場合には、

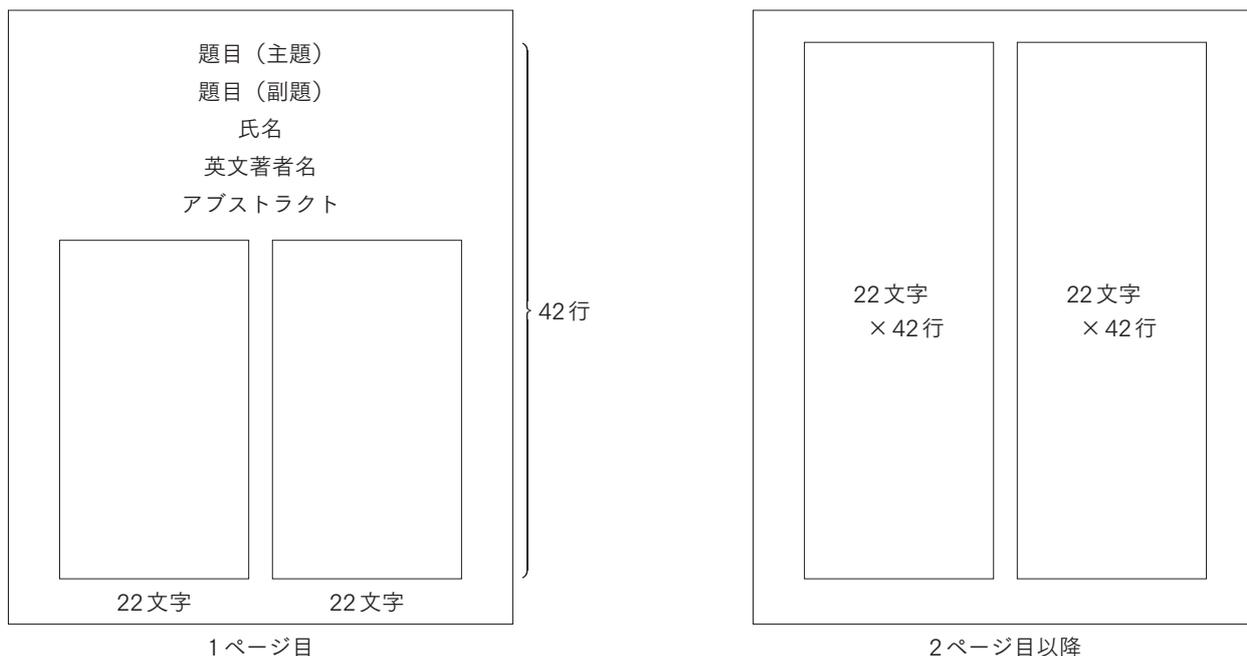
Wright, *op. cit.*, pp.226-228.

Medicus, a. a. O., a. 150.

Vedel, *op. cit.*, p.202.

ただし、直前の注に掲げた文献の同一箇所を引用するときは、*Ibid.* 他の頁を引用するときは、*Ibid.*, p.36

日本文 刷り上り後のイメージ



以 上

STUDIES IN
INTERNATIONAL RELATIONS
VoL.36 No.2 February 2016
CONTENTS

ARTICLES

- Study of the new poverty improvement technique of the low income farmer
by the community formation Chizu FUKUI ... 1
- A study on *The prayer of Kraudia* Takako YASUMOTO ... 13
- The right of being different from others, Refugees, Hetrotopia, and Cultural value friction:
In the case of Sweden Toshiyasu ISHIWATARI ... 23
- Christianity and the Islanders' Lives in Shinan County Miyeon KIM ... 31
- A Contemporary Perspective on the Benefits of Teaching an
Integrated Content/ESL course Specific to a Discipline Jody A. FRIBERG ... 39

『国際関係研究』総目次

創刊号(第1巻第1号) 1980年10月1日

創刊のことば

—あわせて国際関係学部設立の
経過を彙報することについて—

……………高梨 公之

論 文

アフガニスタン問題の重大性

(特別寄稿)……………寺沢 一

ソ連の戦後アジア政策と国際関係

……………松本 博一

「北欧審議会」(Norðurlandaráð)の

国際法人格性について……………石渡 利康

1913年の連邦準備法について……………関 正一

アメリカのNational Market System I

……………三浦 寛也

メキシコの現地的経営組織文化の構造分析

—日本型組織理論のメキシコ

経営文化への移転性—

……………大泉 光一

インドネシアの農村社会構成に関する一考察

—ジャワとスマトラ

移住村開発を対比して—

……………奥 源造

试论中国广播语言

—从新闻传播法谈起—

(放送中国語試論)

……………山本 賢二

“The Killing of a Parent” in Seneca and

further discussions of the three Greek

tragedians and Shakespeare

…………… Saburo SATO

M. I. CHAPLAN

日本ファシズムとロマン主義

—ドイツ・ロマン主義との

比較における「日本浪漫派」

試論—

……………松本 鶴雄

The Study of Japanese and American

Comparative Literature

…………… Yukinori IWAKI

書 評

A. J. Ryder, *Twentieth-Century**Germany: From Bismarck to Brandt.*

……………高橋 通敏

Stephan A. Schuker, *The End of**French Predominance in Europe: The Financial Crisis**of 1924 and the Adoption of the Daves Plan*

……………濱口 學

M・ヤコブソン著

『フィンランドの外交政策』……………塚本 哲也

荒居英次編『日本史の問題』……………所 理喜夫

『日本思想大系』……………藏並 省自

岩城之徳氏ほか編

『石川啄木全集』全八巻完結に寄せて

……………松井 利彦

秋山正幸著

『ヘンリー・ジェイムズ作品研究』

……………亀井 俊介

第2号(第2巻第1号) 1981年11月1日

論 文

国際関係論へのアプローチ……………高橋 通敏

賃金構造の国際比較について

—特に日本と欧米との間の

職業間賃金格差を中心として—

……………石原 孝一

アメリカのNational Market System II

—証券市場の機関化現象と

四つの文書—

……………三浦 寛也

日台貿易共存の可能性……………林 俊男

国際関係の国内税制への影響

—ガット第16条と輸出所得

控除制度の廃止問題—

……………吉牟田 勲

E C構成国におけるloyalty抵触問題

……………石渡 利康

メキシコ人従業員のモチベーション

管理の研究

—Maslowの「欲求階層理論」を

適用したロヘリオ・ディアス・

ゲレロの「メキシコ人従業員の

モチベーション誘因仮説」の

考察を中心として—

……………大泉 光一

朝鮮の親等計算方法……………李 丙洙

中国共产党对台湾的宣传广播

—中国人民解放军福建前线

广播电台《新闻与时事》

节目之分析—

……………山本 賢二

The Vicious Circle in Euripides'

Revenge Plays: Mainly on *Orestes*

…………… Saburo SATO

M. I. CHAPLAN

書 評

秋山正幸著『ヘンリー・ジェイムズ

作品研究』について

…………… A. Owen ALDERIDGE

馬場伸也著『アイデンティティの

国際政治学』……………青木 一能

W. M. Scammel, *The International**Economy since 1945~1980*

……………石原 孝一

大泉光一著『ラテン・アメリカの

資源と経済』……………梅津 和郎

S. Ginea & M. S. Archer (eds.), *Contemporary Europe: Social Structures and Cultural Patterns* 八幡 康貞

M. K. Dziwanowski, *Poland in the 20th Century* 松本 博一

第3号(第3巻第1号) 1982年6月30日

論 文

日本における能の研究の近況 西 一祥

The Modern Family in Ionesco's *Jacques*, Albee's *The American Dream*, and Betsuyaku's *Idō* John T. DORSEY

北朝鮮の言語政策
——漢字語彙の整理を中心に——
..... 李 丙洙
朴 鎔暉

技術移転と人的資源 石原 孝一

モーラの石とエーリックスガータ(全国巡回)
——スウェーデン「地方」時代における
国王選出過程——
..... 石渡 利康

研究ノート
国際関係研究の共通課題 中村 昌介

書 評
湯浅泰雄著『和辻哲郎—
近代日本哲学の運命』
..... 小坂 国継

石原孝一著『アメリカ労働市場論』
..... 関谷 耕一

ILOと最低賃金制(Minimum Wage
Fixing: An international review of
practices and problems)
..... 石原 孝一

核拡散は危険ではない
(The Spread of Nuclear Weapons:
More May Be Better)
..... 高橋 通敏

第4号(第3巻第2号) 1982年11月30日

論 文
経済の国際的相互依存性と貿易
偏向について 柴田 裕

発展途上国におけるインフォーマル・
セクターの役割 石原 孝一

韓国の새마을運動と農村社会 李 丙洙

アメリカの1975年証券諸法改正法について
..... 三浦 寛也

国際経営環境の評価とリスク対応策
——Haner, F. T.の経営環境の評価・
予測の論理的展開およびラテン・
アメリカ諸国の経営環境評価の
考察——
..... 大泉 光一

ヨーロッパ統合の思想的源流
——サン・シモンに関する一考察——

..... 藤原 孝
Meth lough skal land bvgiaes
——ユーラン法(Jyske Lov)にみる
法治主義——
..... 石渡 利康

生活科学の原論的研究
——生活様式と行動様式——
..... 山本 俣一

ヘンリー・ジェイムズの
『国際エピソード』論
——異文化の衝撃——
..... 秋山 正幸

超自然現象を通じての父と子
——『ハムレット』と島崎藤村
『破戒』を中心に——
..... 佐藤三武朗

The Use of the Grotesque in
Betsuyaku's Zō J. T. DORSEY

書 評
Y. H. Kim編『韓国の経済発展と
地域住民運動』 石原 孝一

丸谷オ一著『裏声で歌へ君が代』
..... 松本 鶴雄

James J. Y. Liu,
Chinese Theory of Literature
..... 林 俊男

国際関係学部の出自(II) 権田 隆富

第5号(第4巻第1号) 1983年6月30日

論 文
IMFの為替相場政策監視と
国際経済の相互依存 柴田 裕

統一労働者党と「連帯」
——1980~83年ポーランド危機の一考察——
..... 松本 博一

「北欧非核地帯」構想
——その歴史的展開と法的構造——
..... 石渡 利康

ラテンアメリカNICsの工業製品輸出戦略
——産油国NICsベネズエラの経済
構造の特徴と輸出代替的工業化
政策——
..... 大泉 光一

CHUSHINGURA: The Vendetta
by the Royal Ronin(一)
..... 佐藤三武朗

Burk's *Female Patriotism*:
Jeanne D'Arc and the American Republic
..... J. T. DORSEY

学会動向
民族集団の持続性と変貌
——民族関係論の最近の文献について——
..... 八幡 康貞

書 評
世界の中の能：法政大学能楽研究所編
..... 西 一祥

第6号(第4巻第2号) 1983年11月30日

論 文

- 為替相場不安定の原因とコスト
.....柴田 裕
- 国際労働市場の形成と多国籍企業の役割
.....石原 孝一
- アメリカのNational Market System III
——NMS開発の推移——
.....三浦 寛也
- 石川啄木とロシア
——女性革命家ソフィア・ペロフスカヤをめぐる——
.....岩城 之徳
- ジェイムズと南北と円朝(Ⅱ)
——東西の亡霊物語の比較考察——
.....秋山 正幸
- 中米紛争と米国の政策.....坂本 博
- 海外融資にかかわるカントリー・リスク評価の研究方法论.....大泉 光一
- 『破戒』と『ハムレット』における父子関係
——父の戒と逆説を中心に——
.....佐藤三武朗
- 中華人民共和国中央人民放送局の
日中両国首相相互訪問に関する
報道内容分析.....山本 賢二
- 日本大学学術研究助成

〈総合研究〉中間報告

- '80年代転換期、北欧福祉諸国家の動向
——日本への示唆と日本の対応——
- 小 序(研究代表者).....高橋 通敏
1. 日本・北欧交流の史的推移.....藏並 省自
2. 統合と北欧諸国
——政治的統合を中心として——
.....高橋 通敏
3. 北欧諸国の経済とその教訓.....福田 雅一
4. 福祉国家比較の前提
——それぞれの国の近代化の性格——
.....高須 裕三
5. 北欧諸国の財政政策の諸問題とその動向
.....田中 啓一
6. スウェーデンにおける小売業の
構造変化とバイインググループ、
イーカ.....内藤 英憲
7. スウェーデンにおける法文化
デモクラシー
——その発現としての新姓名法——
.....石渡 利康

第7号(第4巻第3号) 1984年3月25日

論 文

- 労働基準の国際化について
——法定最低賃金の決定基準をめぐる——
.....石原 孝一
- IMFの融資条件(1).....柴田 裕
- 「200カイリ」と日本の漁業
——米国およびソ連の対日
漁獲割当を中心にして——

.....青木 久尚
ノルウェー法における「国家秘密」の概念
——Gleditsche-Wikles事件を
めぐって——

.....石渡 利康
ピルグリム・ファーザースと島崎藤村
.....佐藤三武朗

「真理の基準」キャンペーンの解析
“真理標準”運動分析.....山本 賢二

研究動向

アメリカにおける最低賃金制の
経済効果の研究動向.....石原 孝一

A Comparative Study of New Defini-
tions of Masculinity in the U.S.A.
and Japan: Ages 19 to 20 —— Summary
of the Papers Presented
in Unanimous Co-operation at
The 6th World Congress of Sexology
in Washington, D.C., U.S.A., May 22-27, 1983 ——
.....Shere D. HITE
Toshiyasu ISHIWATARI

書 評

本渡諒一・南啓栄著
『韓国商標法の解説』.....李 丙洙

第8号(第5巻第1号) 1984年7月10日

献呈のことば
——高橋通敏博士古稀記念号
発刊に際して——
.....高梨 公之

論 文

平和への模索
——大国の集団行動の提唱——
.....高橋 通敏

米中関係と台湾問題.....松本 博一

IMF「監視」の新しい解釈.....柴田 裕

労働基準の国際化とILO条約.....石原 孝一

1900年—1945年間に於ける日独政治経済関係
.....E・パウアー

北欧国際関係におけるオーランド島
——オーランド島の自治と独立化——
.....石渡 利康

日中対訳石川啄木秀歌鑑賞.....岩城 之徳
林 丕雄

明治文化史とシェイクスピア.....佐藤三武朗

The Theme of Survival in John Her-
sey's *Hiroshima* and Ibuse Masuji's
Black Rain.....J. T. DORSEY

精神汚染除去キャンペーンの解析
.....山本 賢二

書 評

Prof. Dr. Chin Kim, *Selected
Writing on Asian Law*
.....李 丙洙

新華出版社『毛沢東新聞工作文選』
.....山本 賢二

高橋通敏博士略歴及び主たる業績

第9号(第5巻第2号) 1984年12月20日

論文

国際技術協力の現状と課題

—ILOのTechnical Cooperationを
中心として—

石原 孝一

アメリカNASDAQ市場の最近の動向

三浦 寛也

Knowledge and Action in Environ-
mental Politics: Effects of Knowle-
dgeability Upon Public Policy At-
titudes in Post-Industrial Japan and
the U.S.

Nicholas P. LOVRICH, Jr.

Takematsu ABE

John C. PIERCE

Taketsugu TSURUTANI

北欧協力の史的背景.....石渡 利康

日中対訳石川啄木秀歌鑑賞(二).....岩城 之徳

林 丕雄

明治期精神史における

シェイクスピア(その一)

—ポロニアス受容を通して—

佐藤三武朗

“Human Rights and the Theatre of the Absurd:

Beckett's *Waiting for Godot* and Ionesco's *Rhi-
noceros*”

J. T. DORSEY

書評

Angelos Th. Angeloulos,

*Global Plan for Employment:**A New Marshall Plan.*

石原 孝一

大泉光一, 今井圭子, 小池祥一著

『ラテンアメリカ中進国の資源と工業化』

堀坂浩太郎

中国社会科学出版社『中国新聞年鑑』

山本 賢二

第10号(第5巻第3号) 1985年3月25日

論文

多国籍企業研究における学際性と専門性

石原 孝一

IMF改正協定における融資条件

柴田 裕

食糧資源と飢餓の構造

—アフリカの食糧危機を

中心にして—

青木 久尚

北欧協力の機能的法構造

—北欧審議会と北欧閣僚審議会—

石渡 利康

胡耀邦書記訪日報道の分析.....山本 賢二

日中対訳石川啄木秀歌鑑賞(三).....岩城 之徳

林 丕雄

『新体詩抄』と「第三の独自」受容

—明治精神史における

シェイクスピア(その二)—

.....佐藤三武朗

Small Graft Warnings:

The World and How to View It

(From a Bar in Southern California)

..... J. T. DORSEY

書評

安藤勝美他著『世界の議会10アフリカ』

.....青木 一能

復旦大学出版社『中国文化研究集刊』

.....山本 賢二

第6巻第1号 1985年7月

論文

国際移民労働の類型と移動パターンについて

.....石原 孝一

IMFの融資条件のガイドライン

.....柴田 裕

共同社会と市民社会

—国際関係論の構築—

.....森本 義輝

北欧協力の諸相

—1. 北欧文化協力—

.....石渡 利康

中曽根首相訪中報道の分析

—中曽根首相訪華新聞分析—

.....山本 賢二

「オフェリアの歌」の

浪漫主義的受容と変容

—新声社同人から

『文学界』同人へ—.....佐藤三武朗

朝鮮における近代法思想の顕現(上)

—「刑法大全」の頒示を中心に—

.....李 丙洙

第6巻第2号 1985年11月

論文

第三世界における貧困と所得構造

.....石原 孝一

わが国外国為替制度の問題点と改善の方向

.....大塚順次郎

金融・資本市場の自由化

—現状と問題点—

.....三浦 寛也

シェイクスピア受容とゲーテ座

.....西 一祥

ヘンリー・ジェイムズの

『黄金の盃』における

マギーの苦悩と成長.....秋山 正幸

中村敬宇と英国近代精神

—英国留学と『西国立志編』

訳出との関係において—

.....佐藤三武朗

Literature Related to the Atomic Bomb

From Hiroshima to the End of the World

..... John T. DORSEY

北欧国際関係における

フェルヤル島(Føroyar).....石渡 利康

アメリカ連邦政府の財政援助と産業規制
阿部 竹松

朝鮮における近代法思想の顕現(下)
 ——「刑法大全」の頒示を中心に——
李 丙洙

書 評

岩城之徳著『石川啄木伝』
 (1985年筑摩書房)
 ——比較文化論的書評——
千栄子・ムルハーン

Gerhard Brirkmann. Oekonomik der Arbeit, Band I, Grundlagen. Klett-Cotta, Stuttgart 1981, S. 344
石原 孝一

国際関係学部学術研究業績一覧

第6巻第3号 1986年3月

論 文

IMF融資政策の動揺：1981-82
柴田 裕

朝鮮の姓
 ——由来と韓国・北朝鮮の
 現行制度を中心に——
李 丙洙

世界史の現代的考察 森本 義輝
 サーマの土地(Samiid ædnan)における権利
石渡 利康

島崎藤村と沙翁「悲曲 琵琶法師」の
 構造分析 佐藤三武朗

Saint Joan's Story: Visions and
 Revisions J. T. DORSEY

研究ノート

北欧における内政自治法 石渡 利康

第7巻第1号 1986年7月

論 文

第三世界における貧困と人口・雇用
石原 孝一

朝鮮民事令の二元性(上) 李 丙洙
 アイスランドにおける基本法上の緊急権
石渡 利康

島崎藤村と沙翁(その二)
 ——ドラマへの挑戦：
 『悲曲 茶のけぶり』の「自序」
 及び五小作品を手がかりに——
佐藤三武朗

米国における海外適応訓練の歴史と
 タイポロジーについて 西田 司

Enzensberger's *Das Verhör von
 Habana*: Lessons from the
 Bay of Pigs J. T. DORSEY

研究ノート

アイスランド議会資料 石渡 利康

第7巻第2号 1986年11月

論 文

現代に生きる「戦争と平和の法」
 (グロティウス)
 ——国際関係思想と歴史的現実——
松本 博一

レバノン紛争の国際政治環境
 ——オスマン時代から1958年内戦まで——
山下 高明

アメリカ連邦政府の雇用安定政策と
 企業の新しい動向 阿部 竹松
 北欧諸国における安全保障政策決定
 要素としての「ノーディク・バランス」

概念 石渡 利康
 日本の漁業をめぐる国際環境 青木 久尚
 第三世界における経済開発と所得配分
石原 孝一

アメリカにおける銀行・証券業務の分離
三浦 寛也

日本的経営のブラジル移転
 ——NECブラジルのケースに見る——
大泉 光一

朝鮮民事令の二元性(下) 李 丙洙
 ペルー社会問題に関する一考察
 ——共同体とインディヘニスモ——

.....坂本 博
 日印尼対訳石川啄木秀歌鑑賞 岩城 之徳
 舟田 京子

島崎藤村と沙翁(その三) 佐藤三武朗
 「悲曲 茶のけぶり」の主題と構造
 Sam Shepard's *Old Man in Fool for Love*
 J. T. DORSEY

比較法による日本の家族の
 社会化と凝集性 寺田 篤弘
 不確実性減少理論に関する個人的
 及び文化的影響 西田 司

W. B. GUDYKUNST

研究ノート

開発経済学の可能性 森本 義輝

第7巻第3号 1987年3月

論 文

現代シリアの宗教構造と政治権力
山下 高明
 発展途上国における福祉政策と最低賃金制
石原 孝一

現行韓国民法に刻まれた律令の残滓
 ——「異性不養制」を中心に——
李 丙洙

サーメの内政自治権 石渡 利康
 「参考消息」の歴史について
 関於“参考消息”の歴史 山本 賢二

日印尼対訳石川啄木秀歌鑑賞(二) 岩城 之徳
 舟田 京子

島崎藤村と沙翁(その五)
 ——「朱門のうれひ」の主題と構想——
佐藤三武朗

The Mother-Figures in *Long Day's Journey into Night* J. T. DORSEY
 コミュニケーションの概念とモデル
 西田 司

研究ノート

外国立法資料・ノルウェーの選挙法
 石渡 利康

書評

高島善哉『時代に挑む社会科学
 ——なぜ市民制社会か』 森本 義輝

第8巻第1号 1987年7月

論文

現代トルコの世俗主義とイスラーム
 山下 高明

続現行韓国民法に刻まれた律令の残滓
 ——「同姓不婚制」を中心に——
 李 丙洙

ノルウェーのサーメ議会創設法案
 石渡 利康

日印尼対訳石川啄木秀歌鑑賞(三)
 ——歌集「悲しき玩具」を中心に——
 岩城 之徳
 舟田 京子

藤村における自我の追求
 ——「破戒」における懺悔と
 告白を中心に——
 佐藤三武朗

Man and Machine in *Die Weber, Die Maschinesstürmer* and
 the *Gas Trilogy* J. T. DORSEY

Assessing Sanskrit Literature
 Part 1: The Sanskrit Language
 D. J. BISGAARD

異文化教育のための
 ビデオ教材の研究及び開発 西田 司

明治初期のイギリス文化撰取二例
 ——馬場辰猪と小野梓(その一)——
 高橋 公雄

研究ノート

ウップサラ法哲学派、過去と現在
 石渡 利康

海外立法資料

デンマークの議会選挙法 石渡 利康

第8巻第2号 1987年11月

論文

ハロルド・ラスキの国家論と国際関係思想
 松本 博一

ヌメイリー治下スーダンのイスラームと政治
 山下 高明

日米経済摩擦の構造的要因
 ——アメリカのハイテク産業と
 国際競争力——
 石原 孝一

金融先物取引の現状 三浦 寛也

李氏朝鮮王朝の法典編纂事業(上)

..... 李 丙洙

シングヴェドリル(Pingvellir) 石渡 利康

法の動態における3位相と国家平等
 渡部 茂巳

米国人と日本人のダイアドにおける
 不確実性の減少 西田 司

W. E. グディカンスト
 E. チュア
 日韓対訳石川啄木秀歌鑑賞(一) 岩城 之徳
 黄 聖圭

ヘンリー・ジェイムズの
 「アメリカ人」について
 ——アメリカのアダムのイメージ——
 秋山 正幸

島崎藤村：告白と自白の位相
 ——丑松と近代精神——
 佐藤三武朗

Hiroshima in World Literature:
 Foreground./ Background.
 Past/ Present/ Future
 J. T. DORSEY

Assessing Sanskrit Literature: Part II,
 The Sanskrit Lexicon D. J. BISGAARD

日本大学三島図書館における
 ラフカディオ・ハーン文献解題(Ⅰ)
 萩原 順子

研究ノート

Production Bases for Exports of the
 USA and Multinational Enterprises in
 the Pan-pacific Age
 大泉 光一

第8巻第3号 1988年3月

論文

李氏朝鮮王朝の法典編纂事業(下)
 李 丙洙

パキスタンの政治変動とイスラーム
 山下 高明

日本の漁業をめぐる国際環境(Ⅱ)
 青木 久尚

ガムリ・サウトマウリ(Gamli Sattmáil)
 ——アイスランド自由国の終焉——
 石渡 利康

「連合国経済会議」と日本政府
 佐々木久信

戦時のヒステリー
 ——日系人排撃を加熱されたアメリカ・
 マスコミの役割と責任——
 佐藤三武朗

中国共産党の言論規律 山本 賢二

日本人大学生のコミュニケーション不安
 西田 司

日韓対訳石川啄木秀歌鑑賞(二)
 岩城 之徳
 黄 聖圭

明治初期のイギリス文化撰取二例

——馬場辰猪と小野梓(その二)——
高橋 公雄

Assessing Sanskrit Literature Part III:
 A Brief Outline of the Literature
D. J. BISGAARD

The Vietnam War in American Drama:
 Berrigan's *The Trial of the
 Catonsville Nine* John T. DORSEY

研究資料

日本大学三島図書館における
 ラフカディオ・ハーン文献解題(II)
萩原 順子

国際化時代における望ましき韓国交流の道
黄 聖圭

第9巻第1号 1988年7月

論 文

18世紀ヨーロッパの国際平和思想
 ——サン・ピエールとルソーを
 中心として——
松本 博一

リビアの政治とパーソナリティ要素
山下 高明

アイスランドにおけるノルウェー・
 デンマーク法の受容石渡 利康

日韓対訳 石川啄木秀歌鑑賞(三)
岩城 之徳
 黄 聖圭

島崎藤村
 ——「旧主人」における視点の錯綜
 「家」との関係で——
佐藤三武朗

日本人と米国人の相互ステレオタイプ
西田 司

War Crimes Trials in American Drama:
 Saul Levitts *The Andersonville Trial*
 John T. DORSEY

ハンス・ヴェルフガング・ブラウン評伝
 Andreas H. BAUMANN

研究資料

日本大学三島図書館における
 ラフカディオ・ハーン文献解題(III)
萩原 順子

第9巻第2号 1988年12月

論 文

スウェーデン中立政策の分析
石渡 利康

食糧資源戦略
 ——食糧戦略の概念と発動——
青木 久尚

アメリカのインサイダー取引(1)
三浦 寛也

TRANSFERABILIDAD DEL
 SISTEMA ADMINISTRATIVO
 JAPONES A MEXICO
 ——日本型経営システムの

メキシコへの移転——
大泉 光一

日本人のコミュニケーション
 不安と使用言語西田 司

中国の「新聞法」論議考山本 賢二

国際機構意思決定手続きとしての
 全会一致と多数決
 ——コンセンサス位置付けのための
 予備的考察——
渡部 茂己

ヘンリー・ジェイムスの
 『ある婦人の肖像』における自由と金
秋山 正幸

ボードレールの宗教
 ——象徴主義と宗教的なるもの——
中澤 俊郎

島崎藤村のパッションと
 シェイクスピアのPASSION
 ——『新生』を中心に——
佐藤三武朗

Without a Trace: *Ashita*
 John. T. DORSEY
 松岡 直美

小泉八雲と服部一三
 ——万国工業兼綿百年期
 博覧会での邂逅——
萩原 順子

第9巻第3号 平成元年3月

論 文

北欧の安全保障政策石渡 利康

Toward Stronger Two-Party
 Competition in U. S. Presidential
 Elections: Proposals Based on 1988
 Results 武田 節男
 John R. Rink

TEORIA DE LA ORGANIZACION
 ——COMPARACION DEL
 SISTEMA JAPONES Y
 MEXICANO——
 (組織論一日墨比較)大泉 光一

アメリカのインサイダー取引(2)
 ——歴史的背景(続)——
三浦 寛也

E C域内市場統合の完成とその影響(一)
小林 通

国際会計の課題(1)北川 道男

日本人と米国人の対人関係における
 テーマと親密度
西田 司
 S. SUDWEEKS
 W. B. GUDYKUNST
 S. TING-TOOMEY
 吉沢 豊子

Image and Vision in Shepard's
 Family Trilogy John. T. DORSEY

島崎藤村:『葦草履』における自我の拡充
 ——恋愛との袂別——

| | |
|---------------------|-------|
| | 佐藤三武朗 |
| 研究資料 | |
| 中華人民共和国国家秘密保護法..... | 山本 賢二 |

第10巻第1号 平成元年10月

| | |
|--------------------|-------|
| 〈国際関係編〉 | |
| 論 文 | |
| ベンサムの国際政治思想とその時代 | |
| | 松本 博一 |
| 多様化する多国籍企業の為替資金対策 | |
| | 大塚順次郎 |
| フェルヤル島内政自治の一環としての | |
| フェルヤル大学..... | 石渡 利康 |
| 天皇逝去報道内容分析 | |
| ——中国語放送について—— | |
| | 山本 賢二 |
| 異性・異文化の対人関係に現れる話題 | |
| | 西田 司 |
| ホップズの租税論の特質..... | 吉田 克己 |
| 研究資料 | |
| ラオウル・ヴァレンベルイ失踪の謎 | |
| | 石渡 利康 |
| 研究ノート | |
| 海外民間政策研究機関(シンクタンク) | |
| における研究動向分析..... | 渡部 茂己 |

第10巻第1号 平成元年10月

| | |
|---|-----------------|
| 〈国際文化編〉 | |
| 論 文 | |
| シェイクスピアと島崎藤村 | |
| ——「与作の馬」と『ヴィーナスと | |
| アドニス』との関連で—— | |
| | 佐藤三武朗 |
| 小泉八雲と西田千太郎 | |
| ——「神々の国」との邂逅—— | |
| | 萩原 順子 |
| Narrative Strategies in <i>Black Rain</i> | |
| as a Film and Novel | |
| | John. T. DORSEY |
| Assessing Sanskrit Literature | |
| Part IV: Criticism | D. J. BISGAARD |
| 帰国子女の教育問題に対する提言 | |
| | 大塚順次郎 |

第10巻第2号 平成2年1月

| | |
|---------------------|-------|
| 〈総合編〉 | |
| 序文..... | 大塚順次郎 |
| 論 文 | |
| 21世紀の世界経済と日本..... | 大塚順次郎 |
| 東西関係の今後と日本..... | 松本 博一 |
| 日米貿易摩擦構造とその是正策..... | 小林 通 |
| 資源確保と我が国の対策 | |
| ——世界の食糧資源と比較して—— | |
| | 青木 久尚 |
| 金融自由化と国際摩擦(1)..... | 三浦 寛也 |
| わが国税制と国際化..... | 吉牟田 勲 |

| | |
|--------------------|---------------|
| 国際化と文化の問題 | |
| ——日米構造協議の問題点—— | |
| | 濱屋 正男 |
| 異文化教育の視点 | |
| ——文化的変数—— | |
| | 西田 司 |
| 国際化時代における英語教育..... | 佐藤三武朗 |
| 異民族間の交流 | |
| ——ドイツ国内における日本人 | |
| 派遣社員を例に—— | |
| | A. H. BAUMANN |

第10巻第3号 平成2年2月

| | |
|------------------------|-------|
| 〈国際関係編〉 | |
| 論 文 | |
| 中国の民主化運動と言論の自由(1) | |
| | 山本 賢二 |
| 韓国の農村人口と都市産業 | |
| ——1963~1986——..... | 川口 智彦 |
| イスラエルの宗教と政治の | |
| ダイナミックス | |
| ——「ゲーシュ・エムニーム」を | |
| 生んだもの—— | |
| | 山下 高明 |
| 国連投票行動にみる外交のパターンと | |
| 日本外交の態様..... | 浦野 起央 |
| 国際機構の起源 | |
| ——中世末期から19世紀に至る | |
| 国際社会組織化の諸相—— | |
| | 渡部 茂己 |
| 米国輸出管理法の変遷(1) | |
| ——49年輸出統制法と62年修正—— | |
| | 安原 洋子 |
| Tax Incentive in Japan | |
| | 吉牟田 勲 |
| アメリカのインサイダー取引(3) | |
| ——インサイダー取引の規制—— | |
| | 三浦 寛也 |
| サケ・マス漁業をめぐる国際環境 | |
| | 青木 久尚 |
| 北欧諸国における自己言語使用権 | |
| | 石渡 利康 |
| 対人関係理論の異文化的検証 | |
| | 西田 司 |
| 読書ノート | |
| 民主論..... | 山本 賢二 |

第10巻第3号 平成2年2月

| | |
|-----------------|--------------|
| 〈国際文化編〉 | |
| 論 文 | |
| フランス象徴主義と禅思想 | |
| | 中澤 俊郎 |
| ドイツ人の日中戦争観..... | 金森 誠也 |
| ニュルンベルク謝肉祭劇と | |
| 狂言の比較研究 | Ekkehard MAY |
| | 西 一祥 |
| | Gisela DOI |

| | |
|--|--------------------|
| 自由の幻影 ——ジェイムズの『使者たち』再考—— | 秋山 正幸 |
| 『水彩画家』に見るディストピア ——島崎藤村：詩(ロマン)の終焉—— | 佐藤三武朗 |
| コミュニティ・アプローチについて ——国際化時代に向けての英語教育—— | 高橋 公雄 |
| Assessing Sanskrit Literature: Part V, Modern Indian Criticism | Daniel J. BISGAARD |

第11巻第1号 平成2年10月

| | |
|---|-------------------------------|
| 〈国際関係編〉 | |
| 論 文 | |
| 世界構造論と世界市場の再編 ——グローバリズムとナショナリズムの 相克と調和の中で—— | 石原 孝一 |
| 市民社会の成熟と国際関係 ——再生産表式をどう読むか—— | 森本 義輝 |
| 占領下日本の最恵国待遇問題とガット | 安原 洋子 |
| Tax Incentive in Japan(2) 吉牟田 勲 アメリカのインサイダー取引(4) | 三浦 寛也 |
| スヴァールバルの再発見と主権問題 | 石渡 利康 |
| A Comparison of Individual and Political Action Committee Contributions in the 1988 U.S. Congressional Elections: Some Implications for 1990 | Setsuo TAKEDA John R. RINK |
| 国際化トレーニングの「適用」問題 | 西田 司 |
| 田口卯吉の自由貿易..... 小林 通 ホップズ消費税論の社会的立場 | 吉田 克己 |
| 穂積陳重の民法思想..... 東 和敏 国際経済と国際機構 ——通貨・金融・貿易の 国際的組織の展望—— | 渡部 茂己 |
| 討袁革命と北一輝 ——『支那革命外史』成立の背景—— | 浅川 道夫 |
| 研究資料 | |
| 中華人民共和国集会行進示威法 | 山本 賢二 |
| 研究ノート | |
| 米軍パナマ侵攻をめぐる国際法上の諸論点 | 則武 輝幸 |

第11巻第1号 平成2年10月

| | |
|--|--------------------|
| 〈国際文化編〉 | |
| 論 文 | |
| ルカ伝17, 20~21における 神の国の到来について(前編) | 大沼 栄穂 |
| 戦後ドイツ文学に見るゾルゲ事件 | 金森 誠也 |
| モンテニユ, 神父マルドナ, 聖ジャンヌ・ド・レストナック | 菅波 和子 |
| 島崎藤村とシェイクスピア ——『朱門のうれひ』に見る 悲劇の諸相—— | 佐藤三武朗 |
| ラフカディオ・ハーンと医師マタス | 萩原 順子 |
| The Concept of Reunification in the Patañjalu System of Philosophy | Daniel J. BISGAARD |
| 超絶主義とフランク・ロイド・ライト | 粕谷千由紀 |
| What is <i>Hamlet to The Broken</i> Commandment | Saburo SATO |

第11巻第2号 平成3年1月

| | |
|---|-------|
| 〈総合編〉 | |
| 論 文 | |
| 国際通貨制度の現状と将来 ——第3極基軸通貨制度—— | 大塚順次郎 |
| エネルギー資源の供給と確保 ——特に世界と日本を比較して—— | 青木 久尚 |
| 海外における日本企業の課題..... 濱屋 正男 金融自由化と国際摩擦(2)..... 三浦 寛也 わが国企業の海外進出と貿易構造の変容 | 小林 通 |
| 国際政治の地殻変動と 日米安保条約の再検討..... 武田 節男 日本人強制収容とアメリカの見識 | 佐藤三武朗 |
| バファ・バファ実習の試み..... 西田 司 集団安全保障, 平和維持活動, 集团的自衛と日本..... 則武 輝幸 | |
| 研究資料 | |
| 北極圏国際協力と日本 ——スヴァールバル関係主要法規—— | 石渡 利康 |
| 研究ノート | |
| 日本と国際機構 ——21世紀に向けて—— | 渡部 茂己 |
| 書 評 | |
| 『NOと言える日本』 盛田昭夫・石原慎太郎共著 光文社刊 | |

『それでもNOといえる日本』

石原慎太郎・渡辺昇一・小川和公共著
光文社刊

『歴史の法則・私はなぜアメリカにイエスというか』

竹村健一著 イースト・プレス刊

.....大塚順次郎

第11巻第3号 平成3年2月

〈国際関係編〉

論 文

日米経済関係におけるナショナリズムと

グローバリズム.....石原 孝一

年金資金運用自由化とリスク対策

.....大塚順次郎

アジア・太平洋地域の台頭と

その協力の展望及び検証.....浦野 起央

市民社会とは何か ——Q & A——

.....森本 義輝

日米貿易摩擦の実証分析.....小原 堯

ドイツ社会主義統一党(SED)の発足と

連合国の対独政策.....小林 正文

田口卯吉の自由貿易論(2)

——明治期の自由貿易論と

保護政策論争——

.....小林 通

中国の民主化運動と言論の自由(2)

.....山本 賢二

Communicative Responses to Problematic
Situations in Japanese Organizations

.....西田 司

Lea P. STEWART

Stella Ting TOOMEY

William B. GUDYKUNST

離婚事由に関する日英比較の試み

.....東 和敏

スヴァールバル条約.....石渡 利康

環境の国際的保護と国際機構.....渡部 茂己

韓国の穀物政策の変遷

——50年代から70年代の

価格政策を中心に——

.....川口 智彦

国際連合と米州機構の協力による

中米紛争の解決

——国際連合と地域的機関の

関係に関する一考察——

.....則武 輝幸

抗日戦争と中国革命

——新民主主義的革命段階の検討——

.....浅川 道夫

研究ノート

神田孝平の自由主義財政経済論.....吉田 克己

第11巻第3号 平成3年2月

〈国際文化編〉

論 文

ミリー・シールの熱情

——ジェイムズの『鳩の翼』の考察——

.....秋山 正幸

島崎藤村：『春』

——春に死す生命と新たな生の構築——

.....佐藤三武郎

『廷臣と町人の対話』

——パリの〈リーグ〉、〈16区総代会〉についての一考察——

(1)

.....菅波 和子

金井美恵子と西欧の文学理論.....吉田 三陸

泉鏡花の小説とドイツ的気分.....金森 誠也

教育の機会均等と

質的向上との関係について

——現代アメリカにおける教育改革——

.....河原美耶子

UN ESTUDIO SOBRE EL

COLECTIVISMO JAPONES

.....Bernardo VILLASANZ

第12巻第1号 平成3年10月

〈国際関係編5〉

特別寄稿

中国の新国際秩序外交の考案.....梁 守徳

論 文

外国為替の理解を容易にするための提案

.....大塚順次郎

北欧諸国とバルト諸国

——1990年1月—1991年3月間の関係——

.....石渡 利康

メスティサへ(Mestizaje)に関する一考察

.....坂本 博

日米製造業における経済構造の変化

.....小原 堯

イギリス重商主義の公債論(1)

——W・ペティを中心として——

.....吉田 克己

中国の民主化運動と言論の自由(3)

.....山本 賢二

イギリスの離婚制度における

Undefended Divorceについて

.....東 和敏

CREENCIAS Y VALORES DE

LOS ESKAÑOLES B. VILLASANZ

反清革命運動における

初期三民主義の位相

.....浅川 道夫

研究ノート

国際法の法的性格に関する史的考察

——現代国際法と前近代国内法の

類似点と相違点——

.....則武 輝幸

第12巻第1号 平成3年10月

〈国際文化編5〉

論 文

ドイツにおける日本学の歴史と現状

.....西 一祥

シェイクスピアと島崎藤村

| | |
|--|--|
| 『春』と青春の自画像 —愛の破綻を通して— ……………佐藤三武朗 | |
| 『サチール・メニッペ』研究(1) —同書「第三章」の訳と注解— ……………菅波 和子 | |
| ルカ伝17, 20～21における 神の国の到来について(後編) ……………大沼 栄穂 | |
| フェルヤル島伝承 「スネアピョドウン」と「外界」概念 ……………石渡 利康 | |
| 社会体制と国家 —市民社会論における諸問題— ……………森本 義輝 | |
| 胡績偉ジャーナリズム論の生成……………山本 賢二 | |
| 研究ノート | |
| 明治期の英語教育 —英語教師の日記から— ……………萩原 順子 | |
| 研究資料 | |
| 日本大学国際関係学部図書館における 幕末期西洋兵学書文献解題……………浅川 道夫 | |

第12巻第2号 平成3年12月

| | |
|---|--|
| 〈総合編3〉 | |
| 論文 | |
| 対外摩擦と日本の選択……………大塚順次郎 | |
| 東南アジア地域の経済発展と わが国の貿易への影響……………小林 通 | |
| コメの市場開放と食糧安全保障……………青木 久尚 | |
| 国際貢献と日本の責務……………佐藤三武朗 | |
| 日本における金融自由化……………三浦 寛也 | |
| 異文化差異としての対外紛争の解決と 地域研究の役割……………石渡 利康 | |
| 貿易摩擦と国際機構による紛争解決の枠組 ……………渡部 茂己 | |
| GATTウルグアイラウンド農産物 交渉とEC共通政策(CAP)の改革 ……………安江 則子 | |
| 研究ノート | |
| 国際機構を通じた国際公益利益の実現と 海外摩擦の解消……………則武 輝幸 | |
| 年表 | |
| 主要な通商問題の推移……………三浦 寛也 小林 通 | |

第12巻第3号 平成4年2月

| | |
|--|--|
| 〈国際関係編6〉 | |
| 論文 | |
| 1986—1990年における 国連総会投票行動の分析……………浦野 起央 | |
| 国際関係の地殻変動と南北問題 —対比多国間援助構想の評価— ……………武田 節男 | |
| ココム規制と戦後日本……………加藤 洋子 | |
| 北欧協力の新段階……………石渡 利康 | |

| | |
|---|--|
| Foward, Future and Fuward……………大塚順次郎 | |
| アメリカのインサイダー取引(5) —学説と法の変遷— ……………三浦 寛也 | |
| 日米製造業における経済構造の変化 ……………小原 堯 | |
| 国際会計の課題(2)……………北川 道男 | |
| インド憲法におけるマイノリティ問題 ……………李 素玲 | |

研究ノート

| | |
|--|--|
| 社会問題への国際的対応 —国際社会問題の解決および 文化的協力を担う国際機構と機能— ……………渡部 茂己 | |
|--|--|

研究資料

| | |
|---|--|
| 国連イラク・クウェート監視団 (UNIKOM) —関連文書(仮訳)および解説— ……………則武 輝幸 | |
|---|--|

第12巻第3号 平成4年2月

| | |
|--|--|
| 〈国際文化編6〉 | |
| 論文 | |
| The Animal Image from Shakespeare to Shimazaki Toson……………佐藤三武朗 | |
| 胡績偉ジャーナリズム論の位相……………山本 賢二 | |
| Sequence Patterns of Self-Disclosure among Japanese and North American Students ……………西田 司 | |
| 『サチール・メニッペ』研究(2) —同書「第1章」の訳と注解— ……………菅波 和子 | |
| Hiroshima: A New raison d'être ……………吉田 三陸 | |
| W.ゾンバルトの見解に基づく 日本の資本主義と戦争の分析……………金森 誠也 | |
| ラフカディオ・ハーンの見た浦島 —『夏の日』を中心に— ……………萩原 順子 | |
| 日本アジア協会成立の諸問題……………楠家 重敏 | |
| 毛沢東思想にみる革命戦略と軍事工作 ……………浅川 道夫 | |
| 研究ノート | |
| 「拍」について —言語のリズムに関する考察— ……………戸田 和子 | |

第13巻第1号 平成4年7月

| | |
|------------------------------------|--|
| 〈国際関係編7〉 | |
| 論文 | |
| フィンランドの中立政策概念の変容 ……………石渡 利康 | |
| 国際行動分析のための 理論的パースペクティヴ……………西田 司 | |
| わが国金融制度改革関連法案の内容 ……………三浦 寛也 | |

金融制度改革案の誤りと善後策……………大塚順次郎
証券不祥事と証券市場改革問題……………三浦 寛也
西條 信弘

国際会計の課題

—EC会社法第8次指令
「決算監査人の資格」—

……………北川 道男

西欧における租税思想の変革と

日本の租税思想……………大淵 三洋

J.ヴェンダーリントの公債論……………吉田 克己

研究ノート

「大中華経済圏」考

—「中華経済連携システム
国際シンポジウム」をめぐる—

……………山本 賢二

第13巻第1号 平成4年7月

〈国際文化編7〉

論文

人類の最後の使命

—カント平和論の人間存在論的基礎—

……………大沼 栄穂

アメリカにおけるローマ・カトリック教会の

形成と反カトリック主義

—ウルスラ会修道院学校事件
(1834年)を中心に—

……………北野 秋男

Passion in *Hamlet* and Shimazaki

Toson's *New Life*……………佐藤三武朗

Finding Out the Truth: The Ordeal

by Arranged Marriage……………松岡 直美

ゲルハル・ハウプトマンの変貌と

日本の作家たち……………金森 誠也

『サチール・メニッペ』研究(3)

—同書「第V章」の訳と注解—

……………菅波 和子

国際音声記号による発音表記に関する

対照言語学的考察

—発音記号[ε]の必要性—

……………戸田 和子

研究ノート

19世紀の極東をめぐる外圧と抵抗

—日中比較政治思想史への試み—

……………浅川 道夫

海外文化事情

「エリナ」(ELINA)

—二つの内的世界の対峙—

……………石渡 利康

第13巻第2号 平成4年12月

〈国際関係編8〉

論文

韓国政治のダイナミクス

—憲法改正を中心として—

……………慎 斗範

人間活動と地球環境の持続可能性

……………青木 久尚

アメリカ財務省の金融制度改革案

……………三浦 寛也

EFTA裁判所の創設……………石渡 利康

EC会計制度の課題と展望……………北川 道男

Global Cooperation and Cross Cultural

Perceptions in Japan-U. S. Bilateral

Relations in the Post-Cold War Era

……………武田 節男

第13巻第2号 平成4年12月

〈国際文化編8〉

論文

異文化コミュニケーション分析の試み

……………西田 司

北欧協力と「北欧言語共同体」……………石渡 利康

中国ナショナリズムの

形成過程に関する一考察……………浅川 道夫

島崎藤村の「家」

—比較文学研究の試み—

……………佐藤三武朗

白隠「坐禅和讃」における

蓮華国について……………大沼 栄穂

『サチール・メニッペ』研究(4)

—同書「第VIII章」の訳と注解—

……………菅波 和子

明治期の英語教育

—英語学者 佐久間信恭—

……………梅本(菫原)順子

第13巻第3号 平成5年2月

〈特集編〉

論文

諸民族共生の理念

—変革期に求められる

国家と民族の思想—

……………松本 博一

北欧統合の新展開とバルト協力……………石渡 利康

ECの金融市場統合(1)

—英独仏の金融制度改革を

中心として—

……………三浦 寛也

CSCEとヨーロッパの拡大……………森本 義輝

秩序と無秩序

—人間の悲劇:「リア王」に学ぶ—

……………佐藤三武朗

On Freedom of Mobility of Labour

within the European Community

……………A. バウマン

「韓国政治のダイナミクス」への補論

……………慎 斗範

特別講演要旨

(1)東南アジア文化の重層性……………石井 米雄

(2)最近の欧米事情と日本経済……………浜野 崇好

第14巻第1号 平成5年7月

〈国際関係編9〉

論 文

- 日本漁業の持続可能性 I
——北太平洋公海上の流し網
漁業の混獲を中心にして——
……………青木 久尚
- The Northern Territories Reconsidered
……………石渡 利康
- 韓国における選挙制度と投票行動
……………慎 斗範
- アルジェリアにおけるイスラーム
原理主義運動の史的発展……………山下 高明
- 「緑の革命」と所得配分：理論の批判的検討
……………岩崎 輝行
- ペルーにおけるアイデンティティの
形成過程……………坂本 博
- ヨーロッパ市民社会の新しい地平
……………森本 義輝
- ダウナント財政論の物質
——重商主義的国家間対立と
財政的対応策——
……………吉田 克己
- D・ヒュームの国際経済論的視点(1)
……………小林 通
- 日米安全保障問題における
政策決定機構の役割……………武田 節男
- 研究ノート**
第45回国際捕鯨委員会年次総会について
……………青木 久尚

第14巻第1号 平成5年7月

〈国際文化編9〉

論 文

- Japanese Communication Studies
……………西田 司
- 近代思想の源流としての佐久間象山
——対外認識の形成過程を中心に——
……………河原美耶子
- プラトン『国家』473C-Dにおける
哲人統治について……………大沼 栄穂
- 島崎藤村における「旅」：自我の確立を
目ざして
——『春』を中心に——
……………佐藤三武朗
- 一つの翻訳考
——ハムレットの場合——
……………氏家 文昭
- ヴェルナー・ゾンバルトと貝原益軒
——保健(とくに性生活、食生活)と
経済に関する両者の見解の類似——
……………金森 誠也
- 『サチール・メニッペ』研究(5)
——同書「第X章」の訳と注解——
……………菅波 和子
- 清末洋務運動にみる富強政策の位相
……………浅川 道夫

研究ノート

- 途上国とラテンアメリカにおける人口問題
……………坂本 博

第14巻第2号 平成5年12月

〈国際関係編10〉

論 文

- ECの金融市場統治(2)
——英独仏の金融制度改革を
中心として——
……………三浦 寛也
- 相対先物システムの創設と活用……………大塚順次郎
- 日豪関係の新たな局面
——経済偏重から政治協力へ——
……………高木 暢之
- 「一国両制」と新聞の自由……………山本 賢二
- D・ヒュームの国際経済論的視点(2)
……………小林 通
- 海外学界動向**
北欧における2つの国際会議……………石渡 利康
- 研究資料**
中華人民共和国国家安全法……………山本 賢二

第14巻第2号 平成5年12月

〈国際文化編10〉

論 文

- The Japanese Perspective of the
Communication Process……………西田 司
- 島崎藤村とイブセン(1)
——比較文学研究の諸相——
……………佐藤三武朗
- 『サチール・メニッペ』研究(6)
——同書「第VII章」の訳と注解——
……………菅波 和子
- 日本語の時制
——西洋伝統文法からの脱却——
……………戸田 和子
- 「詩経」美学三題……………景 凱旋
- 国際情報**
ノーベル平和賞とその周辺……………石渡 利康
- 研究ノート**
一輪の野花——「女書」——……………王 敏
- 書 評**
中村理平著「洋楽導入者の軌跡」(刀水書房)
……………西村 満男

第14巻第3号 平成6年2月

〈特集編〉

論 文

- 国民統合原理としてのセキュラリズム
——インドにおける
コミュニズムとの相克——
……………山下 高明
- 新欧州における欧州極地バレンツ地域統合
……………石渡 利康
- ヨーロッパ経済の全体像……………森本 義輝

Russia Loses Control of Eastern Europe
 J. C. クラーク III
 相互依存に向けて
 ——日本の課題——
佐藤三武朗

J. アダムズの状態統合と国民思想形成
 ——独立期における共和主義
 思想と公教育普及——
北野 秋男

研究ノート

アジア・太平洋地域の動向.....高木 暢之

海外文化情報

ノーベル平和賞授賞式.....石渡 利康

海外芸術情報

アリウス・サリネンのフィンランド・
 オペラ「クッレルヴォ」.....石渡 利康

学術講演要旨

The Collapse of Communism
 in Eastern Europe J. C. クラーク III

アジアの安全保障と日本
 ——国際情報と戦略の視点から——
岩島 久夫

Western Perspectives on Japan's
 Economic Success R. C. トレビルコック

第15巻第1号 平成6年7月

〈国際関係編11〉

論文

The Rehnquist Court:
 The American politics of
 Constitutional Interpretation
 in Religion, Speech, and
 Privacy cases
武田 節男

Income, Consumption, and Causality:
 The Japanese Case
小原 堯

チャールズ・ダヴナントの公債論
吉田 克己

バルト協力の新動向.....石渡 利康

研究ノート

アジア・太平洋地域がはらむ緊張
高木 暢之

第15巻第1号 平成6年7月

〈国際文化編11〉

論文

社会的視点から見たハワイの日系人
寺田 篤弘

『サチール・メニッペ』研究(7)
 ——同書「第IX章」の訳と注解(前)——
菅波 和子

A Study on Shimazaki Toson's
 "The Family" 佐藤三武朗
 ドイツ詩人マックス・ダウテンダイの
 ジャワ体験.....金森 誠也

海外文化情報

古代北欧の箴言.....石渡 利康

第15巻第2号 平成6年12月

〈国際関係12〉

論文

ヨーロッパの拡大と分裂.....森本 義輝
 EUの金融市場統合(3)
 ——英独仏の金融制度改革を
 中心として——
三浦 寛也

The Japanese Understanding
 of Scandinavian Culture
 and Nordic Cooperation:
 the Summary of the Lecture given
 to THE SEMINAR ON THE
 FOREIGN POLICY OF JAPAN,
 Tuesday September 6, 1994 in Oslo
石渡 利康

わが国企業の国際財務戦略
 ——良い戦略と危険な戦略——
大塚順次郎

日本国憲法における外国人の人権
杉山 嘉尚

韓・日労使関係政策に関する比較研究
慎 斗範

クリントン大統領と日米安全保障
 ——大統領の力量が問われる試金石——
武田 節男

Trade Structure Change in Asian
 NIES and ASEAN.....小林 通
 アボリジニの土地権と「マボ判決」
 ——オーストラリア社会の一断面——
高木 暢之

研究資料

中華人民共和国国家安全法実施細則
山本 賢二

第15巻第2号 平成6年12月

〈国際文化編12〉

論文

言論の意義と限界
 ——平和哲学としてのミル『自由論』——
大沼 栄穂

『サチール・メニッペ』研究(8)
 ——同書「第IX章」の訳と注解(後)——
菅波 和子

文化の変異性.....西田 司

米国の移民と移民法
 ——植民地時代から1812戦争まで——
加藤 洋子

Composition Feedback in Japanese
 University Writing Classes
アンジェロ・M・ピティロ

言語習得における双方向
 コミュニケーションの重要性.....戸田 和子

海外研究動向

“ハワイの沖縄人”研究の動向……………佐藤三武朗

第15巻第3号 平成7年2月

〈特集編〉
論 文

南アジアにおける分離主義運動

……………山下 高明

EU加盟と北欧協力……………石渡 利康

日系ハワイ移民史

——日米関係の一側面——

……………佐藤三武朗

The Father of Okinawan Immigration:

Kyuzo Toyama……………崎原 貢

1991～1993年における国連総会投票行動の

分析……………浦野 起央

Teaching The New World Order in the

English Language Classroom: An Experiment in

Content-Based Education

……………D. J. ビスガード

学術講演要旨

European Immigration and Refugee

Policies An Introductory Overview

……………O. F. クヌッセン

くにづくりへの協力

——ODAの再点検——

……………二神 重成

米ノーベル賞作家トニ・モリスンの世界

……………大社 淑子

第16巻第1号 平成7年8月

〈国際関係編13〉
論 文

サーメ民族の自治問題……………石渡 利康

欧州連合(EU)の拡大と市民社会論

……………森本 義輝

デリバティブとそのリスク……………大塚順次郎

デイヴィッド・リカードの経済学と

租税論に関する一考察(1)

——『経済学および課税の原理』および

「公債制度論」を中心にして——

……………大淵 三洋

Toward an Integrated Model of

American Supreme Court Decision

Making in Search and Seizure Cases

……………武田 節男

Mass Employment and Economics

……………M. I. チャブレン

研究ノート

インドシナ戦争20周年とASEAN

……………高木 暢之

第16巻第1号 平成7年8月

〈国際文化編13〉
論 文

『大学』における修身の概念について

……………大沼 栄徳

島崎藤村：『桜の実の熟する時』における

「オフエリアの歌」の比較研究

……………佐藤三武朗

ラフカディオ・ハーンの翻訳と再話

——「孟沂の話」と「伊藤則資の話」を

比較して——

……………梅本 順子

Ezra Pounds Beziehungen zu

ostasiatischer Dichtung und Kunst

……………サン・キョン・リー

ブレヒトにおける回り舞台の象徴的使用

……………田中 徳一

『サチール・メニッペ』研究(9)

——「出版屋の第1の辞」及び

「第2の辞」(前)の訳と注解——

……………菅波 和子

コミュニケーション行動の予期……………西田 司

The Role of Stereotypes in

Intercultural Communication

……………中川ジェーン

“government of the people”再考

……………西村 満男

Adapting Communicative Language

Teaching to the Needs of

Japanese University Students

……………M. S. ジナング

義務感を表す英語の助動詞に関する

日英対照言語学的考察……………戸田 和子

〈お詫びと訂正〉第16巻第1号

「国際関係研究」〈文化編〉に掲載されました戸田和子氏(日本大学非常勤講師)の論文タイトルに誤りがありましたので、ここに訂正しお詫び申し上げます。

・誤) 〈研究ノート〉義務感を表す英語の助動詞に関する日英対照言語学的考察

・正) 義務感を表す英語の助動詞に関する日英対照言語学的考察

第16巻第2号 平成7年12月

〈国際関係編14〉

論 文

主要国における政治と行政の関係に関する

比較研究……………慎 斗範

歩み出す「東南アジア共同体」

——拡大ASEANの分析から探る——

……………高木 暢之

経済自由化政策と市場：

東南アジアの事例(I)……………岩崎 輝行

台湾、韓国の輸出競争力の比較分析

……………小林 通

通貨デリバティブの会計と問題点

……………大塚順次郎

有価証券概念の拡大……………三浦 寛也

監査証拠の分類

——国際監査ガイドラインに

関連して——

| | |
|-------------------|--|
|北川 道男 | |
| ペティ財政経済論の評価 | |
| ——国際的展開の中で—— | |
|吉田 克己 | |
| デイヴィッド・リカードの | |
| 経済学と租税論に関する国際的再評価 | |
| ——『経済学および課税の原理』と | |
| 「公債制度論」を中心にして—— | |
|大淵 三洋 | |
| 海外事情 | |
| バルト地域統合の新状況 | |
| ——第4回バルト会議からの短信—— | |
|石渡 利康 | |

第16巻第2号 平成7年12月

〈国際文化編14〉

論文

| | |
|---|--|
| 死の救済の二類型.....寺田 篤弘 | |
| ——仏教とキリスト教—— | |
| 島崎藤村：『桜の実の熟する時』の比較分析 | |
| ——主人公の自我確立と、 | |
| 西洋の作家と詩人—— | |
|佐藤三武朗 | |
| A study of Fredric Ives Carpenter's | |
| <i>Emerson and Asia</i> D. J. ビスガード | |
| 『サチール・メニッペ』研究(10) | |
| ——「出版屋の第2の辞」(後)の | |
| 訳と注解—— | |
|菅波 和子 | |
| ロシア・クロンシュタットのマカロフ | |
| 提督像の国際的視点からの碑文考証 | |
| ——石川啄木詩ロシア語訳詩説を | |
| めぐって—— | |
|戸塚 隆子 | |
| 英語の「ライティング」の教育 | |
| ——異文化のレトリックをめぐって—— | |
|梅本 順子 | |
| Teacher Questions and Student-Initiated | |
| Behavior in ESL Classrooms | |
|A. C. ケサダ | |
| Sociocultural Dimensions of Stereotypes | |
|中川ジェーン | |
| Adapting English-Language Word Games | |
| for Japanese Students | |
|M. S. ジナング | |
| 汉语語法研究的历史特点及所受国外語法 | |
| 学的影响 | |
| ——《文通》以后至三十年代中期—— | |
|吴 淮南 | |
| 日本語の行為を表す動詞 | |
| ——外国人に対する日本語教育のための | |
| 基礎的研究として—— | |
|佐藤 琢三 | |

第16巻第3号 平成8年2月

〈総合編〉

論文

| | |
|--|--|
| 主要国における政府形態に関する比較研究 | |
| ——大統領制と議院内閣制を中心に—— | |
|慎 斗範 | |
| 戦域ミサイル防衛(TMD)と | |
| アジア太平洋地域における軍事的危機の回避 | |
|武田 節男 | |
| Structural Change in American | |
| Economy: | |
| An Econometric Analysis | |
|小原 堯 | |
| アメリカの金融制度改革 | |
| ——銀行・証券業務の自由化—— | |
|三浦 寛也 | |
| イギリスにおける児童関係法と子の保護 | |
|東 和敏 | |
| 異文化コミュニケーション能力の測定 | |
|西田 司 | |
| Emerson's "Hamatreya": A Hindu | |
| World View Translated into a New | |
| England Context D. J. ビスガード | |
| 『夜明け前』執筆の一つの動機：父への回帰 | |
| ——『新生』と『桜の実の熟する時』に | |
| おける父親像を通して—— | |
|佐藤三武朗 | |
| Development of the Japan Study | |
| Program in US: | |
| An Interdisciplinary Approach to | |
| Japanese Language and Cultural | |
| Studies 植山 剛行 | |
| E. マグラム | |
| Considering Politeness as a Factor | |
| in Teaching Oral English to | |
| Japanese Students M. S. ジナング | |
| Multiculturalism's Role in Peace Education | |
|中川ジェーン | |
| 海外事情 | |
| バルト大学の発展近況.....石渡 利康 | |
| 学術講演会要旨 | |
| 新しい国際関係の枠組み.....前田 正裕 | |
| Europe after the Cold War: | |
| Problems and Prospects | |
|D. J. レイノルズ | |
| カナダを通してみたアメリカ | |
| ——暴力と妥協—— | |
|鶴田 欣也 | |
| 国連新時代と日本の役割.....功刀 達朗 | |
| 第17巻第1号 平成8年7月 | |
| 〈国際関係編15〉 | |
| 論文 | |
| A New Concept of Security and Role | |
| of the Altruistic Regional Cooperation | |
| for the Nordic Countries.....石渡 利康 | |
| 我が国の政府開発援助(ODA)政策 | |

| | |
|--|-------|
|小野 純男 | |
| EUの環境監査の構図 | 北川 道男 |
| イギリス児童法における親の責任の概念と その法律効果..... | 東 和敏 |
| 台湾における「統一」と「独立」を めぐる民意 ——大統領選挙を中心にして—— | 山本 賢二 |
| 海外事情 | |
| Recent Movement of the Barents Regional Cooperation | 石渡 利康 |

第17巻第1号 平成8年7月

| | |
|--|------------|
| 〈国際文化編15〉 | |
| 論文 | |
| 島村藤村の『新生』：岸本のフランス体験 | 佐藤三武朗 |
| The Cultural Origins of Classroom Behavior: a Comparative Profile of Japanese and American Students | M. S. ジナング |
| Professional English Education in Japan: An Economic Rationale for Change | C. A. ボーエン |
| 研究ノート | |
| 「共生」を哲学する ——現代思想研究の意義と方法—— | 大沼 栄穂 |
| 海外事情 | |
| Increasing Attention to Interests of the Indigenous Peoples in the Arctic Region | 石渡 利康 |

第17巻第2号 平成8年12月

| | |
|---|-------|
| 〈国際関係編16〉 | |
| 論文 | |
| 欧州通貨統合の政治経済学 ——イギリスの論争—— | 稲葉 守満 |
| わが国の金融再編のゆくえ..... | 大塚順次郎 |
| わが国企業の国際化とアジア諸国との 産業内貿易..... | 小林 通 |
| 主要国における中央政府と地方政府の 関係に関する比較研究..... | 慎 斗範 |
| 「ASEAN 10」形成過程の検証 | 高木 暢之 |
| American Foreign Policy and the Problem of Nuclear Nonproliferation in Asia | 武田 節男 |
| J. タッカーの租税論 ——18世紀の国際関係に関連して—— | 吉田 克己 |
| 海外国際情報 | |
| 第5回バルト会議からの短信..... | 石渡 利康 |

第17巻第2号 平成8年12月

| | |
|---|-------------|
| 〈国際文化編16〉 | |
| 論文 | |
| 異文化の中の女神たち ——ラフカディオ・ハーンの 描いた女性像(I)—— | 梅本 順子 |
| 性差と文化 ——1. 知的機能における性差—— | 岡本 健 |
| 『サチール・メニッペ』研究(II) ——同書「第II章」及び 「第IV章」の訳と注解—— | 菅波 和子 |
| 初対面30分間の話題にみる日米の自己開示 | 西田 司 |
| 多民族社会における民俗医療 ——北スマトラ・ジャワ人の疾病行動—— | 吉田 正紀 |
| Approaching the Study of Balinese Mythology | D. J. ビスガード |
| A Professional English Curriculum Model: Meeting the Needs of Students and Society | C. A. ボーエン |
| Some Linguistic Strategies Employed by Japanese and American-English Native Speakers and Second-Language Learners: a Culturally-Based Analysis..... | M. S. ジナング |
| 研究動向 | |
| 国際交流の一概念：移民と多文化的文化 ——ハワイの沖縄人を中心に—— | 佐藤三武朗 |
| 海外文化事情 | |
| ラトヴィア・ナショナル・オペラ 「炎と闇夜」..... | 石渡 利康 |
| インドネシアの種族別文化..... | 舟田 京子 |

第17巻第3号 平成9年2月

| | |
|---|------------|
| 〈三島キャンパス開設50周年記念 特集号〉 | |
| 論文 | |
| 「新しいパラダイムを求めて」 ～戦後、半世紀を経過して～ Internationella miljökonventioner: Tanken om altruistisk miljösäkerhet | 石渡 利康 |
| 開発援助のパラダイムの転換..... | 稲葉 守満 |
| Relating Krashen's Monitor Model to the Japanese University Classroom: A New Paradigm for Facilitating English-Language Acquisition | M. S. ジナング |
| 平成8年度学術講演会要旨 | |
| The U. S. and Japan in the 21st Century | G. G. パッカー |
| 「ウチ」と「ソト」の日米比較言語文化学 | |

| | |
|---|---------------|
| | 牧野 成一 |
| Europe at the End of the Twentieth Century: The Search for a European Cultural Identity | R. T. セガーズ |
| Women's Role in International Cooperation | J. L. ハーバート |
| 香港返還に関する諸問題 | |
| 国際関係学部長指定研究 | |
| 「香港返還に関する諸問題」について | 秋山 正幸 |
| 香港略図 | |
| 香港年表 | |
| 中国から見た香港返還 | |
| 香港問題と中国の「一国両制」..... | 梁 守徳 |
| 内地と香港の経済関係の分析..... | 潘 国華 |
| 上海から見た香港返還 | |
| 上海と香港のマスメディア比較研究 | 張 国良 |
| 上海と香港の経済協力に関する考察 | 劉 紅 |
| 世紀の転換期における再考と観察 | |
| ——現代中国の上海・香港、両地域の都市文学における市民主義叙事伝統の復活と刷新—— | 丁 国生 |
| 日本から見た香港返還 | |
| 香港の法的地位..... | 石渡 利康 |
| 香港新空港建設問題 | |
| ——新空港建設計画をめぐる英中の確執—— | 宇佐美 滋 |
| 香港新空港の建設に伴う島嶼地域の変容 | 加藤 雅功 |
| 文化アイデンティティとコミュニケーション | |
| 行動に関する意識調査 | |
| ——香港、日本、アメリカの比較—— | 西田 司 |
| 席揚事件と香港における新聞の自由 | 山本 賢二 |
| 資料 | |
| 中華人民共和国香港特別行政区基本法 (1990年4月4日 中華人民共和国第7期全国人民代表大会第3回会議採択) 『北京週報』別冊付録文献 | |
| | 1990年5月1日より転載 |

第18巻第1号 平成9年7月

〈国際関係編17〉

論文

| | |
|---|-------|
| The U. S.-Russian Summit in Helsinki and Baltic States'Concerns | 石渡 利康 |
| The Political Economy of Regulation in LDCs: A Critical Review of Prof. Laffont's New Economics of Regulation | 稲葉 守満 |
| The Baltic States: On the East-West Faultline in Northern Europe | |

| | |
|-------------------------------|----------|
| | A. レインシュ |
| 我が国とパラグアイとの関係 | |
| ——政府開発援助(ODA)政策を中心として—— | 小野 純男 |
| 主要国における行政統制に関する比較研究 | 慎 斗範 |
| 支出税の系譜 | |
| ——戦後税制改革の世界的展開に関連して—— | 吉田 克己 |
| 資料 | |
| 情報活動をより一層強化することに関する | |
| 中共中央弁公庁の意見(試行)..... | 山本 賢二 |

第18巻第1号 平成9年7月

〈国際文化編17〉

論文

| | |
|--|-------------|
| 性差と文化 | |
| ——2. 行動における性差—— | 岡本 健 |
| 異文化の中の女神たち | |
| ——ラフカディオ・ハーンの描いた女性像(Ⅱ)—— | 梅本 順子 |
| シアトル市における日系人社会の形成過程とその変質..... | 加藤 雅功 |
| 道化の位相: 他者と自者の狭間 | |
| ——『人間失格』と『リア王』を中心に(一)—— | 佐藤三武朗 |
| Education And The Mind-set of Japanese University Oral English Students | M. S. ジナング |
| Balinese and Indian Elements in the Barong and Rangda Ritual Dance: A Study in Comparative Mythology | D. J. ビスガード |
| 研究ノート | |
| 意志としてのオプティミズム | |
| ——アランにおける平和教育の原理について—— | 大沼 栄穂 |
| 学会動向 | |
| 中国と世界—21世紀に向けてのコミュニケーションと文化..... | 山本 賢二 |

第18巻第2号 平成9年12月

〈国際関係編18〉

論文

| | |
|-----------------------------|-------|
| 欧州・バルト安全保障の新展開 | |
| ——「社会的脅威排除」概念構築の必要性—— | 石渡 利康 |
| 途上国債務の政治経済学(1) | |
| ——累積債務問題の再考—— | 稲葉 守満 |

| | |
|--|-------|
| リチャード・カンティロン <small>の</small> 外国貿易論 | 小林 通 |
| 国際私法における任意的抵触法の理論 | 杉山 嘉尚 |
| ASEANの安全保障観 ——創始期における特徴を 生んだ背景—— | 高木 暢之 |
| The Problem of Financing the Campaign of American Presidential Elections | 武田 節男 |
| イギリス家族法における子の権利 ——子の医療における自律権の本質—— | 東 和敏 |

第18巻第2号 平成9年12月

〈国際文化編18〉

論 文

| | |
|--|------------|
| コロケーションにおける「心」のイメージ ——『こゝろ』における「心」の 中国語訳を通して—— | 呉 川 |
| 太宰治『人間失格』と道化 ——自画像としての文学—— | 佐藤三武朗 |
| Group Orientation as A Factor in Teaching Oral English to Japanese University Students | M. S. ジナング |
| 『サチール・メニッペ』研究(12) ——同書「第VI章」の訳と注解—— | 菅波 和子 |
| 類義語の意味について..... | 藤井 誠 |
| 井上靖と英文学 ——短編「ある女の死」の場合—— | 藤沢 全 |
| 北スマトラの民俗治療者ドゥクンの専門化 ——東南アジアの民俗医療システムの 理解に向けて—— | 吉田 正紀 |

講演要旨

| | |
|-----------------------------|------------|
| カズオ・イシグロ：英語で語る日本の声 | ホセ＝マリア・ルイス |
|-----------------------------|------------|

第18巻第3号 平成10年3月

〈総合編〉

特集論文：国際関係の中のエスニシティ問題

| | |
|--|------------|
| Nationalism and Chinese National Policy | 唐 士其 |
| 島崎藤村：『破戒』をエスニシティの視点 から読む ——トランスナショナルリズムへ 向けた自己の解放—— | 佐藤三武朗 |
| Zen Buddhism and Western Esotericism in Yeats' "The Statues" | M. S. ジナング |
| 新疆ウイグル自治区における | |

| | |
|---|-------|
| 民族分離独立運動の動向 ——『新疆日報』の分析を中心にして—— | 山本 賢二 |
|---|-------|

| | |
|--|-------|
| 非領域的マイノリティー ——欧州におけるロマ(Roma)—— | 石渡 利康 |
|--|-------|

一般論文

| | |
|--|-------------|
| 異文化の女神たち ——ラフカディオ・ハーン <small>の</small> 女性像(Ⅲ)—— | 梅本 順子 |
| An Analysis of Affective Variables Involved in SLA among Native-Arabic Speakers | L. ギルナー |
| Cultural Factors Affecting Second Language Learning: The Imporoance of Acculturation | M. クレイブ |
| 国際交流の問題点..... | 黒岩 徹 |
| The Making of American Foreign Policy and Asia | 武田 節男 |
| 19世紀前半のニューヨーク市教育委員会 制度導入とカトリック..... | 永塚 史孝 |
| On Motivating Students to Learn English for Today's World | D. J. ビスガード |

学術講演要旨

| | |
|---|-------------|
| Lessons From the Northern Territories Dispute: Can a Resolution Achieved by Practioners be a Puzzle for Theorists? | T. フォーシュベルイ |
| Finnish Security Policy in the European Context | T. ヴァーハトランク |

第19巻第1号 平成10年7月

〈国際関係編〉

論 文

| | |
|--|-------|
| 当前中国外交政策の新思路..... | 梁 守徳 |
| 国際関係法の役割..... | 杉山 嘉尚 |
| オーランド島法文化の形成基礎..... | 石渡 利康 |
| State and Society in China..... | 唐 士其 |
| 途上国債務の政治経済学(2) ——対外債務と通貨危機—— | 稲葉 守満 |
| 中国人民公社体制下における農業技術発展 | 羅 歆鎮 |

| | |
|--|------|
| 子の病気治療に関する親の意思と “子の最善の利益”基準 ——イギリス家族法を中心として—— | 東 和敏 |
|--|------|

海外事情

| | |
|-------------------|-------|
| ウーアスン海峡地域の形成..... | 石渡 利康 |
|-------------------|-------|

書 評

| | |
|---|------|
| 浦野起央著『南海諸島国際紛争史』 (刀水書房, 1997年, 1230頁) | 張 植榮 |
|---|------|

第19巻第1号 平成10年7月

〈国際文化編〉

論 文

- Communicating Values in Everyday
Life: Methodology……………西田 司
- Does Learning a Language Mean
Losing a Culture?…………… M. クレイブ
パーソナリティに関する歴史的考察
——2. 条件づけ法による
Eysenck一派の研究——
……………岡本 健
- Feasibility of Content-Based
Instruction in Japanese Foreign
Language Courses: Some Questions
to Ask…………… A. S. ウイリス
- Thoughts on Acoustic Phonetic
Variance…………… F. モラレス
L. ギルナー
- 英語の旧情報と新情報について……………藤井 誠
島崎藤村『夜明け前』：東の間の安寧
……………佐藤三武朗
- 現代社会と第二次世界大戦
——大江健三郎とトーマス・
ピンチョンのパラノイア小説——
……………松岡 直美
- ロシアに於ける日本研究
——日本文学研究を中心に——
……………戸塚 隆子

第19巻第2号 平成10年12月

〈国際関係編〉

論 文

- 韓国における国家権力構造の
変遷に関する研究……………慎 斗範
- 台湾向け防衛兵器に関する米中共同
コミュニケ
——その交渉過程と問題点(上)——
……………宇佐美 滋
- 大統領選挙の一要素としての
アメリカ外交政策……………武田 節男
- 国際金融資本の流動化と通貨危機
……………稲葉 守満
- アジア地域の経済危機と貿易……………小林 通
- J. スチュアートの公債観
——その近代性と評価をめぐって——
……………吉田 克己
- イギリス家族法における子の
至高利益基準の適用範囲……………東 和敏
- 学会報告
- Trans-Pacific Relations……………石渡 利康
- 書 評
- マーク・ホワイト編
『ケネディーニューフロンティア再訪—』
(London: Macmillan, 1998)
……………平田 雅己

第19巻第2号 平成10年12月

〈国際文化編〉

論 文

- 国際交流与中国传统文化……………山本 賢二
- 円地文子とフェミニズム：「二世の縁拾遺」は
外国でいかに読まれたか……………梅本 順子
- Snow Falling on Cedars*
——多文化社会への移行——
……………松岡 直美
- インドネシア・北スマトラにおける
複数医療システム
——近代医療システムと
民間医療システム——
……………吉田 正紀
- ヤスパース「永遠の哲学」再考
——異文化間コミュニケーションへの
哲学的アプローチ——
……………平野 明彦
- Academic Success and Content-Based
Language Instruction…………… A. S. ウイリス
- An Analysis of the Motivational
Tendencies of University Students
of Chinese, Spanish, French, and
English…………… F. モラレス
L. ギルナー
- 漢語複音詞産生的原因……………余 寧
- Developing Reading Skills with Japanese
Students: Component Processes
…………… R. B. マクマーン
- 島崎藤村：『夜明け前』第一部上に見る
悲劇の構想(一)
——黒船の来航——
……………佐藤三武朗
- 19世紀転換期のオリエンタリズム
——*Madam Butterfly*と原作者
John Lutter Longについて——
……………宗形 賢二
- ジャック・タユローの『対話』
……………菅波 和子
- 啄木の短歌におけるオノマトペ
——中国語訳と比較して——
……………呉 川

第19巻第3号 平成11年3月

〈総合編〉

第3回(平成10年度)学部長指定研究

- 「東南アジアの通貨危機と政治不安」
「東南アジアの通貨危機と政治不安」に
ついて……………秋山 正幸
- タイと東南アジアの通貨危機
——危機の構図——
……………稲葉 守満
- 金融危機と経済成長
——インドネシアの事例——
……………岩崎 輝行
- アジア危機の本質と国際資本移動の
政策課題……………円居 総一

| | |
|--|--|
| アジア通貨危機の計量経済学的分析小原 堯 | |
| 東南アジアの経済危機と政治不安 ——スハルト政権崩壊にみる 相互連関——高木 暢之 | |
| 東アジアの通貨危機をめぐる世界銀行・ IMFの動向及び今後の課題福井 博夫 | |
| アジア通貨危機と「複合危機循環」の 世界経済.....前田 利光 | |
| 一般論文 | |
| How can the English Language Teacher Education Program Assist Japanese Students In Becoming Transformative Intellectuals?植山 剛行 | |
| 台湾向け防衛兵器に関する米中共同 コミュニケ ——その交渉過程と問題点(下)——宇佐美 滋 | |
| In Her Place: Writers Define “Hatakeyama Yuko” 梅本 順子 | |
| A Contrastive Acoustic Analysis of the Spanish and Japanese Vowel Sets.....F. モラレス L. ギルナー | |
| 韓国の財閥企業に関する研究.....慎 斗範 | |
| 異文化のコミュニケーション価値と行動西田 司 | |
| ケネディ外交の原動力 ——国家安全保障会議及び 国務省改革を中心に——平田 雅己 | |
| 研究動向 | |
| 「沖縄系アメリカ人研究」の動向.....佐藤三武朗 | |
| 第20巻第1号 平成11年7月 | |
| 〈国際関係論〉 論文 | |
| 克林顿访华与中美关系.....潘 国華 | |
| 情報化と金融の国際競争構造の変化 ——構造変化と我が国金融業 再生への課題——円居 総一 | |
| バルト地域協力とロシアの関心事石渡 利康 | |
| A Study on Social Policy: Toward New Conceptualizations in Historical Perspective慎 斗範 | |
| 日英同盟と黄禍論.....松村 正義 | |
| The Income Tax in the United Kingdom: A History of Income Tax Since William Pitt introduced in 1799大淵 三洋 | |
| 学術講演会要旨 | |
| Japón, la Crisis del Sistema de Empleo | |

| | |
|---|--|
| Vitalicio 大泉 光一 | |
| 面向未来, 用新智慧解决老问题 ——江泽民访日与中日关系——李 揚帆 | |
| Some Characteristics of the Icelandic —and Nordic—Legal System, Compared with Far·Eastern Legal Tradition.....パットル・シーグルズソン | |
| What Happnes with the European Nations in the Process of Europe’s Integration?ヘルムート・ワグナー | |

第20巻第1号 平成11年7月

〈国際文化編〉
論文

| | |
|--|---------------|
| 文化と文化アイデンティティの強さの 個人的価値観に与える影響 ——日米の大学生——西田 司 | W. B. グディカンスト |
| 移住したドゥクン：民族と宗教の 境界を守る民俗治療者 ——インドネシア・北スマトラの 事例から——吉田 正紀 | |
| A Note on Sociocultural Anthropology of Japan and Buddhism: Etic and Emic Perspectives渡辺武一郎 | |
| ラウエルの日本国憲法制定過程における影響濱屋 雅軌 | |
| Japanese Newspaper Journalism on Recent Archeological Discoveries: The Ethno-Historical Narrative Reconsidered.....A. J. レボヴィッツ | |
| Assessment of Motivational Orientations and Observations about the Development of Motivational Modds L. ギルナー F. モラレス | |

| | |
|--|--|
| テキストを比較文学の視点から読む ——藤村とシェイクスピアとの関連——佐藤三武朗 | |
| ルイーゼ・ラベ『作品集』の 「献呈の辞」について.....菅波 和子 | |

第20巻第2号 平成11年12月

〈国際関係編〉
論文

| | |
|---|--|
| 日本内外政治の分析と日中関係青木 一能 | |
| 主要国における社会保障政策に関する比較研究 ——イギリスの場合——慎 斗範 | |
| 国際社会の変容と「性権」概念石渡 利康 | |
| 朱容基与中国政府机构改革.....潘 国華 | |
| 一体化进程下的21世纪：中国与世界 | |

.....李 揚帆
ダニエル・デフォアの貿易論.....小林 通

第20巻第2号 平成11年12月

〈国際文化編〉

論 文

ラフカディオ・ハーンの日本文学の
語り直し作品に見る中国文化の受容
.....梅本 順子

筒井徳二郎一座の欧米巡業旅程
.....田中 徳一

ニーチェの道徳批判について.....平野 明彦
自己の特性と他者の特性についての
認知に対する日米文化の影響
.....守崎 誠一

The Portrayal of Women in Japanese
Animation: A Glimpse into Japanese
Culture from a Foreign Perspective
..... J. R. エマソン

Variations in Motivation
For Second Language Acquisition:
An Investigation of The Positive Effects
of Experience Abroad.....A. ライマン

井上靖におけるヴァレリーの詩論受容
——若き日の文業を視座として——
.....藤沢 全

ルイーズ・ラベの散文物語
『痴愚女神と愛の神の諍い』.....菅波 和子

『唐鏡』における漢籍受容の一考察
——中世日本の歴史叙述と漢文世界——
.....小田切文洋

島崎藤村『夜明け前』：悲劇の予兆
——国学者宮川寛齋の退廃——
.....佐藤三武朗

学術講演要旨

Naturalistic Theories of Religious
Experience: Dewey and Early Buddhism
..... J. J. ホルダー

第20巻第2号 平成11年12月

〈国際交流学科開設記念号〉

国際交流学科の開設にあたって

.....学部長 秋山 正幸

国際交流学科開設の趣旨

論 文

在日外国人をめぐる諸問題.....寺田 篤弘
地域開発型国際協力における国際交流の展望
——インドネシア国における住民参加型
地域開発プロジェクトの事例——
.....金谷 尚知

ジェンダーの視点からの生活再考
.....青木千賀子

文化表象とオリエンタリズム
——Saidから“Madame Butterfly”へ——
.....宗形 賢二

福祉国家の基本理念に関する研究
.....慎 斗範

Pilgrimage at Mount Koya:
Three Dimensional
Mandala in Practice
.....渡辺武一郎

Teaching English Composition:
Topic and Subject
.....安藤 栄子

石川啄木詩歌のロシア語翻訳考
——V. H. Маркова & В. Н. Ерёмин
の翻訳比較を通して——
.....戸塚 隆子

異文化の交流
——共生の条件を探るための
フレームワークとアプローチの
提案——
.....佐藤三武朗

.....吉田 正紀
.....植山 剛行

研究ノート

多様性を持つインターンシップ
プログラムの開発.....植山 剛行
.....佐藤 琢三

国際交流学科授業科目一覧

第20巻第2号 平成11年12月

〈国際ビジネス情報学科開設記念号〉

国際ビジネス情報学科の開設にあたって

.....学部長 秋山 正幸

国際ビジネス情報学科開設の趣旨

論 文

第一次世界大戦下での日本経済の国際化
対応についての一考察.....佐々木久信

多国籍企業における情報技術の展開
——ナレッジマネジメントを中心に——
.....岡本 博之

過剰経済：中国経済の新たな局面
.....羅 歆鎮

日米会社のトップ組織の変遷
——オフィサー制(米)と
執行役員制(日本)の比較
分析を通して——
.....笈 正治

ウィリアム・ペティの戦時財政論
——『賢者には一言をもって足る』を
中心として——
.....吉田 克己

英国のコポレート・ガバナンスと監査制度
.....北川 道男

神戸棧橋会社の成立過程と外国棧橋
——五代友厚の事業を中心に——
.....安彦 正一

消費社会の進展とマーケティング批判
——消費生活様式の展開に
対するマーケティング
批判からの教訓——
.....菅原 昭義

.....菅原 昭義

国際ビジネス情報学科授業科目一覧

第20巻第3号 平成12年3月

〈総合編〉

特集：異文化とコミュニケーション

不安と不確実感と知覚された

コミュニケーションの有効性

.....西田 司

W. B. グディカンスト

多民族地域における民俗医療の交流

——インドネシア・北スマトラの

民俗治療者の事例から——

.....吉田 正紀

Speculations on the Role of Culture in

Group Decision-Making Discussions

.....D. S. ガウラン

A Layered Construction of "Race"

.....J. R. ボールドウィン

M. L. ヘクト

論 文

主要国における社会保障政策に関する比較研究

——アメリカの場合——

.....慎 斗範

The 1998 U. S. Congressional District

Elections and Party Realignment

.....武田 節男

女子教育の社会開発における

広範囲にわたる役割

——国際開発機関の実践を通じて——

.....森 茂子

前田河広一部“The Hangman”発掘

——*The COMING NATION*

所載作品——

.....藤沢 全

Studies on the Rural Development

in a Hilled Rural Area: The Case for

Utilization of the Unused and Waste

Lands in the Dewa Highland Area

.....金谷 尚知

The Horology of Augustine: Time, God,

and Creation from a Western

Perspective.....J. R. エマソン

Interlanguage Development: Phonological

Processes and Complexity

.....L. ギルナー

F. モラレス

中国現代化問題的思索.....李 揚帆

第21巻第1号 平成12年7月

論 文

国際企業提携を通ずる業界標準の戦略的構築

——日本企業の現状分析を中心に——

.....竹田 志郎

売買春行為と女性の性的自己決定権

.....石渡 利康

Some Questions of Language Pedagogy

and Occidentalism

.....Esta Tina OTTMAN

中国大陸におけるマフィアの犯罪の分析

.....李 威

比較人間文化学を試み

——19世紀日欧の「心霊科学」等を

例として——

.....稲垣 直樹

仕事や授業の終わった後の

コミュニケーション行動

——マレーシア・フィリピン・日本——

.....西田 司

Methodological Issues in Comparative

Philosophy and their Influence

on the Study of Japanese Philosophy

.....Daniel J. BISGAARD

Life History of Kukai and Bodily

Enlightenment.....Buichiro WATANABE

セルフ・モニタリングに対する文化の影響

——セルフ・モニタリング理論再考——

.....守崎 誠一

Pronunciation and Liaison

.....Michael Ian CHAPLAN

研究ノート

Theories of the State in the American

Disciplines of Political Science and

Sociology: A Critical Overview

.....Yasuyuki MATSUNAGA

第21巻第2号 平成12年9月

論 文

中国のAPEC政策と

東アジア国際関係への影響.....梁 雲祥

浦野 起央

The Australian System of Higher

Education: Impact of Reforms, Current

Issue and Policy Directions

.....David GAMAGE

異文化間コミュニケーションの

研究手法の問題.....西田 司

The Engaged Intellectual at One Hundred

.....Tom CONNER

日本文化史論の錯覚(1)

——東西日本の社会と民俗——

.....田村 貞雄

国際交流論における新カテゴリ—

「動植物との交流」の創設と位置づけ

.....松村 正義

セルフ・モニタリングに対する文化の影響

——自己呈示行動と相互独立的／

相互協調的自己観——

.....守崎 誠一

Takuboku Ishikawa and Christianity

.....Akira TAKAHASHI

第21巻第3号 平成12年12月

論 文

American Expansionism and Mexico's

Response: Focusing on the Controversy

about Characters of the Mexican-

| | |
|--|------------------|
| American War, 1846-1848 | Takashi USHIJIMA |
| Seasonal Analysis of American Economic Time Series | Takashi OBARA |
| 国際経営学の概念領域に関する諸問題 | 岡本 博之 |
| 在外日系子会社従業員の動機付け ——マレーシア日系企業2社の 調査分析を通じて—— | 笈 正治 |
| A Review of the Sri Lankan System of Higher Education: Developments, Current Issues And Policy Directions | David GAMAGE |
| 国際交流史理論の構築..... | 濱屋 雅軌 |
| イチャリバチョウデーと文化融合 ——ハワイ在住の沖縄出身者を例に—— | 佐藤三武朗 |
| 異文化間コミュニケーション研究 ——その歴史と課題—— | 守崎 誠一 |
| 集団主義は日本人の国民性か? | 櫻坂 英子 |

第21巻第4号 平成13年2月

論 文

| | |
|---|-----------------------|
| 中国の西部開発と民族問題 ——新疆ウイグル自治区を中心にして—— | 山本 賢二 |
| 再考：日本のココム加入とチンコム設立 | 加藤 洋子 |
| The Impact of U. S. Congress on National Security Policy toward East Asia | Setsuo TAKEDA |
| Orientalism & Far-Eastern Thought | Daniel J. BISGAARD |
| Arishima Takeo and Christianity | Akira TAKAHASHI |
| The Religious Practice of a Shingon Monk: Pedagogy and Practice | Buichiro WATANABE |
| コミュニケーションにおける不確実性 | 西田 司 |
| Cross-cultural Influence on the Use of Silence: Young Japanese Women in the United State | Melissa A. WILLIAMSON |
| 社会科学としての異文化間 コミュニケーション研究 ——「日本文化論」の影響とその問題点—— | 守崎 誠一 |
| 日本文化史論の錯覚(2) ——明治維新後における 日本文化の編成替—— | 田村 貞雄 |
| 筒井徳二郎一座海外巡業の レパトリーについて..... | 田中 徳一 |
| ラフカディオ・ハーンの | |

| | |
|---|----------------------------------|
| 伝記執筆を巡る問題に関する一考察(Ⅰ) ——『生涯と書簡』対 『鴉からの手紙』—— | 梅本 順子 |
| The American System of Higher Education: Current Issues, Challenges and Trends | David GAMEGE Takayuki UHEYAMA |
| 19世紀初期ニューヨーク市における カトリックの教育とオートノミー | 永塚 史孝 |
| Antecedentes históricos de la Enseñaza de Idiomas en Japón: el caso del español | Pilar GARCÉS |
| Research in Bilingualism | Andrew REIMANN |
| The Cultural Politics of Multiculturalism in ESL Textbooks in the United States | John E. KATUNICH |
| 研究ノート | |
| ヨーロッパ左派の政治戦略としての ラディカル・デモクラシー..... | 山田 竜作 |
| 学会動向 | |
| Guantei Yusa's <i>Aterui</i> : Saga of a Japanese Geronimo | Adam Jon LEBOWITZ |

第22巻第1号 平成13年7月

論 文

| | |
|--|--|
| カリニングラード再考..... | 石渡 利康 |
| 全球化と単一思想的危険..... | 許 振洲 |
| ケネディ政権のベトナム介入と中国の対応 | 許 奕雷 |
| The Econometric Analysis of Korean GDP | Takashi OBARA |
| School-based Governance: An Australian Experience 1974-2000 | David GAMAGE |
| A Layered Perspective on Prejudice | Michael HECHT Jennifer JONES-CORLEY |
| Methodological Issues in Intercultural Communication Studies | Tsukasa NISHIDA |
| 国際結婚にみる異文化の交流と実践(1) ——インドネシアに嫁いだ 日本女性の事例から—— | 吉田 正紀 |
| 自己・他者・状況に対する意識への 日米文化の影響..... | 守崎 誠一 |
| Shingon Religious Practices and Bodily Enlightenment | Buichiro WATANABE |
| The Information Age and Ethics | Akira TAKAHASHI |
| ラフカディオ・ハーンの伝記執筆をめぐる 問題に関する一考察(Ⅱ) ——『ラフカディオ・ハーンについて』の | |

出版を巡って——
梅本 順子
 百年前、張魯眼中的日本.....王 長发
 岩倉使節団と情報技術
 ——アメリカにおける電信と新聞報道——
佐藤 聡彦
 Japanese versus English:
 Interference When Teaching
 Past Tense.....Michael Ian CHAPLAN
研究ノート
 投票価値の平等とゲリマンダー
 ——カリフォルニア州の事例研究——
葉山 明
研究資料
 中国科学院・中国工程院院士とマスメディア
山本 賢二

第22巻第2号 平成13年9月

論 文

米国における内部統制報告書.....北川 道男
 British Reforms in School Management:
 A Decade of Experience with LMS
 David GAMAGE
 グローバリゼーションと世界倫理の可能性
 ——ヤスパースの「世界哲学」の
 理念を手がかりにして——
平野 明彦
 Raphael Koeber and Christianity:
 Christian Orthodox and Koeber's
 Understanding Akira TAKAHASHI
 Murakami Haruki's Underground:
 The Non-fiction Dimension
Naomi MATSUOKA
 中国の核兵器開発
 ——初の原爆実験までの開発過程——
許 奕雷

第22巻第3号 平成13年12月

論 文

On Problems of Identity
 among Cultures and Civilizations
Daniel J. BISGAARD
 内部統制報告書を巡る諸問題
 D. R. Carmichaelの
 疑問は払拭されたか
北川 道男
 Anthropology of the Body
 and Shingon Bodily Enlightenment
Buichiro WATANABE
 人種とセクシャリテイの表象
 ——Miss Saigon の「アジア性」再考——
宗形 賢二
 自己と身体
 ビンスワンガーの「夢と実存」と
 ハイデガー
 ——現象学・比較精神病理学研究(1)——
村上 靖彦

近代中国人女性の見た
 日本・朝鮮・ロシア・中国
 ——銭単士厘『癸卯旅行記』を通して——
谷川 栄子
 Influence of the Culture and Globalization
 on Teacher Preparation Programs
 in the United States and Japan:
 Phase I Mary Ann C. GAINES
 Takeyuki UEYAMA
 Robert L. MARSHALL
 Fumitaka NAGATSUKA
 中国广西“语言岛”分布及其形成的历史文化
 背景.....谢 建猷
 Returning The Last Kaiser from Exile
 Andrew REIMANN
研究ノート
 内生的経済成長理論の現在.....清水 隆雄

第22巻第4号 平成14年2月

論 文

National Missile Defense (NMD) Policy
 in the U. S. Congress
 Setsuo TAKEDA
 米国の世論外交
 ——ツインメルマン電報事件——
松村 正義
 日本社会の国際化.....濱屋 雅軌
 The Concept of Islamic Law
Fathima Azmiah BARY
 情報化と企業・産業組織の構造変化
 ——グローバルスタンダード化の
 本質と政策課題——
円居 総一
 中国経済におけるパラドクス.....羅 歆鎮
 英国の内部統制とリスク・マネージメント
 ——Nigel Turnbull報告書の検討——
北川 道男
 Spatial Production for Tourism
 in the British Context
Meiko MURAYAMA
 アメリカのニュース映画に見る
 筒井徳二郎一座.....田中 徳一
 Sin and Punishment Expressed in
 Nathaniel Hawthorne's
 “The Scarlet Letter”
 Akira TAKAHASHI
 『癸卯旅行記』に見られる銭単士厘の女性観
谷川 栄子
 Are These Really University Students?
 Exploring Culture Clash
 in Japanese Universities
Michael MATHIS
 Meeting the Challenges of
 Teaching EFL in Japan
 Mihoko Takahashi MATHIS

第23巻第1号 平成14年7月

論文

- 中国の反テロリズムと
「東トルキスタン」分離独立運動
.....山本 賢二
- 第二次世界大戦・冷戦の遺産と
21世紀の日米関係研究
——日米の非対称性を中心に——
.....加藤 洋子
- 日欧外交関係の展開
——冷戦終結までの
経済摩擦を中心に——
.....三露 久男
- ケネディ政権と中国の核兵器開発
.....許 奕雷
- UNESCO, 国際NGOs相互の
パーセプション.....植山 剛行
- 株式投資ガイダンスシステム:
INSIGHTSによるビジネス情報教育の試み
.....豊川 和治
- 日本人, タイ人, マレーシア人の
組織行動意欲の比較.....筑 正治
- 英国人の異文化理解
——オールコックの富士登山と
熱海温泉訪問の旅をめぐる——
.....梅本 順子
- Dazai Osamu and Christianity
..... Akira TAKAHASHI
- The Status of Women in the
Pre-Islamic Period (*Jahiliya*)
.....Fathima Azmiah BARY
- 精神病理学の終わりと未来
——脆弱性と治癒の現象学へ向けての
研究計画——.....村上 靖彦
- 温室効果ガスの統計学的分析
.....酒井孝次郎
安彦 正一
小原 堯

第23巻第2号 平成14年10月

論文

- 日本の対中国ODAの規模と構造
.....羅 歆鎮
- Comparative Thoughts on Indigenous Rights between
Japan, Australia and Canada 玉井 昇
- 2000年メキシコ連邦選挙における選挙監視活動
.....渡辺 暁
- フランス・ベイコンの財政経済思想(1)
——『随筆集』を中心に——
.....吉田 克己
- 製薬企業の情報化戦略に関する一考察
.....楠本 眞司
- コミュニケーション行動と内集団
.....西田 司
- 外傷的な出来事の現象学的分析
.....村上 靖彦
- Bilingual First Language Acquisition Pros, Cons and

Processes

- Andrew REIMANN
《戦国楚竹書・孔子論語》疑難字隸讀舉要(上)
.....周 同科

研究ノート

- 中国国務院新聞弁公室論文
『東トルキスタン』テロ勢力は罪の責任を
逃れられない」の新聞報道について
.....山本 賢二

第23巻第3号 平成14年12月

論文

- 冷戦の終焉と米国の移民法:
輸出管理法との対比において
.....加藤 洋子
- 日露戦争後の高橋是清とヤコブ・シフ
.....松村 正義
- ケネディ政権と台湾の大陸反攻
.....許 奕雷
- 選挙監視と民主化
.....渡辺 暁
- ジェームズ・スチュアートの貿易論
.....小林 通
- アジア通貨危機以降の対ASEAN直接投資の動向
.....岡本 博之
- アメリカ就業者数の統計学的分析
.....小原 堯
- 21世紀の社会におけるジェンダーとエスニシティ
.....青木千賀子
- 筒井徳二郎一座の米国への招聘とその経緯
.....田中 徳一
- ラフカディオ・ハーンと『新アタラ』
——宣教師ルーケットとの交流を中心に——
.....梅本 順子
- 外傷体験における身体
——フッサルとメヌ・ド・ピラン
を導きとして——
.....村上 靖彦

特別講演

- The State of the Union
.....Peter NORMAN

第23巻第4号 平成15年2月

論文

- 江戸時代における伊豆国の国際関係
.....濱屋 雅軌
- 後期資本主義・国家・市民社会
——ジョン・キーンの市民社会論——
.....山田 竜作
- The Rights and Status of Women in Islamic Law: Mar-
riage, Divorce and Inheritance in Several Arab
Countries
.....Fathima Azmiah BARY
- フランス・ベイコンの財政経済思想(2)
——『随筆集』を中心に——
.....吉田 克己
- A Note on Application of Just-in-Time Inventory Con-

| | |
|---|--|
| trol (JIT) Method to Service Management Hirokazu TOMA | 国際結婚と異文化の交流 ——在日インドネシア人女性とその家族の事例から—— 吉田 正紀 |
| Uchiyama Kanzo and Ralph Emerson Akira TAKAHASHI | (ナント勅令)の歴史的意義 菅波 和子 |
| Combating Apathy Among Japanese University Students Michael MATHIS Mihoko Takahashi MATHIS | サルバドール・ダリと腐敗 ——その傾倒への背景—— 内田千重子 |
| Motivating Students: The Media Topic Discussion Todd RUCYNSKI | Assessing Second Language Speech Patterns through Interviews: Strategic Competence in Discourse John PELOGHITIS |
| An EFL Learner Needs Analysis for Technical Trainers Working for a Japanese Automobile Manufacturing Company Jason HOLLOWELL | Practical Content Based Teaching Authentic Materials/Authentic Responses: A model for using Canadian Content in the Classroom Andrew REIMANN |
| 研究ノート 啓発活動とは何か ——日本の選挙における選挙管理委員会の活動についての考察—— 葉山 明 | |

第24巻第1号 平成15年7月

| | |
|--|---|
| 論文 The Rights and Status of Women in Islamic Law: Marriage and Divorce in Several Islamic and Non-Islamic Countries in Asia Fathima Azmiah BARY | 農業労働生産性、農民収入と内陸部農村地域経済発展 ——中国山西省県データによる 実証分析—— 陳 文挙 |
| 自己開示と不確実性減少理論の再考 西田 司 | 近代日本の文学 思想に影響を与えたキリスト教 高橋 章 |
| 「ええじゃないか」序曲 ——長州征伐高札の撤去と祝祭の高揚—— 田村 貞雄 | Content Based Language Teaching: Observations on Theory and Practice Jason HOLLOWELL |
| Form Preference of the Genitive: A Grammar Usage Study | |

| | |
|-----------------------|--|
| John PELOGHITIS | 汉语方言中[r]音的发觉及端(知)组声母与儿化音源考 凌 德祥 |
|-----------------------|--|

第24巻第2号 平成15年10月

| | |
|--|---|
| 論文 Exchange Rate Interaction: Yen and Won Takashi OBARA | White Anglo-Saxon Mythology and Intersection of Race, Class, and Gender in the <i>Titanic</i> Saburo SATO Isao TAKEI Jon P. ALSTON |
| エドマンド・ブランデンとラフカディオ・ハーン ——ブランデンのハーン観を中心に—— 梅本 順子 | Educating Immigrant Children: Learning from America's Mistakes Michael MATHIS |
| Current Debates in Second Language Acquisition Andrew REIMANN | 研究ノート OECD環境報告と現代日本の環境問題 ——生活騒音をめぐる一論争の考察—— 葉山 明 |

第24巻第3号 平成15年12月

| | |
|--|---|
| 論文 发展中印关系的障碍和解决的可能性 张 敏 秋 | India -Japan Relations An Agenda for Convergence Rahul TRIPATHI |
| ニクソン政権の在韓米軍撤退政策 ——韓国における「ニクソン・ドクトリン」の適用を事例として—— 鄭 勳 燮 | The Rights and Status of Women in Several Industrialised/Western Countries Fathima Azmiah BARY |
| ITと企業の組織形態 岡本 博之 | ITの進化と多国籍企業の競争行動の変質 ——日本企業の標準化志向の 検出を通して—— 竹田 志郎 |
| マーケティングにおける顧客との相互信頼関係に関する認識上の乖離 ——6社の聴取調査の分析結果—— 菅原 昭義 | 市民社会の変化とe-ポリティクス ——韓国におけるインターネットと 政治の変化—— 鄭 俊 坤 |
| 祝祭とマス・ヒステリア ——山口吉一・太田明 『阿波え、ぢゃないか』考—— | |

.....田 村 貞 雄

第24巻第4号 平成16年2月

論 文

中印经贸关系

— 潜能与制约 —

.....张 敏 秋

知的所有権をめぐる国際紛争

— 新たな情報時代がもたらす光と影 —

.....宇 佐 美 滋

アジアの砂漠化・土壌流出と国際協力に
関する研究

— 中国新疆ウイグル、タイ国、マレーシア国
における事例からの考察 —

.....金 谷 尚 知

東アジアにおけるエミリー＝ハーンの
国際交流(1)

— 日本滞在から
第二次上海事変まで —

.....濱 屋 雅 軌

大豊作・大政奉還と御札降りの発生

— 「ええじゃないか」第3段階 —

.....田 村 貞 雄

レヴィナスと心的外傷

— 情動性の現象学のための草案 —

.....村 上 靖 彦

语感训练与第二语言教学法

.....凌 德 祥

第25巻第1号 平成16年7月

論 文

トリナクリア(Trinacria)とトリスキール(Triskele)

— シンボルの域際関係に関する断章 —

.....石 渡 利 康

民主主義、経済成長、不平等

— 反民主主義的経済成長論の
論理とその帰結 —

.....清 水 隆 雄

対人コミュニケーションの回避

— 東アジアの大学生を中心に —

.....西 田 司

エドモンド・ブランデンの日本観：

ラフカディオ・ハーンと比較して

.....梅 本 順 子

自閉症者のシェルターと安心感の起源としての間身体性

.....村 上 靖 彦

東アジアにおけるエミリー＝ハーン国際交流(2)

— 第二次上海事変から
1940年の重慶空襲まで —

.....濱 屋 雅 軌

「ええじゃないか」のクライマックス(大坂以西)

— 大政奉還・王政復古と民衆の動向 —

.....田 村 貞 雄

The Misconceptions of Muslim Women by the West

.....Fathima Azmiah BARY

Predicted and Observed Difficulties of a Japanese Learner
of North American English Pronunciation

..... George HARRISON
Teachers Learning From Each Other in Japan Through
Jugyou Kenkyu. An Alternative Approach to Teachers'
Professional Development

.....Mohammad Reza Sarkar ARANI

研究ノート

「伊豆学」の確立をめざして

— 伊豆地域の地誌・民俗誌の事例研究 —

.....加 藤 雅 功

高 山 茂

吉 田 正 紀

日本における中国語能力検定試験

— 大学における検定試験対策講座の
実施に向けて —

.....谷 川 栄 子

研究資料

スウェーデンの君主制問題

.....石 渡 利 康

第25巻第2号 平成16年9月

論 文

韓米同盟50年の考察

— 在韓米軍の再調整と
韓米同盟の未来 —

.....鄭 勳 勉

サーベンズ・オクスリー法(SO法)の分析と展望

— エンロン以降の
アカウンタビリティ改革 —

.....北 川 道 男

ヨーロッパ文化の基層

— 黒いマドンナ —

.....石 渡 利 康

The Understanding of Nitobe Inazo's "Bushido"

..... Akira TAKAHASHI

A Comparison of the Rights and Status of Women in Islamic and Western Societies

.....Fathima Azmiah BARY

駿河・伊豆・相模における廃藩置県

— とくに葦山県・足柄県 —

.....田 村 貞 雄

効果的な英語教育プログラムを目指して

— カリキュラム・デザインと
ニーズ分析 —

.....菊 地 恵 太

第25巻第3号 平成16年12月

論 文

The "Human Rights Issue" in China's Diplomacy

..... Yanhua LUO

経済発展のための地域統合

.....小 林 通

親密度の高い人間関係における

コミュニケーション行動

— 中国の社会人を中心に —

.....西 田 司

心象風景としてのリリス(Lilith)

—— イメージの域際変容 ——
石 渡 利 康
 Kazuo Ishiguro and Shanghai: Orphans in the Foreign
 Enclave
 Naomi MATSUOKA
 地理教育への文化的アプローチ
 —— 日本の小学校国際理解教育の
 事例分析 ——
 サルカール アラニ・モハメッド レザ
 Needs analysis for a writing course for
 graduate international students
 Keita KIKUCHI

第25巻第4号 平成17年2月

論 文

The American President and Congress in Making Mis-
 sile Defense Policy
 Setsuo TAKEDA
 バブル経済社会の特質について
 牧 澤 司 朗
 変貌するアメリカの監査委員会
 北 川 道 男
 中・美・日企业经营理念比較
 笈 正 治
 Problems of Culture and Civilization in the Age of
 Globalization
 Akira TAKAHASHI
 Daniel J. BISGAARD
 Buichiro WATANABE
 Exploring Learner Meta-Cultural Awareness
 Andrew REIMANN
 井上靖の『壺』と老舎の悲劇
 藤 澤 全
 「ええじゃないか」のクライマックス(大坂周辺・北陸)
 —— 大政奉還・王政復古と民衆の動向 ——
 田 村 貞 雄
 The Cultural Influences on Pre-Service Teacher Educa-
 tion Programs at Four-Year Colleges/ Universities in
 Japan
 Takeyuki UYAMA
 Fumitaka NAGATSUKA
 The Role of Identity for Interpreters
 Jason HOLLOWELL
 近代に見る実業教育の導入から展開へ
 —— 二つの事例を通して ——
 松 井 洋 子
 安 彦 正 一
 Eliciting dialectical inquiry through examples of
 self-critique and use of irony
 George M. HARRISON
 Forbidden Japanese: A Study of English-Only
 Classrooms
 Jean-Paul DuQuette

第26巻第1号 平成17年7月

論 文

中国人民元問題試論

—— 実物経済的観点から ——
 清 水 隆 雄
 「箱根」と外国人(第1部)
 A.H.バウマン
 グローバル化時代の異文化結婚:
 インドネシアに嫁いだ若き日本人女性
 吉 田 正 紀
 IBMのパソコン事業売却に見られるIT産業の事業モデ
 ルの変貌
 千 谷 基 雄
 Goal Setting Theories: Implications
 from a study in a university in Korea
 Keita KIKUCHI and Kang Min Yi

中日関係
 从象征性国家利益对立走向实质性国家利益对立
 许 奕 雷
 個人向け銀行インターネットバンキング・サービス
 —— アジア諸国間比較 ——
 岩 崎 輝 行
 「桐野利秋談話」(一名「桐陰仙譚」)について
 田 村 貞 雄

研究ノート

ウクライナ大統領選挙に対する選挙監視
 黒 川 祐 次
 グローバル化時代の大学教育
 —— 敵対的買収劇を念頭に ——
 安 井 昭
 佐 藤 三武朗

第26巻第2号 平成17年9月

論 文

神田孝平の経済学と財政学への貢献
 大 淵 三 洋
 欧州系石油企業の経営戦略
 岡 本 博 之
 東アジアFTAの計量分析
 —— マクロ経済効果 ——
 清 水 隆 雄
 中国の貧困削減政策と制度的障害
 陳 文 挙
 不確実性減少における否定的傾向
 西 田 司
 「箱根」と外国人(第2部)
 A. H. バウマン
 ドイツにおける「異文化間哲学」の
 基本理念と課題
 平 野 明 彦
 共同体倫理の創設と視線
 アクタイオン神話をめぐる
 現象学的人間学
 村 上 靖 彦
 Toward a Task-Based Approach:
 Overview of Syllabus Types in
 Language Teaching
 Keita KIKUCHI

研究ノート

筒井徳二郎一座欧州巡業の経路と日程

——バルト沿岸・東欧諸国を
中心として
……………田 中 徳 一

第26巻第3号 平成17年12月

論 文

「冷戦」の終焉？ 米国の輸出管理に
見られる変化と連続性
……………加 藤 洋 子

政教分離の研究：薪能における市長の
玉串奉奠等への関与をめぐる
……………葉 山 明

石井＝ランシング協定締結前における
外務省の海外情報(1)
——1917年1月から3月まで——
……………濱 屋 雅 軌

少子化と子育て支援政策に関する国際比較
……………青 木 千 賀 子

ラフカディオ・ハーンと
エドガー・アラン・ポー：
ポーの作品の受容を中心にして
……………梅 本 順 子

認識の発見
ソポクレス『オイディプス王』における
フロネシスとグノメ
共同体倫理の現象学的人間学
……………村 上 靖 彦

Interaction-based Approach and
Instructed Language Learning
……………Keita KIKUCHI

Teaching Comparative Religion
through EFL
……………Jean-Paul DuQuette

USING PROFESSIONAL DEVELOPMENT TO IN-
CREASE TEACHERS' CONTENT KNOWL-
EDGE OF
MATHEMATICS
……………MaryAnn GAINES

第26巻第4号 平成18年3月

ユーモアと人生
——石渡利康教授の定年に想う——
……………佐 藤 三 武 朗

論 文

研究の偏流
——北欧協力、価値ニヒリズム、セクソロジー、北
欧国際関係、プロレスリング、バルト地域、北
極圏地域、ジェンダー・イシュー、シチリア、
欧州文化の基層——
……………石 渡 利 康

ジョン・キーンにおける
「Civil Society」と「Uncivil Society」(1)
——グローバルな市民社会と
暴力の問題をめぐる——
……………山 田 竜 作

新しい日米欧三極構造の建設へ向けて
——ポスト・イラク戦争の教訓——

……………三 露 久 男
五代友厚と東京馬車鉄道会社成立の一考察
……………安 彦 正 一

CEO及びCFOの宣誓書
……………北 川 道 男

公共トラックターミナルにおける
廃棄物パレット
Study of Disposing Pallet in
the Public Truck Terminal
……………若 林 敬 造

中国企業の経営思想
……………笈 正 治

井上靖の『おろしや国酔夢譚』：
異文化理解と語学教育を中心に
……………梅 本 順 子

The Significance of Water in
Arabian Culture—the Phenomena and Manifes-
tations of Water through *Qurān* and *Hadith*
……………Masahiro TSUBAKI

各地の祝祭の伝統と「ええじゃないか」
……………田 村 貞 雄

『エッセー』への
マリ・ドゥ・グルネーの〈序文〉
——1595年と1635年の〈序文〉の比較——
……………菅 波 和 子

井上靖の詩編のスカイライン
——映画LA ROUE他との
関わりの中で——
……………藤 澤 全

ダリのロルカ時代に関する一考察
——書簡を中心に——
……………内 田 千 重 子

The Structure of Alain Resnais' Film
La Vie Est un Roman Part 1
……………Michael Ian CHAPLAN

効果的な外国語学習に向けて：
自身の学習体験に基づく考察
……………稲 子 あゆみ

Using Tasks in Instructed Language
Learning: Exploring Task-Based Language
Teaching
……………Keita KIKUCHI

研究ノート

カトリック教会とアメリカ政治社会
……………葉 山 明

研究資料

日本人大学生の異文化の対人関係
——同性間の親密度による検討——
……………内 藤 伊 都 子

研究報告

A Study of Learner Output in
Jigsaw and Role Play Tasks
……………Gregory FRIEDMAN

石渡利康博士略歴及び主たる業績

……………石 渡 利 康

第27巻第1号 平成18年7月

論 文

- 国際化社会の内外人平等と国民主権
— 平成17年最高裁大法廷「東京都
管理職試験国籍条項」合憲判決 —
……………杉山 嘉尚
- The Kennedy Administration and the Sino-Indian
Border War: A Study on the U.S. Government
Documents
……………Yilei XU
- 白い女神の目覚め
……………石渡 利康
- 「箱根」と外国人(第3部)
……………A.H. バウマン
- 詩人たちの満洲
— 北原白秋と室生犀星の満洲体験 —
……………安元 隆子
- 「ええじゃないか」の東日本への展開(1)
— 東海・関東地方 —
……………田村 貞雄
- 同性の二者間における非言語行動の
返報性とその総量
— 親密度と文化の影響 —
……………内藤 伊都子
- The Structure of Alain Resnais' film
La Vie Est un Roman Part 2
……………Michael Ian CHAPLAN
- Virtual Schools: New Visions of
Education in a Digital Environment
……………MaryAnn C. GAINES
- English education in
Japanese high schools: Contrasts with other
countries in Asia
……………Keita KIKUCHI
- 絵画史料をもとにした歴史評価の問題点
— 田中英道著『支倉六右衛門と西欧使節』
に対する批判 —
……………大泉 光一
- 参加型開発における国際協力,
国際交流の研究
— 地球型社会における環境復元に
NGO/NPOが担う役割 —
……………金谷 尚知
- Linguistics In British Columbia
……………Allan A EVANS
- 研究報告
- From the residential classroom to the virtual class-
room: Results from a survey of Internet English
students at Nihon University's College of Interna-
tional Relations
……………Dean D. SCHIMPF
- 書 評
- 林語堂『支那に於ける言論の発達』再読
……………山本 賢二

第27巻第2号 平成18年9月

論 文

- 国家による規制と人の移動
— スペイン領アメリカと
英領アメリカの場合 —
……………加藤 洋子
- U.S. Security Policy: Focusing
on Analysis of Missile Defense
Policymaking Process
……………Setsuo TAKEDA
- 石油企業の経営戦略と国際関係
— オイルメジャーと
政府政策との対立と協調 —
……………岡本 博之
- 中国山東省李営鎮苗木生産経営研究
……………陳 文 拳
- 石井=ランシング協定締結前における
外務省の海外情報(2)
— 1917年3月から —
……………濱屋 雅軌
- 対人コミュニケーション行動の特徴
……………西田 司
- On the Persistence of a Myth From
Ancient India to Modern Indonesia
……………Daniel J. BISGAARD
- 「箱根」と外国人(第4部)
— 保養地芦ノ湖:
釣り・水泳・漕艇 —
……………A. H. バウマン
- ラビリンスのシンボリズム
— その中央存在 —
……………石渡 利康
- 「ええじゃないか」の東日本への展開(2)
— 甲信地方 —
……………田村 貞雄
- 静岡県の人観光客誘致戦略
……………許 奕 雷
- Schismogenesis:
Vicious Circles in Intercultural
Misunderstanding
……………Jean-Paul Duquette
- Higher Education in the Ancient World
and Its Impact on the Medieval
Universities
……………David GAMAGE
- REINVENTING PREPARATION OF
EDUCATIONAL LEADERS:
A PARTICIPANT PERSPECTIVE
……………MaryAnn C. GAINES
- 学会動向
- オーランド・プロセス
……………大西 富士夫
- 第27巻第3号 平成18年12月
- 論 文
- 統合監査のフレームワーク
— SOAを巡る2つの統合監査概念 —

| | |
|--|---|
|北 川 道 男 | 多国籍企業の内部化理論 再考 — Ethierモデルを中心として — |
|清 水 隆 雄 | 朝鮮戦争に関する一考察 — 米国の戦争制限政策の 決定過程を中心に — |
|鄭 勳 燮 | IED en la industria del automóvil en México — El caso de las empresas japonesas — |
|Yoichi OIZUMI | マリー・ストーブスと日本文化 |
|梅 本 順 子 | グディカンストのコミュニケーションモデル |
|西 田 司 | マイノリティの人種表象 — アメリカにおける異人種間混交と 映画表象をめぐって — |
|宗 形 賢 二 | アーレントとヤスパース — 『人間の条件』における「活動」の 領域を手がかりにして — |
|平 野 明 彦 | 日本における洋紙産業の定着と お雇い外国人の貢献 |
|安 彦 正 一松 井 洋 子永 塚 史 孝 | The Importance of Water in the Perspective of Islam The Cultural Value through the Symbol of Water |
|Masahiro TSUBAKI | 「ええじゃないか」の東西南北 |
|田 村 貞 雄 | Attitudes Towards ALTs |
|Jean-Paul Duquette | MEDIEVAL UNIVERSITIES AND THEIR IMPACT ON MODERN UNIVERSITIES |
|David GAMAGE | THE NO CHILD LEFT BEHIND (NCLB) AND INDIVIDUALS WITH DISABILITIES EDUCATION IMPROVEMENT ACT of 2004 (IDEIA) |
|MaryAnn C. GAINES | 学習ストラテジートレーニング としての教室活動 ニュース教材を使った クラスルームリサーチ |
|稲 子 あゆみ | Applying the Theory of Cultural Intelligence to Foreign Language Teaching: Some Practicalities and Challenges |
|George M. HARRISON | 黒いサラ |

| | |
|--|---|
|石 渡 利 康 | — ロマの守護女神 — |
|佐 藤 三武朗 | 研究ノート 世界遺産の保護と保全に見る利他主義 |
|Fujio OHNISHI | 学会動向 The Autonomy of Åland and the Six Guarantees of the League of Nations |
|Gregory L. FRIEDMAN | 研究報告 The Effect of Task Type Upon Fluency, Accuracy, and Complexity of Output |
|杉 山 嘉 尚 | 第27巻第4号 平成19年2月 論 文 国際交流関係の法制 — その目的と内容 — |
|葉 山 明 | 政教分離と神奈川県伊勢原市： 観光協会による宗教団体への 支出をめぐって |
|吉 田 克 己北 川 道 男大 淵 三 洋 | 日本経済のグローバル化と その方向性について — 国際観光・国際会計・ 国際課税の視点から — |
|Yoichi OIZUMI | Transición de la Economía Planificada a la Economía de Mercado en China — El éxito de la transición Progresiva China — |
|大 西 富 士 夫 | フィンマルク法における自然共生 |
|Jean-Paul Duquette | Teaching International Politics Through EFL |
|西 田 司 | 不安不確実感制御理論 |
|呉 川 | 『源氏物語』のオノマトペに関する 日中対照言語研究(上) |
|四之宮 玲 子 | アメリカにおける チャイルド・マルトリートメントの 現状と研究の方向性 |
|石 渡 利 康 | シーラ・ナ・ギグ(Síla-na-Géige) — ヴァルヴァ・ ディスプレイの象徴性 — |
|内 田 千 重 子 | ロールカのダリ時代に関する一考察 |
|内 田 千 重 子 | 障害のある人との 相互作用に影響する社会的環境 |

— 日本における障害のある人の
きょうだいに関する
文献研究より —
……………河村 真千子
御札降りの仕掛け人たち
— 「ええじゃないか」の真相 —
……………田村 貞雄
GOVERNANCE AND
ADMINISTRATION OF
AUSTRALIAN UNIVERSITIES
…………… David GAMAGE
『本朝神社考』と『神社考詳節』
……………矢崎 浩之

第28巻第1号 平成19年7月

論 文

天野為之の経済学に関する若干の考察
— 『経済原論』を中心にして —
……………大淵 三洋
Diffusion of Exchange Rate Fluctuation
…………… Takashi OBARA
開発途上国多国籍企業論
— 海外直接投資決定因としての
spillover効果 —
……………清水 隆雄
Japan's Civil War and American
Diplomatic Activities in 1868
……………Masaki HAMAYA
How a long established branded
product can be successfully
revitalized for a new sales growth
without changing the basic product
attributes.
— Analysis of a marketing success
of Polaroid camera —
……………Keinosuke KOSEKI
「B7バルト海島嶼ネットワーク」の形成：
島嶼域際関係の強化
……………大西 富士夫
『源氏物語』のオノマトベに関する
日中対照言語研究(下)
……………呉 川
Religion and the American
National Character
……………Daniel J. BISGAARD
室生犀星『大陸の琴』論
……………安元 隆子
The Study of Ethnicity
and Urban Food Behavior:
A Case Study of the Minangkabau
of Medan, Indonesia.
……………Masanori YOSHIDA
Koji AKINO
古典的西部劇『シェーン』に見る
ロマンチック義侠心とその周辺
— ウェスタンオロロジー文化論 —
……………石渡 利康
幕末江戸における御用盗の横行と御札降り

……………田村 貞雄
宮城春意の神道思想
……………矢崎 浩之
THE BRITISH UNIVERSITY
SYSTEM: SECOND WORLD WAR
TO THE 21ST CENTURY
…………… David GAMAGE
Learner Motivation in
Second Language Acquisition
…………… Allan A. EVANS
「箱根」と外国人(第5部)
— 箱根地域における
交通手段の進化 —
…………… A. H. バウマン

第28巻第2号 平成19年9月

論 文

田口卯吉の経済思想と財政思想
— イギリス正統派経済学との関係を
中心にして —
……………大淵 三洋
『破戒』：ディアスポラ文学の先駆的役割
……………佐藤 三武朗
不確実性減少における内集団の行動
……………西田 司
古典的西部劇「ワーロック」における
自滅的義侠心と精神ホモ構造
— ウェスタンオロロジー文化論 —
……………石渡 利康
大学生の友人関係
— 親密度による検討 —
……………内藤 伊都子
研究ノート
Australia and Nuclear Power:
the Jekyll and Hyde nature of
Australia's nuclear ambitions
…………… Gregory O'DOWD
研究資料
史料翻刻 宮城春意著『神道大意演義』
……………矢崎 浩之

第28巻第3号 平成19年12月

論 文

福澤諭吉の経済思想と財政思想に関する
若干の考察(1)
……………大淵 三洋
ポスト・ポスト冷戦期は始まったのか？
— 米露関係とプーチンの戦略 —
……………石郷岡 建
ローバリゼーションと国際関係の政治経済
(そのI)
……………前田 利光
若き日の田村直臣
— 築地での体験とアメリカ留学 —
……………梅本 順子
北欧古代の神々の夜明け
— アイスランドのアウトトルー

- (Ásatrú) —
石 渡 利 康
 「ええじゃないか」の諸段階と伝播地図
田 村 貞 雄
 米国の利他的個人主義の発展とその教育
 — エマソンの利他的個人主義から
 デューイのプラグマティズムへ —
岡 田 善 明

研究ノート

- Lafcadio Hearn's Views on the rise
 of nationalism in Meiji Japan and
 their relevance today.
Gregory V. G. O'DOWD

研究報告

- Learner-Created Online Lexical Databases
 Gregory L. FRIEDMAN

第28巻第4号 平成20年2月

論 文

- 世界経済の構造変化と広域共同体の形成
 — EU統合への内的発展と世界経済の
 構造変化の中での今後の発展、
 そのアジア共同体化への政策示唆 —
円 居 総 一

- 福澤諭吉の経済思想と財政思想に関する
 若干の考察(2)
大 淵 三 洋

- American Problems over the Execution
 of the Treaty of Amity and Commerce
 between the United States and Japan
 -- The First Half of 1860s
Masaki HAMAYA

- 中国都市貧困の拡大と対策
陳 文 挙

- Common challenges and converging
 Approaches: security cooperation
 between China and EU
 Baoyun YANG

- 北朝鮮の核問題と韓日協力
権 萬 學

- ロシアの北極点国旗設置に対する
 ノルウェー外交の動向
大 西 富士夫

- グローバリゼーションと国際関係の政治経済
 (そのII)
前 田 利 光

- The Study of Nitobe Inazo and
 Uchimura Kanzo
 Akira TAKAHASHI

- 筒井徳二郎一座のロサンゼルス公演について
田 中 徳 一

- 「ルイ・ランジャール」と
 『最初の人間』の間の往復運動
 — アルベール・カミュの
 円環的行程と母親への告白 —
高 塚 浩由樹

- 「箱根」と外国人(第6部)
 — 旅行者, 人足, そして女性旅行者 —

- A. H. バウマン
 古典的西部劇『荒野の決闘』に見る
 友情的義侠心とその周辺
 — ウェスタンオロジー文化論 —
石 渡 利 康

- 「ええじゃないか」の東進
 — 遠江・駿河・伊豆 —
田 村 貞 雄

- 現代の大学生の英語学習時間と英語学習方法
上 原 義 正

- The Research Issues of Student Services
 in Higher Education in Japan
Takeyuki UEYAMA

第29巻第1号 平成20年7月

論 文

- 津田真道の経済学に関する若干の考察
大 淵 三 洋

- 国際石油企業の戦略経営
岡 本 博 之
 ブッシュ政権の在韓米軍撤退政策
鄭 勳 燮

- ラトヴィアの『マーラは少女に命を与えた』
 (Davāja Māriņa meitiņai mūžiņai)と
 ロシアの『百万本のバラ』(Million alih roz)
 — 歌詞とメロディーの
 音楽学的国際変容に関する試論 —
石 渡 利 康

- 自然観の変遷とエコクリティシズム
 — ロマン主義の自然観再生の意義 —
岡 田 善 明

- 海外直接投資と経済成長
 — 実証研究における方法の問題 —
清 水 隆 雄

- Using Writing Assessments
 to Improve Second Language Writing
 Jason MYRICK

- 大量破壊兵器拡散阻止の課題：
 反テロと不拡散の結合がもたらすもの
六 辻 彰 二

研究ノート

- バルト大学の活動展開
大 西 富士夫

- Creating an Education Culture of
 Lifelong Learning
Gregory V. G. O'DOWD

第29巻第2号 平成20年9月

論 文

- 企業の合併・買収による経営文化の変容
岡 本 博 之

- 新しい国際私法
 — 「法の適用に関する通則法」の解釈論 —
 New Act on General Rules
 on Application of Laws
杉 山 嘉 尚

- イギリス親子法における父権の効力と子の利益

— エクイティの介入とその法理論 —
東 和 敏
 田村直臣と花嫁事件：米人宣教師の報告を中心にして
梅 本 順 子
 人種・エスニシティの多様化が進む米国
 — 2000年の国勢調査(センサス)と
 複合人種を中心に —
加 藤 洋 子
 『黒いアテナ』論争と「長いprepuce」
 — M・バナールの仮説への単純な疑問 —
石 渡 利 康
 Structural Difference in the Ways of Expression
 in Translation between Japanese and English (1)
 Expressions with Intransitive Verbs
 and Transitive Verbs
Yoshiaki OKADA
 最初の御札降り地域(三河国吉田宿附近)の諸信仰
 — 御鋏様と牛頭天王 —
田 村 貞 雄
 The Structure of Alain Resnais' film
La Vie Est un Roman Part 3
 Michael Ian CHAPLAN
研究資料
 『何物語』— 解題と翻刻 — (一)
矢 崎 浩 之

第29巻第3号 平成20年12月

論 文
 イギリス正統派経済学の
 受容過程におけるお雇い外国人の貢献
大 淵 三 洋
 無形資産の総合的研究
豊川和治・雨宮史卓
 寛 正治・北川道男
 海外直接投資と国際技術伝播
 — 途上国経済へのspillover効果を中心に —
清 水 隆 雄
 ガーナにおける民主化と市民社会：
 政治参加の類型と機能
六 辻 彰 二
 田村直臣と児童文学：児童書の発行を中心にして
梅 本 順 子
 不確実性減少理論と集団
西 田 司
 Mrs. Robert C. Morris and Yokohama
 — Her Understanding about Japan's Society
Masaki HAMAYA
 Ethnicity and Folk Medicine
 — Ethnic Interaction of Folk Healers in the
 Multi-ethnic Settings in North Sumatra, Indonesia
 Masanori YOSHIDA
 ユーヘメリズムと北欧神話の主神オーディン実在説
 — ヘイエルダールの仮説と古代欧州における
 神話的域際関係 —
石 渡 利 康
 Structural Difference in the Ways of Expression
 in Translation between Japanese and English (2)
 — Subjective Language

and Objective Language —
Yoshiaki OKADA
 Sharing Behaviors of Saudi Students in
 an Intensive English Environment (Part One)
 Jason E. TACKER
 Teaching Second Language Writing
 Jason MYRICK
研究ノート
 The rise, decline and future
 of the Australian rice industry
 in the Age of the World Food Crisis
Gregory V. G. O'DOWD
研究資料
 『何物語』— 解題と翻刻 — (2)
矢 崎 浩 之
学会動向
 2008年度ボーダーランド学会の欧州大会
大 西 富士夫

第29巻第4号 平成21年2月

論 文
 アダム・スミスの受容過程に関する若干の考察
 — 『諸国民の富』を中心に —
大 淵 三 洋
 直接民主主義の事例研究：
 露店の道路占用をめぐる論争
葉 山 明
 変革する国際援助の枠組み
秋 山 孝 允
 東アジア地域経済統合と日台経済協力
陳 文 挙
 郭 国 興
 田村直臣と足尾鉍毒問題
梅 本 順 子
 Study of the Japanese
 and Foreign Culture in Japan
 — In the Case of Yoshihiko Yoshimitsu —
 Akira TAKAHASHI
 移住後半世紀が過ぎたボリビア
 日本人移住地の様相と問題点の究明
福 井 千 鶴
 「ゲルマンの夕食会」における絵画の挿話の生成過程
荒 原 邦 博
 古典的西部劇
 『リバティー・バランスを射った男』に見る
 「不条理的義侠心」とその周辺
 — ウェスタンオロロジー文化論 —
石 渡 利 康
 「サルバドール・ダリに捧げるオード」に関する一考察
内 田 千 重 子
 戊辰戦争期における落書・落首・張札
 — 「長防珍説風聞記」を中心に —
田 村 貞 雄
 異文化の対人関係とセルフ・モニタリング
内 藤 伊 都 子
 徳川義直と堀杏庵
 — 神儒一致論に注目して —
矢 崎 浩 之

「19世紀の静岡県御厨地方とフランス
ペリー地方における伝統的な食事の比較」
……………渡辺洋子
英語学習の態度と言語環境への意識との関連要因の研究
— 大学生の場合 —
……………上原義正
Re-evaluating Work Skills in the EFL
Curriculum in Japanese Universities
……………Nathan DUCKER
A CURRICULUM FOR JAPANESE
AS A SECOND LANGUAGE DESIGNED
FOR ENGLISH-SPEAKING
DYSLEXIC LEARNERS
……………Sean Thomas McCOLLUM
研究ノート
国際貿易, 海外直接投資と企業の異質性
……………清水隆雄
学会動向
第3回トルヴァール・ストルテンベルグ・シンポジウム
……………大西富士夫
研究報告
Cooperative Learning (CL):
A Possible Solution for Heterogeneous Classes
……………Natsuko IMAOKA

第30巻第1号 平成21年10月

論文
欧州連合の深化と拡大に関する若干の考察
— 経済的側面を中心にして —
……………大淵三洋
国籍法違憲判決と国際私法
……………杉山嘉尚
ヨーロッパにおける地域的規範としての文化権の形成:
オーランド諸島の事例
……………大西富士夫
The American shopping in Japan
of the latter nineteenth century
……………Masaki HAMAYA
Process of transition through the life course:
the identification of the developmental stages
in the Javanese life cycle
……………Masanori YOSHIDA
Mi votu e mi rivotuとNinna Nanna malandrineddu
— 南伊カラブリアにおける「仁」と「義」 —
……………石渡利康
遠江への秋葉信仰の伝来と分岐
……………田村貞雄
Sharing Behaviors of
Saudi Students in an Intensive
English Environment (Part two)
……………Jason TACKER
The Necessary Cultural Component of
English Language Education in Japan
……………Nathan DUCKER
研究ノート
The Structure of Alain Resnais' Film
La Vie Est un Roman Addendum
……………Michael Ian CHAPLAN

第30巻第2号 平成22年2月

論文
天野為之の『米国税論』と『公債論』に関する若干の考察
……………大淵三洋
A.マーシャルの貿易論
……………小林通
1827年ウェルズレイ対ボーフォート (Wellesley v. Beaufort)
訴訟における子の利益原則の法理論的構造
……………東和敏
海賊行為に対する普遍的管轄権
— その理論的根拠に関する学説整理を中心に —
……………安藤貴世
The Japanese Communist Party and
MacArthur's General Headquarters
……………Ruriko KUMANO
団体課税における基礎理論と法人課税～みなし個人課税
……………鶴藤俊英
現代ガーナにおける女性の権利保護:
人権, 慣習, 政治の交差点
……………六辻彰二
1893年シカゴ万博における「大衆的民族学」
— パットナムとブルームの比較 —
……………宗形賢二
Healing Power and Healing Ritual:
Three Different Approaches to the Healing Rituals.
……………Masanori YOSHIDA
Jack Palance: The Forest of Love.
A Love Story in Blank Verse に見る「人樹共生」思想
……………石渡利康
友人関係におけるサポートと期待の分析
— 日本人と異文化の友人のケース —
……………内藤伊都子
「羅生門的接近」を活用した授業改革のプロセス
— 観光を媒体とする「インターネット英語」を
実践事例として —
……………上原義正
The Impact of Globalization in Education
……………Allan A. EVANS
戦後のコメ政策の歴史の変遷と課題について
……………山中康資
研究ノート
Teaching L2 Speaking: Its History and A Recent View
……………Natsuko IMAOKA
研究報告
A System for Effective Vocabulary Learning and
Teaching Using Text in the EFL Classroom
……………Jeffrey Scott SINDING

第31巻第1号 平成22年10月

論文
ナノ材料のリスク評価のためのコンセンサス形成と
化学物質の規制政策立案プロセスの新潮流
……………堅尾和夫
国家安全保障, 情報技術革命と米国の留学生政策
— 科学技術分野のヴィザ規制と輸出規制を切り口に —
……………加藤洋子
1725年アイア氏 (Mr. Eyre) 対シャフテスバリ伯爵夫人

| | |
|--|--|
| (Countess of Shaftesbury) 訴訟における 後見人の権限と子の利益原則との関係東 和 敏 | |
| 明治の日本陸軍における近代戦略論の受容浅 川 道 夫 | |
| Prospects and Challenges of an East Asian Regional Security Framework: Veto Players and Winsets Alexander C. TAN and Takayo ANDO | |
| メドヴェージェフ大統領とプーチン首相による タンデム（2人乗り）政権の分析石郷岡 建 | |
| Economic Lessons Not Yet Learnt: Why Another Financial Crisis Will Soon Follow Gregory V. G. O'Dowd | |
| インドネシア・北スマトラにおける 残留日本人の異文化結婚： 一世配偶者とその家族の事例から（その2）吉 田 正 紀 | |
| Protestant Missionaries in Late Nineteenth-Century Ch'ing China Ruriko KUMANO | |
| 南イタリアに見る「生」と「死」の原風景 —名誉，恥，復讐—石 渡 利 康 | |
| Modern Testing Issues: Shifting from Paper-based to Computer-based Tests Jason MYRICK | |
| Investigating Applications of the Lexical Approach for East Asian University Students, Focussing on English Academic Vocabulary Elcome CARY | |
| Higher Education L2 Learner Motivation in an Asian Context Garth BRENNAN | |
| 研究ノート | |
| 「内国植民地としての北海道」補論 —「内地」と「外地」、そして「固有の領土」—田 村 貞 雄 | |
| 今次（2008年～2010年）の金融大収縮 —その原因と問題点—安 井 昭 | |
| 第31巻第2号 平成23年2月 | |
| 論 文 | |
| 内部監査人報告書の開示と コーポレート・ガバナンスの透明性北 川 道 男 | |
| イデオロギーの幻想「恋の逃避行」西 鋭 夫 | |
| 情報公開の事例研究 公安委員会の処分取り消し請求にかかわる 判決書をめぐって葉 山 明 | |
| ドイツ第三帝国における政軍関係 —1941年・東部戦線の場合—吉 本 隆 昭 | |
| 近年の先進国から途上国への資金の流れ —開発援助への影響— | |

| | |
|--|--|
|秋 山 孝 允 | |
| 国際テロリズムに対する法的規制の構造 —“aut dedere aut judicare”原則の解釈をめぐる 学説整理を中心に—安 藤 貴 世 | |
| 支那事変前における 日本陸海軍の航空連携についての一研究佐々木 久 信 | |
| ニーチェの近代文化批判とそのアクチュアリティ平 野 明 彦 | |
| アジア系アメリカ人と白人との 賃金格差を考察する上での生計費の重要性武 井 勲 | |
| 異文化受容の諸相 —牡丹と鷓鴣をめぐる考察—池 間 里 代 子 | |
| 「注視」の様態 — <i>The Book and the Brotherhood</i> に描かれた 三種の視力—村 井 和 子 | |
| 英語e-Learningコースにおける学習過程と結果の考察豊 川 和 治 | |
| 『亜細亜言語集』の中のアル化語彙 —明治期における中国語教材の探求—林 怡 州 | |
| 研究ノート | |
| スウェーデン日刊紙『アフトンプラデーット』・ イスラエル間の報道論争 —報道の自由とその周辺—石 渡 利 康 | |

第32巻第1号 平成23年10月

論 文

| | |
|--|--|
| 2010年の米国の国勢調査（センサス）と代議制民主主義 —スペイン領アメリカの遺産—加 藤 洋 子 | |
| フランシス・バイコンの租税観吉 田 克 己 | |
| 中国山東省経済発展と産業構造調整について陳 文 拳 | |
| テロリズム防止関連条約における 「引き渡すか訴追するか」原則の成立 —「航空機の不法奪取の防止に関するハーグ条約」の 管轄権規定の起草過程をめぐって—安 藤 貴 世 | |
| ユラン法（Jyske Lov）前文の法諺 Meth logh skal land bvgiaes —法治主義と道治思想—石 渡 利 康 | |
| 中国の資本主義 —中国の改革開放による資本主義への移行—蔡 飞 | |
| アイゼンハワー政権期における米国の安全保障と宇宙開発 —U-2型偵察機計画との関連で—永 井 雄 一 郎 | |
| 日本国土が狙われる（第1部） 駐日領事プラントの蝦夷地（北海道）植民地化の概略と それにかかわったゲルトナー兄弟の出自 | |

..... アンドレアス H. バウマン
 アジア系アメリカ人男性の地域移動,
 居住地域と所得の関連性
武井 勲
 フロベール『ヘロディア』と
 ワイルド『サロメ』の比較研究
 —二人のサロメをめぐる感覚表現—
橋本 由紀子
 荷風と『紅樓夢』
池間 里代子
 ミルトンと自然
 —正しき理性の観点から自然法へ—
岡田 善明
 The Importance of Teaching Critical Thinking and
 Content Based Programs in an EAP Setting
 Garth BRENNAN
研究ノート
 小泉政権下での日中関係基本構造の変化
黒川 祐次
 “Otherness” in *The Cheat* (Part 1)
 Michael CHAPLAN and Miyako HADA

第32巻第2号 平成24年2月

論文

産業移転と河南省の経済発展
陳 文 挙
 オレンジ革命の終焉とウクライナの東西対立
 —2010年ウクライナ大統領選挙の分析を中心に—
石郷岡 建
 田村直臣の留学再考：オーバーン神学校時代を中心に
梅本 順子
 アーレントの「公的領域」に関する一考察
 —ヤスパースの「コミュニケーション」論めぐって—
平野 明彦
 古典的西部劇に見る「去りゆく男」の情景
 —ウエスタンオロジー文化論—
石渡 利康
 白居易の共感覚表現について
中元 雅昭

研究ノート

19世紀転換期アメリカの検閲(1):
 コムストック法とYMCAの時代
宗形 賢二
 Interviewing EFL Teachers
 Marcus GRANDON

第33巻第1号 平成24年10月

論文

アリゾナ州移民法(S.B.1070)とアメリカの不法移民規制
 —その歴史的背景—
加藤 洋子
 「国家代表等に対する犯罪防止処罰条約」における
 裁判管轄権規定(1)
 —絶対的普遍的管轄権の設定をめぐる起草過程の検討—
安藤 貴世
 中国の食品安全問題と食品特別供給制度
 —「構造的暴力」の視点から—

.....杜 震
 ネパールの社会開発における
 マイクロファイナンスの活動と
 ソーシャル・キャピタル
青木 千賀子
 歌詞の域際変容とその背景
 —*Vitti na crozza supra nu cannuni* (シチリア),
Dāvāja Māriņa meitiņai mūžiņu (ラトヴィア),
Дорогой Длинною (ロシア)の3つの事例分析と
 歌詞域際変容の典型的成功例としての
 イタリア語の *Quelli erano giorni* (過ぎ去った日々)—
石渡 利康
 Native Speaker Myths:
 What Pre-School Students’ Parents Think
 about English Education in Japan
 Hideyuki KUMAKI
研究ノート
 Students Perception of a Content-Learning Tasked Based
 Activity that Uses Authentic Material to Promote
 Meaningful Conversation
 Garth BRENNAN

第33巻第2号 平成25年2月

論文

ナノテクノロジー規制政策の立案構造と
 科学的知識基盤としての学界の役割
 —バイオテクノロジー規制政策を例として—
堅尾 和夫
 「国家代表等に対する犯罪防止処罰条約」
 における裁判管轄権規定(2・完)
 —絶対的普遍的管轄権の設定をめぐる起草過程の検討—
安藤 貴世
 IL CODICE BARBARICINO と S’IMBIATU
 —サルディニア法の国法外性と土着性—
石渡 利康
 欧米女性が見た明治期の日本：日本女性観を中心に
梅本 順子
 ミレニアム目標達成に向けた貧困改善手法の考察
福井 千鶴

研究ノート

Simplifying the teaching of articles (a, an, the)
 to the Japanese English Language Learner
 Paul A. R. ROWAN
 Design choices and issues in Likert-item questionnaires
 Marcus GRANDON

第34巻第1号 平成25年10月

論文

詐欺・強迫規定の起草過程
小野 健太郎
 人の移動規制と州権
 —南北戦争前のアメリカを中心に—
加藤 洋子
 ペティ租税論の実践的性格
 —国富の増進—
吉田 克己
 古典派の貿易論

| | |
|-----------------------|---|
|小林 通 | 『北極環境保護戦略 (AEPS)』と フィンランドの外交イニシアティブ |
|大西 富士夫 | 黄興と宮崎滔天の関係 —辛亥革命における宮崎滔天と家族の役割— |
|井上 桂子 | ネイティブ・アメリカンと貧困 |
|武井 勲 | サルヴァートル・アダモの“Tombe la neige” —アダモ私論1:「白と黒の心象詩」に関する考察— |
|石渡 利康 | Motivational Differences for Students Learning Languages Hideyuki KUMAKI |
| 資 料 | |
|Masanori YOSHIDA | Anthropological Study of Folk Medical Practices in the Multi-ethnic Settings of North Sumatra, Indonesia |

第34巻第2号 平成26年2月

論 文

| | |
|---------------------|--|
|豊川 和治 | 日中のICT産業の比較研究 |
|法専 充男 | 先進国のディスインフレと中国の物価動向 |
|吉田 克己 | ペティの『賢者一言』と戦時租税論 |
|陳 文 挙 | 中国のサービス産業の発展に対する一考察 |
|岡本 博之 | 東アジアにおけるエネルギー協力体制の確立 |
|梅本 順子 | ラフカディオ・ハーンとジョージ・ワシントン・ケイブル: 「クレオール」の文学という視点から |
|福井 千鶴 | 100年が経過する南米日系社会の形成と変容 |
|石渡 利康 | 「エイδος」(Eidos) と「影」 —影の見方に関する小考— |
|岡田 善明 | レイモンド・チャンドラーから村上春樹へ —仮説のモラルの構築— |
|Marcus GRANDON | Exploring student attitudes toward video-based lessons |

研究ノート

| | |
|-------------|-------------------------------|
|小野 健太郎 | 明治期の強迫 (民法96条) 規定に関する学説・判例の展開 |
|-------------|-------------------------------|

第35巻第1号 平成26年10月

論 文

| | |
|------------|---|
|石渡 利康 | 「ヤンテの法」と「価値ニヒリズム」 —北欧福祉平等社会の基礎表象と変容— |
|楠本 眞司 | 米国製薬業界の大型合併動向の意味するもの —産業循環の視点から— |
|安元 隆子 | チェルノブイリ原発事故をめぐる言説 (2) |

| | |
|--------------|--|
|安元 隆子 | グードルン・パウゼヴァング『みえない雲』を読む |
|雨宮 久美 | 橋の文化的意味 —聖と俗の架け橋— |
|安藤 栄子 | 英語劇を取り入れた授業の効果 |
| 研究ノート | |
|大西 富士夫 | 国際社会論とその批判 —国際秩序の概念の検討を中心に— |
|梅本 順子 | ラフカディオ・ハーンの友人, A.E. ルーケットとG.W. ケイブル —ルーケットのケイブル批判の小冊子を中心に— |

第35巻第2号 平成27年2月

論 文

| | |
|------------|---|
|安藤 貴世 | 国際刑事裁判所とテロリズム —国際刑事裁判所規程の起草過程における テロリズムの扱い— |
|石渡 利康 | 2つの『インシャラー』(Inch'Allah) —「アダモロジー」2: 歌詩の表象変化に関する考察— |
|平野 明彦 | アレントとヤスパース —二人のカント解釈をめぐる— |
|福井 千鶴 | 日本の食料自給率の向上と南米の日系人の農業生産の役割 |
|松浦 康世 | 日本語教育と多文化共生への取組 —静岡県内のボランティア団体等の活動を中心に— |

研究ノート

| | |
|------------------------|--|
|Gary J. HENSCHIED | Cognitive Theory and Motivation in the EFL Classroom |
|------------------------|--|

第36巻第1号 平成27年10月

論 文

| | |
|------------|---|
|加藤 洋子 | The United States of America と The United States of Europe —その連邦制への道のり— |
|法専 充男 | 公的年金の将来: 鍵を握る賃金・物価と労働生産性 —2014年財政検証を基に— |
|安藤 貴世 | 国際刑事裁判所の対象犯罪拡大の可能性とテロリズム —テロリズムの追加に関するオランダ改正案に 注目して— |
|石渡 利康 | 北欧最古の成文法 —「フォッシュャのルーン文字環」(Forsa runeringen)— |
|安元 隆子 | チェルノブイリ原発事故をめぐる文学 (3) 若松丈太郎詩論 —現実凝視と飛躍する想像力— |

A Study in Critical Discourse Analysis:

The Prince and “the missus”

..... Maria DEL VECCHIO

日本における牡丹と獅子文化の形成と謡曲『石橋』

.....雨宮久美

データアナリティクスを用いる

大学教育支援環境の検討

.....豊川和治

Creating Flow in English Conversation Classrooms:

A follow-up study on Variable Sentence Response
and Conversation Cards

..... Nathaniel FRENCH

研究ノート

記号式投票:

市議会議員選挙における投票方法の改正私案

.....葉山明

円安下でも高い水準を維持する

日本の対外直接投資ASEAN投資に脚光

.....笈正治

米国の北極政策の政策文書

.....大西富士夫

第36巻第2号 平成28年2月

論文

コミュニティ形成による

低所得層農民の新しい貧困改善手法の考察

.....福井千鶴

『クラウディアの祈り』を読む

—不条理に翻弄された愛とその超克—

.....安元隆子

他異権・難民・ヘテロトピア・文化価値摩擦

—スウェーデンの難民大量受入れ問題—

.....石渡利康

新安郡のキリスト教と島民生活

.....金美連

A Contemporary Perspective on the Benefits of Teaching an
Integrated Content/ESL course Specific to a Discipline

.....Jody A. FRIBERG

執筆者一覧

〈掲載順〉

| | | |
|-----------------|------------|-------|
| 福井 千鶴 | 日本大学国際関係学部 | 教授 |
| 安元 隆子 | 日本大学国際関係学部 | 教授 |
| 石渡 利康 | 日本大学国際関係学部 | 名誉教授 |
| 金 美連 | 日本大学国際関係学部 | 非常勤講師 |
| Jody A. FRIBERG | 日本大学国際関係学部 | 助教 |

国際関係研究

第36巻 第2号

平成28年2月29日 発行

編集者 渡邊 武一郎
発行所 日本大学国際関係学部
国際関係研究所
〒411-8555 静岡県三島市文教町2丁目31番145号
電話 055-980-0808
FAX 055-980-0879
印刷所 みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 静岡県沼津市沼北町2丁目16番19号

ISSN 1345—7861

STUDIES IN
INTERNATIONAL RELATIONS

VoL.36 No.2 February 2016

Institute of International Relations

College of International Relations

Nihon University

Mishima, Japan

<http://www.ir.nihon-u.ac.jp/>